
**ヴィクトリア朝文学における都市生活者の狂気：
その社会的および心理的文脈の解明**

**平成 17 年度～平成 19 年度科学研究費補助金
基盤研究（C）研究成果報告書**

課題番号 17520162

平成 20 年 3 月

**研究代表者 松岡光治
名古屋大学大学院国際言語文化研究科 教授**

目 次

| | |
|--|-----|
| はじめに | 1 |
| 第1部 ディケンズと狂気 | 5 |
| Notions of Madness in the Works of Dickens | 7 |
| ディケンズにおける自殺の諸相 | 27 |
| ディケンズの作品におけるイジメの問題 | 37 |
| 第2部 都市生活者の狂気 | 51 |
| ギッシングと都市—自分のいない場所がパラダイス | 53 |
| 『大いなる遺産』—逆様の世界と自己欺瞞 | 69 |
| 第3部 狂気と罪悪感の投影物としての幽霊 | 85 |
| Madness and Ghosts: The Presentation of Childhood in <i>The Turn of the Screw</i> and <i>Great Expectations</i> | 87 |
| (翻訳:幽霊物語①) メアリ・エリザベス・ブラッドン作「クライトン館の謎」 | 99 |
| (翻訳:幽霊物語②) J・S・レ・ファニユ作「オンジエ通りの怪」 | 129 |

はじめに

本研究は、ヴィクトリア朝の文学テキストを一次資料とし、そこで克明に描写されたイギリスの都市生活者に観察できる狂気の諸相に焦点を定め、人間が一定の社会的状況のもとで示す行動の法則性を突き止め、様々な社会的要因と個人の心理状態との相関関係を明らかにしたものである。

第1部の「ディケンズと狂気」ではディケンズの作品における狂気概念を詳しく調査し、狂気の結果としての自殺（神の似姿を殺す大罪と見なされる自殺）および狂気に支配された時代精神や社会風潮が「抑圧の移譲」として黙認するイジメに関して分析した。狂気の問題を論じた批評家のほとんどは、ディケンズが描く狂気は真実と虚偽が区別をなくしている状況、つまり社会の矛盾と欠陥に起因するという環境決定論に偏っている。しかし、彼の作品には階級、人種、ジェンダーに対する根強い偏見についての暗示的な言説が見られ、狂気についても生得的なもので死ぬまで消えないという考えが読み取れる。特定の個人には狂気の遺伝子があって、そのスイッチがオンになるかオフになるかは環境が左右するというのがディケンズの見解で、その意味で社会環境の重要性が暗示されていると言える。ディケンズの狂気についての見解は生まれか育ちかという単純な二者択一では記述できないのである。

ヴィクトリア朝の作家たちが描く狂気については、近代において狂気が隔離、監禁、排除されたとするフーコーの見解を援用し、狂気を権力の側による沈黙の強制の結果として読む、そうした安易な解釈に流れる傾向が国内の英文学研究に多く見られるが、被支配者を狂気に駆り立てる支配者の側の狂気が暗示された言説を見落としてはならない。権力者は自分の価値観から逸脱するものを狂気と見なすわけだが、それは自分が理解できないという劣等性を狂気という形で相手に投影し、それを外的なものとして認知する、いわば自我安定のための無意識的戦略に他ならない。ディケンズの小説に見られる狂気の考察を踏まえて行なった、このような権力の背後に潜む狂気の社会的および心理的文脈を分析した英語論文は、国内外の英文学研究に一石を投じるであろう。

第2部の「都市生活者の狂気」では、後期ヴィクトリア朝を生きたギッシングと彼が先輩作家として敬意を払って批評書まで書いたディケンズの作品を考察の対象にした。ヴィクトリア朝の小説テキストには、社会問題（階級、人種、ジェンダー、都市、大衆、教育、結婚、家庭、金銭、商業、芸術、科学など）に矛盾した感情を抱き、その激しい葛藤に絶えず苦悩する都市生活者が数多く描かれている。このような相克の苦悩は、産業革命後に前近代的な帰属意識を喪失し、都市空間における孤立によってアイデンティティの危機に陥った近代人の宿命だと言える。ギッシングの最晩年にロンドンに留学した漱石は、『それから』の代助に「文明は我等をして孤立せしむるものだ」と解釈させたが、本研究では

イギリス近代の文明社会が人間に強い疎外感の結果として生じた狂気を詳しく分析した。また、同時代の文学以外の領域（主に政治、経済、医療）の文献と各種ジャーナルに見られる狂気の言説との比較検討によって、都市生活者の狂気に関する社会的および心理的文脈の解明に努めた。

第3部の「狂気と罪悪感の投影物としての幽霊」では、これまで様々な解釈を許容してきたヘンリー・ジェイムズの『ねじの回転』と、彼が「インスピレーションが欠け、空想には生彩がなく、牽強附会が見られ、機械的になっている」と評したディケンズの『大いなる遺産』とを比較し、それぞれの主人公たちの心理状態と幽霊体験との相関関係を明らかにした。彼らの共通点は、罪の意識から精神的な歪みが生じ、一種の狂気の状態と幽霊という幻想（医学的に見れば、幻覚）を見ていることである。ヴィクトリア朝の時代精神と社会風潮から言えば、産業革命を経て急激に複雑化した都市、その結果として都市生活者が無意識的に受け入れてしまった近代社会の価値観のせいで、当時の人間の正気と狂気の境目は非常に曖昧になっていた。産業革命後の発展を享受するヴィクトリア朝の人々は、自分とは関係ないものとして捨て去ってしまった過去に対する無意識的な罪悪感を抱いていたからこそ、キリストの生誕を意識して罪悪感が最も刺激されるクリスマスの時期に、そうした抑圧された過去の復讐を幽霊という外在化された形で恐れたのである。

なお、このような観点に立って人間の心に潜む狂気を描いたヴィクトリア朝の小説家、メアリ・エリザベス・ブラッドンとJ・S・レ・ファニユの幽霊物語をそれぞれ翻訳し、報告書に収録した。

平成20年3月

研究代表者 松岡光治

1. 研究課題

基盤研究 (C) 課題番号 **17520162**

「ヴィクトリア朝文学における都市生活者の狂気：その社会的および心理的文脈の解明」

2. 研究組織

研究代表者 : 松岡 光治 (名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授)

3. 交付決定額 (配分額)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|----------|----------|--------|----------|
| 平成 17 年度 | 1,200 千円 | 0 千円 | 1,200 千円 |
| 平成 18 年度 | 900 千円 | 0 千円 | 900 千円 |
| 平成 19 年度 | 600 千円 | 180 千円 | 780 千円 |
| 総 計 | 2,700 千円 | 180 千円 | 2,880 千円 |

4. 研究発表

(1) 雑誌論文

(a) 松岡光治「ディケンズの作品におけるイジメの問題」『年報』第 30 号 (ディケンズ・フェロウシップ日本支部、2007 年 10 月) 103-17 頁.

(b) 松岡光治「ディケンズの作品における自殺の諸相」『年報』第 29 号 (ディケンズ・フェロウシップ日本支部、2006 年 10 月) 40-49 頁.

(2) 図書

(a) 松岡光治 (編著)『ギッシングを通して見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化 (生誕百五十年記念)』(溪水社、xiii+540 頁、2007 年 11 月)

(b) 松岡光治 (共編著)『ディケンズ鑑賞大事典』(南雲堂、838 頁、CD-ROM 付、2007 年 6 月)

(3) 翻訳

(a) 松岡光治 (訳) J・S・レ・ファニュ (著)「オンジエ通りの怪」『言語文化論集』第 28 巻第 1 号 (名古屋大学大学院国際言語文化研究科、2006 年 10 月) 1-25 頁.

(b) 松岡光治（訳）メアリ・エリザベス・ブラッドン（著）「クライトン館の謎」
『言語文化論集』第 27 巻第 1 号（名古屋大学大学院国際言語文化研究科、2005 年
10 月）1-34 頁.

(4) 書き下ろし

(a) Mitsuharu MATSUOKA, “Notions of Madness in the Works of Dickens,” 19p.

(b) Mitsuharu MATSUOKA, “Madness and Ghosts: The Presentation of Childhood in *The Turn of the Screw* and *Great Expectations*,” 11p.

ディケンズにおける自殺の諸相 Aspects of Suicide in the Works of Dickens

松岡光治
Mitsuharu MATSUOKA

1. 罪としての自殺

「自殺者」の法律用語は“felo-de-se”であり、これはラテン語で「自分に悪を働く者 (evildoer upon himself)」を意味する。ヴィクトリア朝の人々は自殺を不道徳で不面目な悪と考えていたが、それがキリスト教の影響であることは言うまでもない。「神は人を自身の形に創造された」(Gen. 1: 27) と語られる聖書の観点から言えば、自殺は神を殺すことに他ならず、許しがたい大罪である。従って、イギリスの民法では 10 世紀から、自殺者は心臓に杭を打ちつけて十字路の脇に葬られ、財産はすべて国王に没収されてきた。そのためか、身内に自殺者が出ると、家族はそのことを隠して、キリスト教の儀式をせずに夜こっそりと埋葬していた。「『メリー・クリスマス』などと触れまわる大馬鹿野郎は、どいつもこいつもプディングと一緒に茹であげ、心臓に^{ひいらぎ} 柁の杭を突き刺して埋めてやる」(Carol, 1) というスクルージの発言は、そうした伝統的な民法に準拠したものである。そして、この不名誉で苛酷な埋葬は 1823 年に廃止されるまで続けられ、財産没収の方は 1870 年まで法律で認められていた。

このような蛮刑はクウィルプのように残忍で狡智にたけた悪の権化にこそ似つかわしい。テムズ河の岸に打ち上げられたクウィルプの死体に関しては、世間の人々が自殺だと噂したために、検死陪審の評決でも自殺となり、「心臓に杭を突き刺して、寂しい四つ辻の中央に埋められることになった」(OCS, 73)。そのせいか、フィズが描いた挿絵は河岸の杭がクウィルプの心臓に突き刺さっているように見える。結局、この蛮刑は適用が中止され、死体は密かに雇い人トム・スコットに引き渡されることになるが、彼によって真夜中に墓から掘り出され、「未亡人が指示した場所」へ運ばれたという噂が流れる。では、クウィルプ夫人が指示した場所とはどこか。具体的には書かれていないが、ここでギャンプ夫人がガイ病院で死んだ夫の遺骸を「医学のために処分した」(MC, 19)、つまり解剖医に売り飛ばしたという噂を連想するのは、決して筆者だけではない。



キリスト教では自殺が宗教的な罪と見なされるので、そのことが自殺の抑止力になって

いる。ところが、イエスの死は自発的に生命を差し出した自殺だという意見もある。確かに「キリストは私たちのために自分の命を捨てられた」(1 John 3: 16) と記されているが、ここで命じられているのはキリスト者が自己犠牲的な愛をもって兄弟を愛することであり、その意味で自殺と自己犠牲とは峻別しなければならない。現実逃避のための自殺は自分を楽にするための利己的な行為であるのに対し、イエスが人類の罪を背負って十字架で死を受け入れた自己犠牲は利他的な行為、すなわち愛の謂に他ならない。シドニー・カートンの死もまた、ルーシーへの愛を証明するための単なる利己的な自殺ではなく、自己犠牲的なキリストの愛の意味合いが強い。その証拠に、ルーシーのみならず馬車に乗せられてギロチンに運ばれるお針子にとっても、カートンは「神様がお遣わしくくださった方」(TTC, 3: 15) となっている。

2. 入水自殺と投身自殺

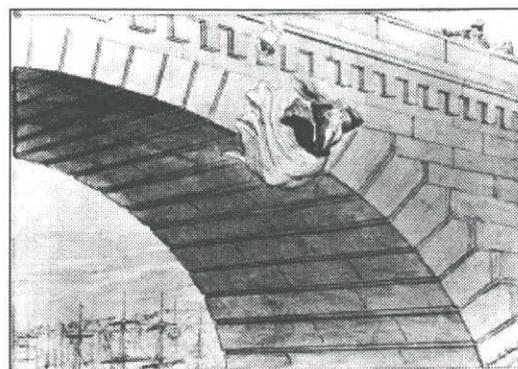
市参事会員キュートは、不愉快なことを自分の前で決して口にさせない『リトル・ドリット』のジェネラル夫人のように、自分に都合の悪いことには必ず禁止 (Put Down) のお触れを出す。特に子供を連れた病気の女による自殺は論外である。「もし自暴自棄になって、恩知らずにも、不敬なことに、欺瞞を働き、身投げか首吊り自殺を図っても、わしは少しも気の毒とは思わんぞ」(Chimes, 1) と言って自殺を禁止する。彼は、貧しい娘が結婚などしようものなら、すぐに子供(なぜか男の子)ができ、夫が早死にしていまい、子供を抱えたまま浮浪者となり、病気になって働けず、最後は自殺するに決まっていると主張するが、この愚説は彼にとっては広く認められた正しい説に他ならない。これは、とある新興宗教団体の主宰者が連呼する定説のように荒唐無稽に聞こえるが、実際には似たような定説(というか、俗説)がヴィクトリア朝の人々の間で共有されていた。

例えば、墮ちた女の人生行路に関しては、田舎から都会に出た無産階級の美しい娘が有産階級の紳士に誘惑され、身ごもって捨てられ、不義の子を抱えて自立できずに街の女となり、やがて性病で街に立つことができなくなって貧困と後悔に苛まれ、最後は絶望の果てに川へ入水自殺か投身自殺をするという、当時の人々が思い描いていた図式がある。このような人生行路は、清らかな田舎から汚れた都会へ流れ込み、最後は死の海へ到達する川のイメージによって暗示されることが多い。デイヴィッドとペゴティー氏がマーサ・エンデルの入水自殺を阻止する際の「川は、私の人生みたいに、いつも荒れ狂う大海へ流れ込む——だから、私も川と一緒にいかなきゃいけないの」(DC, 47) という彼女の悲痛な叫びには、この図式が端的に現れている。

ジョージ・F・ワッツはトマス・フッドの詩「溜息の橋」(1844) に着想を得て、『入水自殺』(Found Dead, 1848-50) でウォータルー橋のアーチの下に打ち上げられた女性の死体を描いたが、この橋は自殺の名所として^{つと}夙に有名であった。1817年6月18日のオープン以来、この橋のアーチは宿なしたちが風雨をしのぐ^{すみか}住処——経験者サム・ウェラーの言葉

を借りれば、2ペニーの木賃宿に泊まる余裕もない人々にとって「家具のない宿」(PP, 16)——となった。この橋については、夜の散策をする無商旅人が半ペンスの渡し料を払って通るとき、「テムズの河面に映った灯火は深い川底から発しているように見えたが、それはまるで亡霊たちが自殺者たちの落ちて行った先を示すために掲げているかのようであった」(UT, 13)とディケンズは記している。

落ちた女が川で自殺する場合、上記の入水自殺とは別に、クルークジャンクの「哀れな娘の自殺」(“The Poor Girl Homeless, Friendless, Deserted, Destitute, and Gin-Mad Commits Self-Murder,” *The Drunkard's Children*, 1848)に見られるように、橋の上からの投身自殺がある。無商旅人がロンドン・ドック近くのウォッピング女子救貧院に行く途中で渡るオールド・レーン橋もまた、「嘆きの橋」という別名



を持つ自殺の名所であった。この橋に幽霊のように立っていた若者は、「走りながら婦人帽や肩掛けをかなぐり捨て、ここから真っ逆さまに飛び込むんだ、どいつもこいつもね」(UT, 3)と無商旅人に教えてくれる。ただし、これは本当に死ぬための身投げではなく、飛び込んだ水音で発見され、熱い風呂に入れて蘇生してもらい、ウォッピング女子救貧院に收容されることを期待しての計画的な自殺である。

虚構の世界で入水自殺が題材として好まれた理由は、ラファエル前派の運動を起こしたミレーの『オフィーリア』(1852)に見られるように、溺死する娘には『ハムレット』のオフィーリアの美化されたイメージがあるからだ。『骨董屋』で語り手のハンフリー親方は、「溺死は苦しい死ではなく、自殺の中で最も安楽で最善の手段である」(OCS, 1)と言っている。だが、九死に一生を得た人の話によれば、実際の溺死は言語に絶する苦しさを伴うそうである。菊池寛に「身投げ救助業」(1916)という短篇があるが、どんなに覚悟をした自殺者でも、本能的に生を慕って死を恐れるような悲鳴をあげるので、「もしこの時救助者が縄でも投げ込むと大抵はそれを掴む」という。人間の性^{さが}であろうか。そして、たとえ自殺が成功して川底に沈んでも、やがて膨張して浮かび上がり、土左衛門となった死体は時間とともに腐食が進み、悪臭を放ち始めるそうだから、これはとても美しい死に方とは言えない。とは言え、ショーペンハウアーが「自殺について」(1851)の中でいみじくも言ったように、「並外れて激烈な精神的苦悩に責め苛まれている人の眼には、自殺と結びつけられている肉体的苦痛などは全く物の数ではない」のである。

ヴィクトリア朝の自殺における男女の比率は3対1ほどであったが、アイルランド独立運動を指導したパーネルの弁護士として有名なジョージ・H・ルイスは、1857年の『ウェストミンスター・レビュー』で女性の低い自殺率の原因を臆病さに帰している。当時の統計が示すように、自殺の手段として男性はピストルやナイフを使い、女性は溺死や服毒を

選んでいた。入水や投身による自殺は圧倒的に女性に多いが、男性もいないわけではない。『ボズのスケッチ集』のワトキズ・トトル氏はリージェント運河で自殺する。妻を溺愛する自信はあったものの、実際の夫婦生活が怖くて結局は結婚できずに失恋してしまう——そうした彼の生来の臆病さが、溺死を選んだ理由である。『クリスマス・ストーリーズ』の「学校生徒の物語」では、卒業生として母校の先生になった「チーズマン爺さん」が、先生の側に寝返った裏切り者として生徒たちのイジメに遭い、ある日ふいと（実際は遺産相続のために）姿を消してしまう。生徒の間では「チーズマン爺さんはもはや堪えきれなくなり、朝早く起きて身投げをしたんだという噂が広まる」が、これは彼の性格が女性のように弱々しいからであった。消息を断った甥のウォルターの跡を追い、船具商の老人ソル・ギルズが姿をくらすと、親友のカトル船長は老人が「ウォルターに対する心配と哀惜の念に圧倒されて自殺に追い込まれた」（*DS*, 25）という不安を抱き、テムズ河で溺死体が見つかり、せつせと身元確認のために足を運ぶ。ソル爺さんは商売とは裏腹に海の男らしさに欠け、ゆったりとした物静かな老人なので、自殺するのであれば女性のようにテムズ河で、という連想がカトル船長に働いたのかも知れない。ヘッドストーンは脅迫者ライダーフッドに「生きている貴様を抱き締めている俺の腕は、あの世に行っても離れんぞ」（*OMF*, 4: 15）と絶望的な声で叫びながら一緒に溺死するが、これは自縄自縛による自殺である。だが、計画がすべて潰えて自暴自棄となり、^{ディーセント}上品な外見の下に抑圧していた激情を爆発させ、ヘッドストーンが臆病な溺死の形で自殺したのは、「理性は男性、狂気は女性」というヴィクトリア朝の定説から言えば、別に不自然なことでもないだろう。

ディケンズの作品には、入水や投身による自殺の描写と言及が多いのに対し、絞首による自殺は意外と少ない。ラルフ・ニッケルビーが、喉を掻っ切って自殺した男の検死陪審を務めたことを思い出し、屋根裏部屋^{てつかぎ}の鉄鉤から自分を吊り下げたのは、不運にも命綱を首に巻きつけて宙吊りになるビル・サイクス（*OT*, 50）の場合と違って、明らかに自殺である。実子のスマイクの静かな死に対し、ラルフの自殺は「狂気と憎悪と絶望」（*MN*, 62）が交錯した激情のもとでなされる。我々はラルフとビル・サイクスの違いを意識せざるを得ないが、それは守銭奴のラルフが（スクルージのように改心するまでには至らないにせよ）時おり見せる良心の呵責のせいである。同じように、ライダーフッドには感じなかった憐れみをヘッドストーンに多少なりとも抱くのは、激情をコントロールできなかった彼の人間的な——ヴィクトリア朝のコンテキストで言えば、女性的な——弱さのためではあるまいか。

『アメリカ紀行』の第6章で紹介されるブロードウェイの「墓場」という有名な監獄の中庭は、イギリスの場合のように囚人が散歩をする場所ではなく、絞首刑が行われる場所である。この監獄が建てられた頃に自殺が数件あり、それで「墓場」と呼ばれるようになったわけだが、その自殺は絞首刑に対する恐怖ゆえの自殺だったに違いない。そして、ここの独房には服をかける鉤がない。「そんな鉤があれば、彼らは自分自身を吊ってしまう」からである。一方、ロード・アイランドの精神病院では、服をかける鉤どころか、空虚な

壁を除いて家具も飾りも何もない、そんな侘びしい食堂を独房として、一人の女が監禁されている。病院関係者の話では、女が「自殺しようと決心していた」というのが監禁の理由である。しかし、そうした絶望状態に彼女を追い込んでいるのは部屋の単調さであると言って、ディケンズは病院を皮肉っている。これもまた彼のアメリカに対する失望と幻滅から生まれたアイロニーの一つである。

3. 罪意識による自殺

罪意識による自殺の例としては、マードル氏とレディー・デドロックが挙げられる。最大の偽造者にして最大の泥棒だったことが判明する財界の巨頭マードル氏が、不安げに上着の袖口の下で両手を組み、「まるで自分で自分を拘束しているかのように」(LD, 1: 33) 手首を互いに握り締めるのは、彼が法律上の罪に対して抑圧している罪悪感の無意識的な行動化(acting out)に他ならない。従って、事実そのものを暗示するディケンズ特有の、この種の直喩に親しんでいる読者は、マードル氏が最後に大理石の浴槽で阿片チンキと鼈甲柄のナイフを使って頸動脈切断という自殺をした時も、彼の執事頭と同じように何ら驚きを覚えないはずである。

一方、レディー・デドロックには結婚前にホードン大尉との間に私生児エスターを産んで見捨ててしまったという、そして過去を秘密にして現在の夫を裏切ってきたという宗教上・道徳上の罪がある。彼女の罪は神の意志に反したことであり、その内面化した罪意識は冷たく高慢な外面によって隠されている。イスカリオテのユダはイエスを裏切って銀貨30枚で祭司長に売り渡したのち、その罪を後悔して銀貨を神殿に投げ込み、外に出て行って首を吊って自殺した(Matt. 27: 3-5)。最終的に家出をしたレディー・デドロックがホードン大尉の墓の入口で死んでいた原因についても、彼女は手紙の中で「家を出た時はもっと悪いことをするつもりでしたのに、今までの様々な罪に、もう一つ罪を重ねずに済みました」(BH, 59)と書いているが、バケット警部が言ったように「それは自殺のように思える」(BH, 56)。ジョン・サザランドは「誰がレディー・デドロックを殺したか？」

(1999)で彼女の自殺の手段をホードン大尉の死因と同じ阿片の服用だと推測した。その真偽はともかく、たとえマードル氏のように阿片を使っていないにせよ、罪悪感と後悔のために彼女の生きる意志が消滅している以上、彼女の死は「もっと悪いこと」(自殺)による死だと言わざるを得ない。



大いなる遺産を相続する見込みを得たピップは、希望に燃えてロンドンにやって来るが、

用意されていた下宿は薄汚い、悪臭のするバーナード・インの一角にあった。どういうわけか、「貸間あり」のビラに睨まれるピップの目には、「ここへ新しくやって来る哀れな人間が一人もいないので、現在の住人たちが次第に自殺して砂利床の下に不浄な埋葬をされることで、バーナードの復讐心は徐々に和らげられているように」(GE, 21) 見える。これはもちろんピップの無意識的な不安を投影した描写である。ここに、いずれ大いなる期待に対して失望し、マグウィッチと関係した法律上の罪意識ではなく、俗物根性から身内の者たちを見捨てた道徳上の罪意識から、ひょっとするとピップは自殺することになるかも知れないという作者の暗示を読み取ることはできまいか。無論、そうした自殺の可能性を払拭してくれたのは、汲めども尽きぬ義兄ジョー・ガージャリーの愛である。

4. 絶望による自殺

自殺の原因の大半は失望が深刻化した絶望である。しかし、絶望はキリスト教の三大徳「信・望・愛」の一つに背く行為であり、神の民すべてが到達するように招きを受けている未来の幸福、すなわち「永遠の生命」を人生の土台として生きていない点で罪と見なされる。統計的に昔も今も、最初から物質的困窮の度合いが高い人たちの場合は、生き抜くことに関心が向けられるので自殺が少ない。例えば、慢性の金欠病患者ミコーバー氏が自分を殺す可能性は、「決してミコーバー氏を見捨てません」と連呼する妻を殺す可能性と同じで、限りなくゼロに近い。彼が自殺でもしておれば、ディケンズの楽天主義もチェスタトンから「卑俗な楽天主義」と言われることはなかっただろう。だが、物質的な貧しさに負けない善良な人間は最後に幸せにならなければならない——そうでなければ、ディケンズは気がすまないのである。そうした卑俗な楽天主義を体現するミコーバー氏について、チェスタトンは『チャールズ・ディケンズ論』の第10章で次のように述べている。

過去を振り返って自分の生活が失敗だったと思う、そんな人のことばかりを我々はいつも考えるが、ミコーバーは決して振り返って見たりしない。彼はいつも前を見る。明日になれば執行吏がやって来るからだ。ミコーバーのことを人生の敗北者などと言ってはいけない。彼の馬鹿げた戦いは決して終わらないからである。彼は人生に絶望することを許されない。生きることで超多忙なのだから。

一方、最初は物質的に豊かであった人が、リストラ、失業、破産、その他の理由で、昔の自分に復帰できずに絶望的な状態に陥ると、鬱病などの精神疾患が自殺の大きな誘因となる。1998年から毎年、自殺者が3万人を超える日本は、2004年の国別自殺率の高さで10位にランクされているが、日本より上位はすべて旧ソ連や東欧の旧社会主義国であり、物質的凋落が自殺の大きな要因であることが分かる。しかし、こうした物質的凋落だけでなく、精神的凋落もまた強いストレスを伴って自殺の引き金となる。

精神的凋落による絶望からの自殺と言えば、ディケンズの生涯において真っ先に思い出されるのは、『ピクウィック・クラブ』連載時におけるロバート・シーモアのピストル自殺であろう。芸術家としての自分の地位について神経過敏だったシーモアは、1830年に神経衰弱を患って情緒不安定になったことがある。チャップマン・アンド・ホール社を味方につけた10歳以上も若い駆け出しの作家ディケンズによって、この著名な挿絵画家が挿絵と文章の主従関係を簡単にひっくり返された時の胸中たるや、察するに余りあるものがある。いずれにせよ、シーモアが芸術家としての凋落によって絶望という「死に至る病」から自殺したことは、想像にかたくない。

尾羽打ち枯らした芸術家という点ではシーモアと同類であるが、「陰気なジェミー」と呼ばれる落ちぶれた俳優ジェム・ハトレーは、ピクウィック氏の目には「ロチェスター橋の上で自殺を考えているように見えた」(PP, 53)。陰気なジェミーと狡猾で演技のうまいジョブ・トロッターが兄弟であったことを考えると、この場面はむしろピクウィック氏自身の純朴な騙されやすさを逆照射しているように思える。同じように、ウインクルの結婚を彼の父親に了解させるのに失敗して絶望した翌朝、雨の中をロンドンに向かうピクウィック氏の目には、「狭い離れ家の屋根の下で、うなだれて考え込んでいる陰気な顔つきの驢馬が、自殺を考えているように見えた」(PP, 51)。だが、もし善良で滑稽なピクウィック氏が楽天的なキリスト教徒でなければ、この場面は彼の隠された暗部を投影した主観的な心象風景になってしまうだろう。つまり、楽天的・牧歌的な長篇小説『ピクウィック・クラブ』に挿入された幾つかのゴシック短篇小説のように、これはピクウィック氏の楽観主義を引き立たせる役割を果たしているのである。そして、この「暗」によって「明」を引き立てる手法は、その規模の違いはあるにせよ、以後のディケンズ作品のほとんどすべてに見られる。

失敗をものともしない、狂気とも言える楽観主義の権化ミコーバー氏を擁する『デイヴィッド・コパフィールド』以降、ディケンズの後期小説群では確かに喜劇的要素が抑制され、それに従って作風も暗くなる。しかしながら、そこでもディケンズの楽観主義と生きる意欲は脈々として波打っているように思えてならない。むしろ、喜劇的・楽天的な「地」に、深刻なテーマを暗示する陰鬱なイメージや象徴の「凶」が加わったことで(もちろん、読者の見方で「地」と「凶」は反転するが)、作品自体はよりバランスのとれた、より説得力のあるものとなっている。霧や疫病といった暗い象徴が支配する『荒涼館』でさえ、勧善懲悪のハッピーエンドによって悲劇も感傷も消滅する。全体に悲哀感が漂う『大いなる遺産』の主人公は、大いなる期待が大いなる失望に終わり、絶望から自殺してもよかったはずである。しかし、悲哀に満ちた結婚生活にもかかわらず、愛人と楽しい生活を送っていた(はずの)ディケンズに絶望や自殺は似合わない。ディケンズはピップを絶望させなかっただけでなく、彼とエステラとの別離を削除して作品の結末も書き直してしまった。ブルワー=リットンに強制されて書き直したのではなく、その方がよいと思ったからそうしたのだ。未完小説『エドウィン・ドルードの謎』もまた、「死」のイメージが支配的に展

開する中で、それと拮抗する「生」のモチーフが潜在しており、「再び夜明け」というタイトルを持つ最終章が高らかに謳う「復活と生命」(MED, 23)を考えると、読者はエドウィンの生存・帰還について楽観視せざるを得ない。

このようなディケンズの楽観主義によって自殺が抑止される典型例が『ニコラス・ニクルビー』の挿話にあるので、それを最後に見てみよう。朗らかな顔の御仁が語る「グロッグズウィッグ男爵」では、猪や熊を射止める猛者の男爵が美しい女性と結婚し、13人の子供が次々と生まれるにつれて彼女の尻に敷かれ始め、とうとう借りてきた猫のようになる。主従関係が逆転した男爵は絶望し、猟刀で喉を搔っ切つて自殺しようとするが、そこに「絶望と自殺の精霊」が現れる。しかし、その精霊と話しているうちに、天の邪鬼の男爵は自殺の馬鹿らしさに気づき、精霊を追い払ってしまう。心理的リアリズムでは、この精霊は男爵が意識下に抑圧していた悪の分身を主観的に、つまり独自の想像力を通して体験したものということになる。その悪の分身を男爵が再び意識下に回収して自殺しなかったということは、彼が想像力を媒体として自分で自分を救ったと解釈できるだろう。この挿話には、人生に苦痛や苦悩の事実があるのを認めながら、なおも楽しみや喜びが存在することを信じて疑わないキリスト教的楽観主義の作家、ディケンズの面目躍如たるものがある。その証拠に、ディケンズは朗らかな顔の御仁を通して次のように語っている。



私はすべての人に助言したい。いつか似たような理由で（非常に多くの人にあることです）気分がふさいだり憂鬱になったりした時は、どうか問題を両面から、できれば良い方の面に拡大鏡を当てて、見るようにしていただきたい。それでもなお、無断で世を去りたいような気持ちになった時は、とりあえず大きなパイプをくゆらし、酒を一瓶すべて飲み干し、あっぱれなグロッグズウィッグ男爵の話を教訓にさせていただきたいと思います。(NN, 6)

「ベーコンの断面に赤と白の層の縞模様があるように、悲劇と喜劇が規則正しく順番に提示される」(OT, 17) のが、人生劇場の舞台である。禍福は^{あざな}糾える縄のごとし。しかし、ディケンズの基本的なスタンスは、「この世には暗い影があるものの、それに比べると光の方が強いのだ」(PP, 57) と述べた『ピクウィック・クラブ』から、「悪事はしばしば自らに対して立ち止まり、悪事をなす者とともに死に絶えるが、善事はさにあらず」(OMF, 1:9) と語った『互いの友』まで、光と善の思想がその象徴的表現において中心的座標をなす聖

書に則した楽観主義である。いやしくもディケンズを信奉する以上、我々は不景気という大波に揺れる「大学丸」で三等航海士へ降格になっても、決して絶望してはいけない。そんな時は、グロッグズウィッグ男爵を師表と仰ぎ、昔の船員が楽しんだ水割りラム酒(grog)をがぶ飲み (swig) し、物事の楽しい面を見るように努めなければならないのである。

ディケンズの作品におけるイジメの問題 Bullying in the Works of Dickens

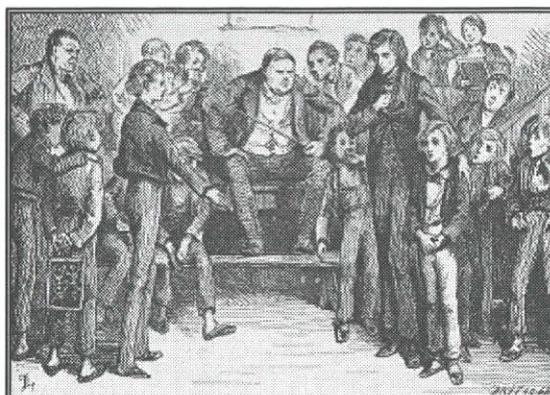
松岡光治

Mitsuharu MATSUOKA

「超国家主義の論理と心理」(1946)の中で丸山眞男は、価値と規範の体系が天皇 — 精神的権威と政治的権力の専有者で究極的価値たる天皇 — への相対的な近接の意識に基づいて成立していた戦時下の日本では、自分に対する主体的な責任がないために、上から受けた抑圧を下へ譲り渡すことによって精神の均衡が保たれていたと述べている。国と時代は異なるが、このような「抑圧の移譲による精神的均衡の保持」¹は、女王を頂点としたピラミッド型社会の厳格な階級制度と家父長制度に支配され、ラマルクやダーウィンの自然淘汰による進化学説によって社会制度としてのキリスト教の基盤が脆弱化していたヴィクトリア朝でも、強者による弱者への様々な形のイジメを通して現れている。ヴィクトリア朝の作家の中でイジメの場面をもっとも数多く、もっとも興味深く描いたのは恐らくディケンズであろう。以下、彼の作品に焦点を絞ってイジメの問題を考察してみたい。

1 階級的なイジメ

クリークル校長の無知と鞭に象徴されるセイレム・ハウスでは、校長が病気で家に引きこもった日に、さながら「千頭もの犬からイジメを受ける牛か熊のように」(DC, 7)、メル先生が生徒たちの喧騒に悩まされる。このイジメを彼らにけしかけたのは、校長でさえ手出しする勇気がない富裕階級の息子、スティアフォースである。陸軍士官学校で先輩から13分の逆さ吊りという焼きを入れられたバグストック少佐は、イジメに耐え忍ぶことを「タフ」と「ズル」の美学に昇華した奇骨のある御仁だが、そんな少佐でさえ虚弱な息子をパブリック・スクールにやる決心がつかないドンビー氏に理解を示している(DS, 10)。つまり、どんな種類の学校であれ、イジメの実情については大同小異だったのである。ましてや、全寮制の寄宿学校では必然的に心理的距離が狭められるので、弱者はボス(ひと昔の言葉を使えば、番長)とその腰巾着たちへの隷従を強いられる傾向が強い。当時のパブリック・スクールには下級生が上級生の雑用をする暗黙の制度(fagging)があって、それがイジメの温床となっていた。パブリック・スクールを戯画化した低級な寄宿学校、セイレム・ハウスにも類似した



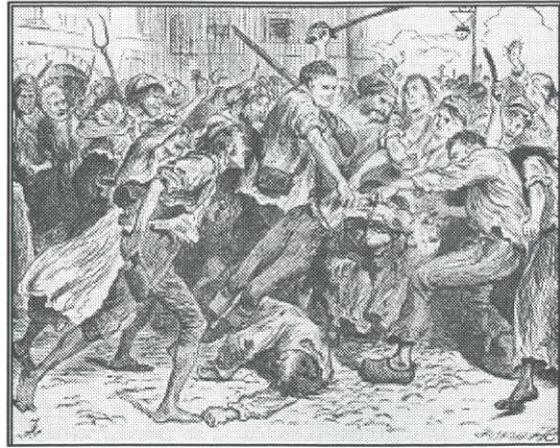
内規がある。7 シリングを献上できるデイヴィッドはスティアフォースの庇護を受け、いつも校長に鞭で打たれているトラドルズは、メル先生のために泣いたという理由で彼のイジメを受ける。聖職者養成を目的とした中世のグラマー・スクールから発展したパブリック・スクールでは、18 世紀後半になると自分の屋敷で教育を受けていた貴族階級の子弟が増え始め、その結果として暴力、飲酒、喫煙、賭博などの横行でモラルが低下するようになった。理由の一つとしては、そうした子弟たちが紳士階級でもない教師の権威を歯牙にもかけず、我が物顔に振舞っていたことが挙げられる。² 下級生たちを煽動してメル先生をいびらせたスティアフォースが、卑怯者と非難された時に、私設救貧院 (alms-house) にいる先生の母親に言及して口答えをした (挿絵参照) 背景にも、そうした階級意識を反映した事情がありそうだ。

ディケンズは、大いなる遺産相続の見込みによって一躍お大尽になったピップの金力に対し、「弱者イジメのパンブルチュック (bullying old Pumblechook) (GE, 9) が媚へつらう時の豹変ぶりを通して、自己保存のために強大なものに従う〈事大主義〉という人間の本能を喜劇的に描いている。にわか成金のピップと青猪亭で暖炉を背にして押し合っているとき、ドラムルは何気なく沼沢地や鍛冶屋に言及している (43)。これは成り上がりの青年紳士に対する「准男爵の次の次の世継ぎ」(23) による意図的なイジメである。また、父親が醸造業で財をなした中産階級のミス・ハヴィシャムの養女、エステラはピップを「働いている下品な子」(8) と呼んで軽蔑しているが、この階級的なイジメに対しては、彼女が (貴族ではないものの) 階級が上のドラムルと結婚し、ドメスティック・ヴァイオレンスを受けることで仕返しがなされる。その意味で、ピップにとってはドラムルもまた、実姉の虐待に対して代理で復讐してくれたオーリックと同じように、自分の分身なのである。

訴訟依頼のない怠惰な法廷弁護士レイバーンは、三角関係による嫉妬に駆られて自分を追跡してくるヘッドストンに対し、逆に彼をロンドン中さんざん引き回して楽しんでいる (OMF, 3: 10)。この真綿で首を締めるようなイジメは、世紀末の退廃的な紳士の先駆けとなる男にとって、セルフメイド・マンの学校教師に対する単なる退屈しのぎにすぎないのだろうか。これは、レイバーンが厳格な父権社会の中で結婚問題を除いて人生のほとんどを M. R. F. (我が尊敬せし父上) に牛耳られている点を考えると、退嬰的な紳士が世代的なイジメを階級的なイジメへ無意識的にすり替えた抑圧の移譲のように思えてならない。

以上の3つの例は個人の個人に対する階級的なイジメである。逆説めいた言い方をすれば、ディケンズが歴史小説で描いた階級の階級に対するイジメもまた個人的レヴェルで考える必要がある。フランスの旧制度において、特権階級が第三身分の平民に極貧の生活を強いた行為は、確かに集団的なイジメだと言える。貴族に対する平民の階級闘争となったフランス革命では、カトリックの聖職者が特権階級に属していたためにキリスト教も弾圧され、「目には目を」の法理を超えた何倍 (時には何十倍) もの報復がなされた。「飢えた連中は草を食えばよい」(TTC, 2: 22) と言った財務長官フーロンが、サン・タントアーヌの民衆から口に草を詰め込まれただけでなく、リンチに加えて街灯を利用した絞首刑ま

でも受ける（挿絵参照）のは、その典型例だと言える。フランス革命のような〈下克上〉では、それまで潜在化していた恨みや悪意が解き放たれ、個人の責任が集団の中に埋没されて消滅してしまう。実際に『二都物語』では、民衆のすべてが「自由、平等、博愛」をスローガンとして掲げていたわけではなく、多くは迫害を受けた返報として貴族を処刑していたように描写されている。この小説におけるフランス革命が、革



命を体現するドファルジュ夫人の長年の宿怨を晴らすための個人的な報復行為の様相を帯びて見えるのは、そのためである。『バーナビー・ラッジ』でも、娘を見つめた罰として親方からイジメを受けた徒弟 (BR, 8) が、のちにタパーティット隊長の副官となり、カトリックに対するプロテスタントの集団的なイジメと言えるゴードン騒乱で暴れている。革命や暴動は、上を下への馬鹿騒ぎの中で狼藉を働いた責任を藁人形に転嫁して最後に火刑に処した昔のカーニヴァルのように、加担者の多くにとっては個人的な意趣返しや犯罪行為が不問に付される恰好の憂さ晴らしの場なのである。

同じ集団的なイジメであっても暴力を伴わない場合もある。それは弱い立場の個人に対する集団の〈シカト〉という（日本の学校ではお馴染みの）陰湿なイジメである。労働組合に入るのを拒んだブラックプールは、煽動者スラックブリッジの口車に乗った仲間の労働者たちから村八分^{オストラシズム}というイジメを受ける。ブラックプールは「これから先、追い詰められたって、見放されたって、シカトされたって不服はねえ」(HT, 2: 4) と言うが、それは彼が貧乏ゆえに酒びたりの妻と離婚できず、彼女が死んでレイチェルと一緒にいるまでは、組合に加入せず^{オストラシズム}に働き続けなければならないからであろう。特定の非組合員が組合員たちに爪弾きされるのはもちろん階級的なイジメではない。しかし、このような泥沼状態 (muddle) にブラックプールを陥らせた張本人は、労働者たちを「計算の数字や機械」(2: 5) のようにしか考えない工場主バウンダビーである。それゆえ、これはやはりプロレタリアートに対するブルジョアジーの階級的なイジメだと言わねばならない。貧者を救うために訪れた紳士たちの寄付の依頼に目もくれないスクルージのように、バウンダビーは貧乏なブラックプールが離婚の相談を持ちかけても横を向いてしまう。バウンダビーは、個人の自由な利益追求活動に対する干渉を排除する自由放任主義^{レッセ・フェール}の信奉者であるだけでなく、その主義を悪用して労働者たちの貧困や苦悩に対する放置までも正当化しているように思える。労働者たちの貧苦に対する資本家の無視という階級的なイジメの問題を解決するためにディケンズが唱道したのは、近代的な階級制度の中でとかく忘れられがちな父親的温情主義^{パターナリズム}、カザミアンの言葉を借りれば「キリスト教的干渉主義 (Christian interventionism)」³ である。ここで確実に言えるのは、いかなる階級のイジメであれ、強者

の側に〈想像力〉が枯渇しているかぎり、社会的弱者の悲惨な状況に介入することも、その心中を理解することもできず、問題は永久に解決されないということだ。ディケンズは抑圧の移譲がはびこる社会で芸術や娯楽の価値を訴え続けたが、その理由は想像力に内在する無限の可能性にあったのである。⁴

2 なぐるか、ひるむか

日本の古きよき時代における学校での生徒のイジメは、先生の権威が絶大だったこともあってか、その陰湿さや執拗さは今ほどではなく、なんとか我慢できたような気がする。同じ高温でも多湿の東アジアよりは乾燥したアメリカ西海岸の方が我慢しやすいのと同じ論理であろうか。カラッとした許容範囲のイジメであれば、ほほえましく思える情景がディケンズ文学の中にも幾つか見られる。例えば、無商旅人は学校時代に実家から祝いの詰め籠が送られてくる自分の誕生日の数日前に、「目覚めた良心をなだめる正義の行為として、懲罰のために証人の前で痛を作ってもらいたいと言ったイジメっ子のグローブソン」(UT, 20)の気高い行為を懐かしく思い出している。『クリスマス・ストーリーズ』の「学校生徒の物語」では、チーズマン爺さんと呼ばれる生徒が副教員になったせいで裏切り者としてイジメに遭うが、そのために彼が遺産を相続して姿を消した時も自殺の噂が流れる。しかし、チーズマン先生は遺産相続後も学校と良好な関係を持ち続け、過去のイジメを水に流して生徒たちに大盤ぶるまいをしてくれる。

このような生徒同士のイジメはともかく、教師の生徒に対するイジメは（特に、その教師が無知蒙昧な独裁者の場合は）、ディケンズの微笑が憤怒の形相に変わる。スクウィアーズの学校に付けられた名前(Dotheboys Hall)以上に、教師の生徒に対する暴力的なイジメを鮮明にイメージさせるものはない。田辺洋子氏の訳によれば「ショーネンジゴク学院」⁵だが、スクウィアーズが手当たり次第に生徒を鞭打している(NN, 8)ので、「聖トベンダ学園」という訳でもよいだろう。一方、「制御できない欲望



を満たすにも似た少年に対する鞭打ち」(DC, 7)に快樂を見出すセイレム・ハウス——こちらは魔女狩りを連想させるので「聖トガリ学院」——のクリークル校長の嗜虐的性向は、その声が部下のタンゲイを拡声器として使わねばならないほど小さいので、むしろ大声のスクウィアーズの場合よりも無気味で恐ろしい。

スクウィアーズにとってイジメの道具である鞭は「力、優越、勝利」⁶の象徴である。

また、鞭はファリック・シンボルであるから、ニコラスがスクウィアーズを打ちのめすために鞭を奪い取ったこと（挿絵参照）は、後者が去勢されて臆病者になる（正確には、臆病者に戻る）ことを意味する。「頑丈で、太い手」のガージャリー夫人がピップを「手塩にかけて」育てるために使う「くすぐり棒 (Tickler)」(GE, 2) もまた、先っぽを蠟で固めた懲罰用の鞭である。ドメスティック・ヴァイオレンスが男女逆転の形で横行する村の鍛冶屋では、ガージャリー夫人の鞭はもちろん夫のジョーを去勢して奪い取った〈男根〉の象徴だ。一方、リテラシーが欠如した無知なジョーにとって、彼が話をする時に握る暖炉の「火かき棒」(12) は、音声に意味を与えるロゴスだと言えよう。しかし、彼に反抗の兆候が少しでも見えると、たちまちガージャリー夫人は彼に飛びかかり、火かき棒を奪い取って隠してしまう。この棒が何のシンボルかは瞭然として明らかだ。このような彼女のイジメはクリークル校長と同じ加虐性愛の要素に満ちている。彼女がオーリックの暴行後に彼に対して従順な態度を見せたことについては、サディズムとマゾヒズムは表裏一体をなすという意見がある。⁷ しかし、彼女の仕草には「厳しい先生に対する子供の態度に浸透しているような、卑下して相手の機嫌を取るような態度」(16) が見られたと語り手ピップは述べている。そうであれば、エステラとドラムルの結婚生活に関する弁護士ジャガーズの意見に従い、すべての人間関係は「なぐるか、ひるむか (either beats or cringes)」(48) と考えるべきだろう。

弁護士について言えば、ピクウィック対バーデルの結婚不履行事件を担当したドッドソンとフォッグをはじめ、ディケンズが描く一連の弁護士には、活殺自在の権を握っている依頼人たちを恫喝し、金を巻き上げる (PP, 20) という共通点がある。刑事専門のジャガーズは「ウェミックに金を返させるぞ」(GE, 20) と言って依頼人たちを威嚇している（挿絵参照）が、彼のイジメの対象は人間だけではない。昼食にサンドイッチを食べる時も、それは「サンドイッチそのものに対するイジメ」のようにピップには見える。『大いなる遺産』は「手」のイメージが支配的な小説であるが、イジメの問題も同じイメージによって提示される。持ち前の演技力によって村の居酒屋を支配していたウォプスルを「弱い者イジメのような反対尋問形式で」(18) 顔色なからしめる時も、「弱い者イジメをするような、うさん臭そうな態度で」ピップの徒弟契約をジョーから解除してやる時も、ジャガーズは人差し指を相手に投げかける。殺人を犯した家政婦モリーの強靱な手首を押さえつけるジャガーズの人差し指 (26) は、相手に対する支配力の象徴である。そのようなジャガーズも、権力と金力に屈服しないジョーから「お前さんがオレを牛か熊みてえにイジメに来たんじゃったら、かかって来やがれ！」(18) と威喝されて、尻込みし



てしまう。「なぐるか、ひるむか」というジャガーズの直截簡明な人間観が非常に説得力を持っているのは、このように彼自身が自分の行動で実証しているからである。

慈善学校に通ったクレイポールにとって、救貧院育ちのオリヴァーの髪を引っ張ったり、耳をつねったりするイジメは、空腹のせいで立腹している時の腹いせとなる無邪気な遊びにすぎない。そうした肉体的なイジメは教区吏のバンブルに鍛えられたオリヴァーには我慢の許容範囲だが、母親の悪口という精神的なイジメは彼の堪忍袋の緒を切ってしまう。オリヴァーがクレイポールを床の上に殴り倒し、「今や彼の足元に這いつくばった臆病な弱い者イジメ」(OT, 6)を見下ろしている姿から言えるのは、彼は決して蒲柳の質に生まれたわけではなく、実は心身ともに強健な少年だということだ。確かにオリヴァーは主人公としてデイヴィッドやピップのような奥行きに欠けるが、それは彼がイジメ、暴力、犯罪にあふれた小説で悪の諸相を際立たせる〈触媒〉の役割しか与えられていないからではなかろうか。「なぐるか、ひるむか」の人間関係は、オリヴァーとクレイポールの例で明らかかなように、ディケンズの勸善懲悪の思想に従って反転することが多い。彼の信念によれば、弱い者イジメとは自分の臆病さを隠蔽するために虚勢を張って相手を脅すことなのである。

3 臆病者の弱い者イジメ

ディケンズの作品における弱い者イジメの横綱として真っ先に思い浮かぶのはバンブルであろう。だが、その露払いとして『ボズのスケッチ集』には「気むずかしく、獣のようで、怒りっぽい、目下の者に威張り散らし、目上の者にへいこらす小粒な暴君の立派な見本」(SB, “Our Parish” 1)として、一人の救貧院長が登場する。この露払いが「教区吏の威光と権威に嫉妬している」点から判断すると、教区吏のバンブルが救貧院の婦長だったコーニー夫人と結婚して救貧院長になったということは、地位の格下げを意味する。従って、結婚後のバンブルが救貧院の連中の前で女房に打擲ちやうちやくされて面目を失い、「堂々たる教区吏の高みから完全に尻に敷かれた恐妻亭主のどん底へ転落してしまった」(OT, 36)のも、当然の報いだと言わねばなるまい。

バンブルの場合、その役職の権威を高めているのは彼自身の威張り散らし（すなわち脅し）で、これがディケンズの作品で数多く描かれる弱い者イジメの最大の特徴となっている。しかし、ほとんどの弱い者イジメには、“A bully is always a coward.”という英語の諺が当てはまる。これはエッジワースの『オーモンド』(1817)の第24章でマクルール夫人について最初に言及された諺だが、ディケンズがバンブルについて「彼は弱い者イジメが大好きで、ちょっとした残虐行為をして途方もなく楽しんでいたので、(言うまでもなく)臆病者だった」(OT, 36)と書いたことで、人口に膾炙するようになったのではあるまいか。

ディケンズの作品における多くのイジメの実例から帰納して言えば、弱い者イジメをする目的は個人的な利益（特に金もうけ）であり、その際に一番必要となるのは威張り散ら

すための大声である。ニューヨーク港に上陸したマーティンが、ダイヴァー大佐に紹介されたポーキンズ少佐の下宿屋で確信したことは、金もうけ第一主義のアメリカ人にとって、「もっとも大きな声で怒鳴り立て、もっとも礼儀を顧慮しない人物が最高の愛国者」であり、「直接的な個人攻撃で怒鳴りつけ、威張り散らし、相手を脅すのが愛国的行為だ」(MC, 16) という点であった。しかし、アメリカ人の多くがイギリス人と同じ—— 恫喝するように大きな声で自分の意見を一方的にしゃべり、相手に話をさせない—— アングロ・サクソン人の末裔であることを考えれば、マーティン青年のアメリカ人に対する蔑視的な印象(ということはディケンズの印象)は、目糞が鼻糞を笑う類と言わざるを得ない。

ディケンズは「昔の無知と貧困をいつも吹聴している」バウンダビーを「卑下自慢の威張り屋 (the Bully of humility)」(HT, 1: 4) として嘲罵している。同じように卑下を自己防衛の戦略として使うヒープの小声とは違い、バウンダビーの過去の虚構を支えているのは、その「真鍮製のメガホンのような大声」である。実際に、奥様の浮気で青菜に塩のバウンダビーは、同情的なスパーク夫人に元気を出してと言われ、雷のごとき蛮声で「従業員の雑魚どもを怒鳴り」(2: 11) つけ、元気なところを見せ付けている。バウンダビーが現在の地位を輝かせるために自分の卑しさを大声で吹聴するのに対し、ヒープは将来の地位を確実にすべく自分の卑しさを小声で相手に告げる。共通するのは、どちらの場合も「卑下も自慢のうち」という点だ。「慇懃で謙虚だが、とても狡猾で、こそこそした」(BR, 35) 態度のガッシュフォードがゴードン卿の信頼を得ながら彼を食物にしたように、ヒープも

また同じ卑下の戦略でウィックフィールドを丸め込む。ウィックフィールドとその娘に対するヒープのイジメの特質は、声高なバウンダビーには見られない陰湿さにある。ヒープは最後にミコーバーによって犯罪を暴かれ、悔し紛れに「この弱い者イジメが！」(DC, 52) と罵倒するが、彼の陰湿なイジメが朗々とした声の主によってピリオドを打たれた(挿絵参照)ところに、ディケンズの鮮やかな手並みを感じずにはおれない。

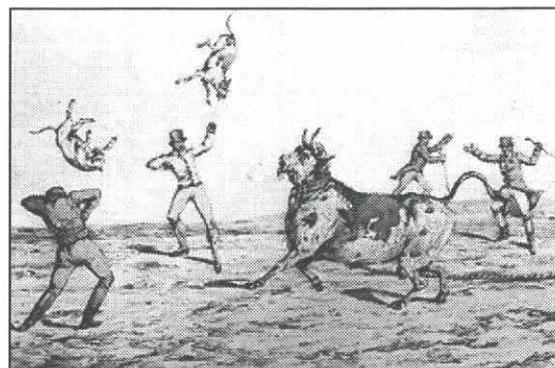


ボールドウィック大尉は、狩猟パーティーで冷たいパンチを飲みすぎたピクウィック氏が自分の地所で眠り込んでいるのを見て、「あんな奴に威張らせてたまるか！」(PP, 19) と叫び、彼を手押し車で獣の囲い場に運ばせて恥をかかせている。彼のように威張り散らす人間は自分が同じことをされるのを極端に嫌うようだ。ブランウンロー氏の反論を威嚇と思い、「治安判事を脅すとは何て生意気な！」(OT, 11) と怒ったファンク判事殿の場合も同断である。無商旅人は街にあふれる無法者について「弱い者イジメの背後に臆病者が潜んでいる」(UT, 30) と述べ、悪漢を野放しにしている治安判事を批判している。無商旅人の

視点から見れば、街の無法者と大差ないアル中のファンク判事殿も酒で臆病神を追い払っているとしたかと思えない。なぜ、彼らは他人に威張り散らされることに対して、かくも敏感なのか。おそらく、食うか食われるかの弱肉強食・適者生存・自然淘汰の動物社会のように、人間社会もまた優勝劣敗の原理によって弱者が強者の餌食となる社会だということを本能的に悟っているのだろう。これはもちろん社会ダーウィニズム的な世界観に対するディケンズの諷刺である。しかし、人間は動物であると同時に社会的な存在であるから、人間社会も弱肉強食型から共生型へ転換すべきだというヒューマンイズムの精神は、勝組と負組とを分ける考えが依然として優勢な現代社会を見るに、ヴィクトリア朝当時からほとんど進化していない——どころか、むしろ退化している感がある。

セルフメイド・マンを諧謔化した名前を持つ「頑張り屋」ならぬ「威張り屋」のストライヴァーは、いつも「怒鳴って高飛車に出る」(TTC, 2: 5) 男である。彼が法廷弁護士として前列に出て成功しているのは、同僚として実質的な仕事を引き受けて後列で彼を支えるカートンの存在があるからだ。カートン (Carton) には「標的の白星」という意味がある。それは標的の中心点である黒星 (bull's eye) を囲む白星であり、ストライヴァーを守ってやる彼の立場を適切に示すネーミングだと言える。ストライヴァーは、民衆のために財産も地位も捨ててしまったのに革命の先頭に立とうとしないダーネイの臆病さについて、指をパチンと鳴らしながら非難している。しかし、彼のような張子の虎は(カートンが「山犬」であれば、むしろ眠った「獅子」と呼ぶべきか)、自分自身の臆病さを意識に受け入れることができないので、それを意識下に抑圧し、他者であるダーネイに投影して非難するしかないのだ。虎の威を借りたキツネのような臆病者による弱い者イジメには、不快や苦痛を伴う認識を投影の形で処理しようとする、いわゆる〈自我の防衛機制〉が働いているのである。

ブリンバー博士の寄宿学校における早期詰め込み教育と同じイジメを自宅で受けているグラッドグラインド家の子供たちが、
“that famous cow with the crumpled horn who tossed the dog who worried the cat who killed the rat who ate the malt” (HT, 1: 3) というイジメの報いを歌った童謡、「ジャックの建てた家」を知らないのは皮肉である。「牛が角で犬を投げ上げる」と言えば、囲いの中で



雄牛に猛犬をけしかけて噛みつかせる残酷な見世物としての牛イジメ(挿絵参照)が思い浮かぶ。牛イジメ (bullbaiting) は中世時代に貴賤上下の別なく流行し、ヘンリー八世の頃に始まった熊イジメ (bearbaiting) とともに、残虐さゆえにピューリタンたちの反対を何度か受けたが、結局は1835年の「動物虐待法案 (Cruelty to Animals Act)」まで人気を博していた。ちなみに、サイクスが虐待している犬の名前、ブルザイ (Bull's-eye) は上で述べた

ように黒色の「標的の中心点」という意味であるが、もともとは牛イジメで客が「雄牛の目」にお金——通例は、この動物の目とほぼ同じ大きさの1クラウン銀貨——を賭けたことに由来している。⁸

牛イジメや熊イジメに使われる猛犬よりも恐ろしいのがクウィルプである。彼は猛犬そのものへのイジメを楽しんでいる(挿絵参照)。この小さな男は短い鎖につながれた大きな猛犬に対し、「俺様に噛みつかねえのか？ずたずたに引き裂かねえのか？この臆病者め！（中略）貴様は怖がってるんだ、この威張り屋め！怖いんだ、それが分かってるんだ、貴様は！」(OCS, 21)と笑いながら叫んでいる。笑っている時のクウィルプは「あえいでいる犬」(3)にたとえられているが、ここでは彼の臆病な性格についての暗示を読み取る必要がある。⁹ どんなに短くても、鎖のおかげでクウィルプと猛犬との間には距離という安全網が設けられる。しかし、この鎖が切れた瞬間に、猛犬を臆病者と呼んだクウィルプ自身が臆病者に反転することは、どんな読者でも容易に想像できるはずである。



娯楽としての牛イジメや熊イジメは、観客が自分の臆病さを意識せずに済むように、自己と猛犬を同一視して楽しむ集団的なイジメである。ここで問題となるのは、集団的なイジメの対象が猛獣ではなく、人間（特に、いたいけな子供）の場合だ。集団でオリヴァーを追跡する際の「泥棒！（Stop thief!）」という叫びには魔法にも似た力がある。この声を聞いた街中の商売人は商売道具を、子供はオモチャを放り出し、「みんな疾走しながら喚き、絶叫し、角を曲がる時には通行人を突き倒し、犬を吠え立たせ、鶏を驚かせ、その音を街路に、広場に、路地に響き渡らせる」（挿絵参照）。ディケンズは「人間の心の奥底には何かを追いかけたいという激しい感情が根づいている」(OT, 10) と言い、狩猟民族の流れを汲むアングロ・サクソン人の特質を道破している。群集によるオリヴァーの追跡と「泥棒！」という叫びは、害獣退治や野外スポーツという美名で正当化されるキツネ狩りと「出たぞー！（View-halloo!）」という叫びを読者に想起させるはずだ。ここでは、キツネ狩りという紳士階級の集団による弱い者イジメが、その舞台を労働者階級へ移すことで、同じような本能的衝動に後押しされ、「泥棒！」という追跡の快樂を伴うサ



ディスティックな娯楽へと変換されているのである。

4 恐喝と脅迫

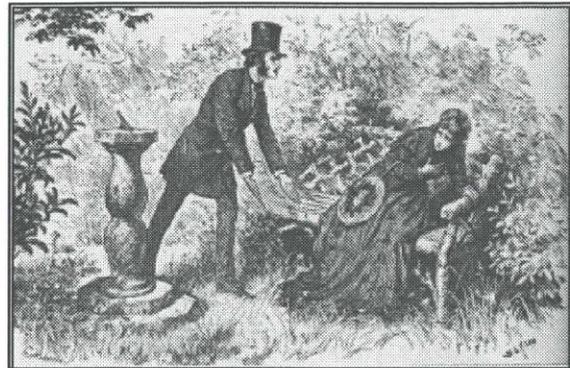
イジメが相手の公表できない秘密や弱みを握って脅迫するところまで進むと、それは法的に処罰される恐喝 (blackmail) となる。ゴミの山をつついて老ハーモンの遺書を見つけたウェッグはボフィンを恐喝するが、「弱い者イジメをする弁護士」(OMF, 4: 3) のような彼の恐喝は臆病さに支えられた虚勢にすぎない。実際、ウェッグはヴィーナスの寝返りによって形勢が不利になると、途端に「脅すような態度に尻込みするような態度が見え始める」(4: 14)。従って、雇ってもらった恩を忘れ、主人の目をかすめて悪事を働いたドブネズミが、法律に照らして投獄される代わりに、汚い「ゴミ集めの馬車 (scavenger's cart)」に投げ込まれたことは、この臆病な弱い者イジメにふさわしい処罰だと言えよう。

厳格な父から堅苦しい教育を受けたクレナム夫人は自己の抑圧を美德として強調しているが、実際には父の抑圧を移譲してアーサーにカルヴィニズムの情け容赦ない教育を受けたように、その美德は偽善的な彼女が自己正当化のために行なった悪徳の言い換えに他ならない。¹⁰ フランスの悪党リゴーはクレナム夫人の偽善と悪徳を見抜いており、彼女の遺言補足書に関する秘密を握って彼女を恐喝する。似非紳士のリゴーは、女性に懇懇なふりをしながら、実は恐喝というイジメを通して女性への支配力の行使を楽しむ男である。そんなリゴーをアーサーは「弱い者イジメの臆病者」(LD, 2: 28) と呼び捨てているが、臆病な父から引っ込み思案な性格を受け継いだ彼が、今まさに窮地に陥っている義理の母を恐喝から救うことができない、その腑甲斐なさの方がむしろ問題であるように思える。リゴーの恐喝はクレナム夫人の家の崩壊によって中途半端なままで終止符を打たれるが、これはむしろアーサーの（特に女性に関する問題で顕著になる）消極的な姿勢を目立たせるだけである。

デドロック家の顧問弁護士タルキングホーンの住所が、ディケンズの盟友で法廷弁護士の資格もあったフォースターと同じリンカーンズ・イン・フィールズ (58 番地) であったことは、つとに知られている。ディケンズがフォースターの様々な助言に感謝していたことは事実だが、余計な助言にむかついたことは何度もあったはずだ。フォースターはディケンズの妻とも仲がよかった。その親密さが原因で二人の間には相当な口論があったし、マクリーディなどは二人の友情が壊れるのではないかと恐れたほどである。¹¹ 自己満足と尊大さを代名詞とするポドスナップは、彼と同じ名前を持つフォースターがモデルだと言われているが、山崎勉氏が指摘したように、¹² タルキングホーンもまたディケンズのフォースターに対するイジメのために創造された人物として捉えることができる。タルキングホーンは『荒涼館』の校正段階でトーキングホーン (Talkinghorn) に間違えられたが、この弁護士にディケンズは「口うるさい拡声器」のような（または、それに類した否定的な）イメージを持たせ、心の中でフォースターに意趣返しをしていたに相違ない。しかしなが

ら、タルキングホーンは「職業上の相談を受けた時以外は決して話をしない」(BH, 2) 沈黙の弁護士である。彼がレディー・デドロックの秘密を突き止めてから開始する謎めいた脅迫は、多弁で能なしのウェッグや饒舌を弄するリゴーと違って寡黙を特徴としているので、そこには底知れない薄気味悪さがある。タルキングホーンの脅迫理由については甲論乙駁しているが、デドロック家の家名を汚さないという動機は別にして、第一にリゴーやジャガーズへとつながる支配欲、第二にジャスパーへとつながる追跡の快樂が、有力な動機として考えられる。ただし、タルキングホーンは勘定高さが原因でオルタンスに殺害され、その恐喝もリゴーの場合のように未遂で終わってしまう。タルキングホーンが早々に自業自得の罰を受けたために、脅迫の真の動機は特定できなくなってしまった。だが、この特定不可能性は、読者の説得力ある多様な創造的解釈を誘発するかぎり、むしろ歓迎すべきことなのかも知れない。

目による催眠術と囁き声とでローザを呪縛したジャスパーは、邪悪な脅迫の表情を浮かべて狂気じみた愛を告白する際に、「私はあなたを死ぬまで追跡する」(MED, 19) と最後に言っている(挿絵参照)。この脅迫を伴うセクハラ発言は、恐怖におびえる少女ネルに執念深く付きまとうクウィルプのように、追跡によって加虐的な興奮を高めた

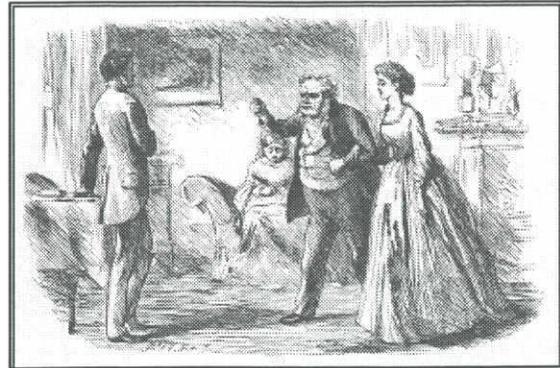


たいというジャスパーの邪悪な欲望の発露に他ならない。しかし、この欲望は現実世界のことであり、幻想の世界では逆の傾向を呈示する。ローザの愛を求めていないジャスパーにとって、愛とは被虐的な依存の合理化にすぎない。彼は彼女の面影を腕に抱いて幻想の世界に突入し、絞殺強盗団が死と破壊の女神(Kali)を崇拜するように、ローザなる神に隷属することで激しい興奮を伴う被虐性の快樂を享受しているのだ。エドウィンと一緒に散歩するローザをジャスパーがストーカーよろしく密かに追跡した(13)あと、即座にロンドンへ阿片吸飲に行った理由は、まさにそこにあるのだ。

* * * * *

適者生存と自然淘汰こそ進歩であり、弱肉強食こそ自然の摂理であるという考えは、ヴィクトリア朝の繁栄を支えた中産階級の指導原理であった。ラマルクやダーウィンの進化論によってキリスト教が弱体化していた社会の中で、ディケンズは権力と金力に執着する強者による弱い者イジメを様々な作品で執拗に描いている。その主たる目的が何であるかを解く鍵は、秘書ロクスミスを解雇する際に、ボフィンが彼の身分の低さと貧しさを理由にイジメのふりをする場面(OMF, 3: 15)にある。それは、ボフィンが弱い者イジメを演じることでベラの同情心を呼び起こし、金よりは愛に価値を置くべきことを彼女に悟らせ

る場面（挿絵参照）である。ディケンズは社会に蔓延する弱い者イジメを活写することによって、強者の非人間的な悪行を指弾すると同時に、読者の涙（特に満都の子女の紅涙）を絞ることで、ベラと同じような反応を求めていたはずである。どのディケンズの作品においても、弱い者イジメをした強者は最後に多かれ少なかれ因果応報の罰を受ける。勧善懲悪のエンディングに拘



泥するディケンズは批判されることも多いが、そのような批判は差し控えるべきではなかろうか。強者が環境の激変によって常に滅びてきたこと、そして抑圧に慣れている弱者が激変した環境の中でもたくましく生き抜いてきたことは、過去の歴史が証明しているからである。

注

- 1 丸山眞男「超国家主義の論理と心理」『現代政治の思想と行動（新装版）』（1964；未来社，2006）25.
- 2 伊村元道『英国パブリック・スクール物語』（丸善ライブラリー，1993）71-72.
- 3 Louis Cazamian, *The Social Novel in England 1830-1850*, trans. Martin Fido (London: Routledge, 1973) 211.
- 4 社会の抑圧と想像力の問題については、拙論「ディケンズと芸術——社会の抑圧とそのイメージ」『名古屋大学言語文化研究叢書』（第1号，2002）103-22 を参照のこと.
- 5 田辺洋子訳『ニコラス・ニクルビー（上）』（こびあん書房，2001）52.
- 6 Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (Amsterdam: North-Holland, 1974) 498.
- 7 ディケンズの作品における臆病者の弱い者イジメには、ほとんどの場合「なぐるか、ひるむか」の両方が内面化されており、サディズムとマゾヒズムの共存が見られる。例えば、ブラスはクウィルプがキットへの復讐として古い船首像を鉄棒で打ち据えている姿を見て、この船首像はクウィルプに似ているので家庭用の肖像として買い求められたのだろうかと思う（OCS, 62）。この場面（挿絵参照）でディケンズがサディズムの権化に見えるクウィルプの自虐的なイジメの嗜好を暗示していることは間違いない。



- 8 井上義昌編『英米故事伝説辞典（増補版）』（富山房，1980）108.
- 9 この場面をグレイは役割が逆転した牛イジメや熊イジメのグロテスクなパロディー版として捉えている。Beryle Gray, “Man and Dog: Text and Illustration in *The Old Curiosity Shop*,” *Dickensian* 103.2 (Summer 2007): 127-28.
- 10 ヴィクトリア朝小説における抑圧の問題を分析したキューシッチは，社会的権威を得る戦略として抑圧を受けているように見せかける悪党の系譜にクレナム夫人を位置づけている。John Kucich, *Repression in Victorian Fiction* (Berkeley: U of California P, 1987) 255.
- 11 Paul Schlicke, *Oxford Reader's Companion to Dickens* (Oxford: Oxford UP, 1999) 246.
- 12 山崎勉『ディケンズのこころ』（英宝社，2003）185.

第2部

都市生活者の狂気

ギッシングと都市——自分のいない場所がパラダイス

松岡光治



産業革命後に計画もなく無闇に大きくなったヴィクトリア朝の都市は、カーライル、ディケンズ、ラスキン、モリスといった有名な文芸家たち、そして自然保護運動家オクテイヴィア・ヒルや近代都市計画の祖エベニーザ・ハワードに代表されるような、多くの社会改革者たちによって批判された。しかし、夢をかきたてるような、神秘的で華美な都市に魅了され、相反する感情を抱く画家や作家も少なくなかった。例えば、この章の扉絵に用いたジョン・オコーナーの「日没——ペントンヴィル・ロードから見たセント・パンクラス駅ホテル」（一八八四年）では、大英帝国の首都に対する彼の矛盾した感情が描出されている。前景では、ロンドンの典型的な街路に見られる路面電車、馬車、群集、商店、そして右手前の屋上に積まれたガラクタ類が、都市の日常的な単調さを強調している。一方、背景の夕焼け空では、ロンドン名物の霧の中から浮かび上がったセント・パンクラス駅ホテル（一八六八年開業）のネオ・ゴシック様式の尖塔が、⁽¹⁾ 中世の大聖堂か古城のように美しいシルエットとして非日常的な幻想を生じさせ、現実的な前景と絶妙な対照をなしている。

小説家ギッシングにとってのロンドンもまた、悲惨な貧困生活と不幸な結婚生活を余儀なくされた彼が、孤独と不安によってアイデンティティの危機に陥り、たびたび田舎や外国へ逃避することになる幻滅の都市であると同時に、その幻想的な魅力と知的な刺激が彼

を引きつけてやまない創作活動の磁場であった。このような^{アンビヴァレンス}両価感情はギッシングの郊外や田舎に対する態度にも見られる。いや、彼は教育、階級、女性、結婚、金銭をはじめとする様々な問題に矛盾した感情を抱き、その激しい葛藤に絶えず苦悩していたのである。引越を繰り返した彼の^{エグザイル}亡命者のような漂泊の生活は、そうした両価感情ゆえの苦悩の結果だと言えるかも知れない。本章では、都市に対するギッシングの矛盾した感情に注目しながら、帝都ロンドンの外的な力からは逃れることができないという彼の決定論的な考えを検証してみたい。

第一節 階級の壁と都市の街路

後期ヴィクトリア朝を生きたギッシングは、彼が先輩作家として敬意を払って批評書まで書いたディケンズとの間に、大きな世代差を感じていた。そのような意識を育んだのは、一八六七年の第二次選挙法改正による選挙権の拡大、一八七〇年の初等教育法による文盲率の低下、米独の資本主義の急速な発展による一八七三年からの^{グレート・ディプレッション}大不況、そして大不況の深化による一八八〇年代初頭の社会主義運動の興隆といった時代の変化であった。ギッシングが死んだ一九〇三年に生まれ、同じように彼との世代差を感じていたオーウェルが言ったように、ギッシングが長篇小説で労働者たちを描き始めた頃のロンドンには「八〇年代の霧に閉ざされ、ガス灯がともったロンドン」、^(二) すなわち一八八一年にワトソン博士と知り合ってベイカー街の下宿で共同生活を始めたシャーロック・ホームズのロンドンである（ギッシングは一八八四年末から六年間その近くに住んでいた）。そして、社会史家ブリッグズの言葉を借りれば、「ディケンズのロンドンとフェビアン主義が大きな影響を与えたエドワード朝のロンドンを結びつけている」^(三) のが、ギッシングの小説だと言える。

しかし、ディケンズとギッシングの労働者階級の描写に見られる差異は、世代的な違いよりも気質的な違いの方が大であるように思える。その証拠に、ギッシングの処女作『暁の労働者たち』の冒頭は、読者に対する語り手の次のような誘いの文句で始まる。

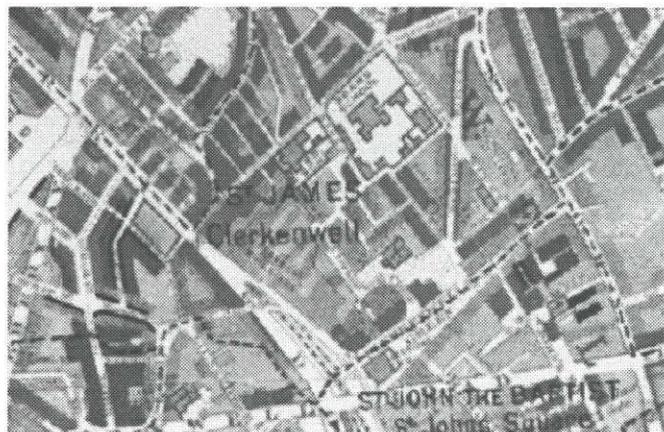
読者の皆さん、私と一緒にホワイトクロス・ストリートを歩いてください。貧民たちの市が立つ土曜日の晩は、この大都市の疲れた賃金労働者たちが、明日は奴隷のような仕事がないと思って安心し、一週間の中で心おきなく気晴らしのできる唯一の晩なのです。……これら [スラム街の住まい] の一つを選んで、その入り口まで群集を押し分けながら進み、不快な悪臭に我慢できるかぎり覗いてみましょう。恐ろしい暗闇の中で目を凝らすと、私たちには行き止まりの路地が見えます。言葉では表現できない忌まわしいものが、向こう側で点滅しているガス灯によって薄ぼんやりと見えるのです。（第一部第一章）

ここでの読者は作者ギッシングと同じ下層中産階級が想定されている。都市の中心部でゲ

ットー化されたような、そうした貧民街を一緒に見ようとする語り手と読者の、言わば植民地主義的な視点はディケンズやギヤスケルにも見られる。語り手が中産階級の読者を導いてロンドンの労働者階級の世界を見せるとき、その悲惨さをリアリスティックに描く点でギッシングはディケンズに似ているが、それは表層的な類似にすぎない。つまり、子供時代の記憶に基づいて描写するディケンズがスラム街の悲惨な生活に対して同情的であるのに対し、大人の実体験に立脚したギッシングの描写は「不快な悪臭」や「忌まわしいもの」に対して反感的である。ディケンズは労働者まで視点を下げることができるが、ギッシングの視点は距離を設けたままであるギヤスケルの視点に近い。とはいえ、ギッシングが大衆としての労働者に対してギヤスケルのように同情や共感を抱くことは決してない。

『ロンドンの労働とロンドンの貧民』（一八六一年）を出版した翌年、ヘンリー・メイヒューは熱気球に乗って首都ロンドンを上空から一望のもとに眺めた。ボードレールの男性遊歩者のような語り手に導かれて陸続と街路を見せられる『暁の労働者たち』の読者もまた、そうした気球から都市全体を見下すようなパノラマの視点を与えられる。その点において興味深いのは、『チャールズ・ディケンズ論』（一八九八年）の中でギッシングが、「ディケンズは一段高い場所から貧しい人々を見下ろして発言したり考えたりすることができない」（第十章）と述べていることだ。これに関してピーター・キーティングは、ディケンズがロンドンの労働者階級を描く場合、彼らは社会の一部となるのに対し、ギッシングがそうする時はいつも「階級の壁」が再確認されると言っている。^(四) イギリスにおける貧困の科学的調査の創始者で、一八八九年に『ロンドンの人々の生活と労働』を著したチャールズ・ブースはロンドン住民を八つのクラスに分類し、その財政状態を七つに色分けした地図（図①）を作成して、貧富の空間的な分布状態を明らかにした。^(五) ギッシングのロンドンには富の分配が地理的に色分けされた都市であり、ブースの地図のように街路間の境界がはっきりしている。ギッシングの小説に通底する点は階級の違いが街路の違いとなっていることである。ディケンズやギヤスケルといった前世代のヴィクトリア朝作家は階級の壁を乗り越えることに関心があったが、ギッシングはその壁を再建あるいは強化することに関心があったと言ってよい。

『暁の労働者たち』に登場する洗練された知的なヘレン・ノーマンは、社会の改革と個人の芸術の板ばさみで苦しむ主人公アーサー・ゴールディングの芸術的側面を体現している。その意味で、この小説をギッシングが執筆する動機の一つとなった社会改革の目的について考えると、コントの『実



図① チャールズ・ブースが1889年に描いたロンドンの貧困に関する図形マップ

証哲学講義』(一八三〇～四二年)を読んで「ロンドンのように混迷した大都市の方が、私の力を発揮するのにふさわしいのではないかしら」(第一部第十四章)と言うヘレンが、実証主義とロンドンを結びつけている点は注目に値する。要するに、社会問題を実証主義的に——経験的な事実の観察を重視して——論証するには、労働者たちが群居する都市以上によい場所はないと、ヘレンは考えているのである。

しかし、ギッシングのような芸術志向の強い人間にとって、実証主義理論は物質的、唯物的、具体的すぎたようである。アーサーとヘレンの社会的な目的が達成されず、彼らが敗残者となるのはそのためである。ドイツ観念論哲学を研究したヘレンはイーストエンドのスラム街に入って貧しい人々の間で社会福祉運動をするが、結局は郊外のハイベリーに落ち着き、子供時代の田園的な環境を再構築してしまう。彼女はたとえ都市の中にも社会的な壁を意識し、個人的な慰安のために文化的な飛び地エンクレーブに逃避する。ロンドンに接近はする(実証主義的に大衆に関心は示す)が、すぐに反感を抱いてしまうのだ。芸術を志向する〈私的な領域〉と社会改革を志向する〈公的な領域〉が相互に作用することはない。

ディケンズは『ピクウィック・クラブ』(一八三六～三七年)のように都市の情景に多数の人間を登場させることで生命力を与える小説家である。しかし、ディケンズが憂鬱な日曜日におけるロンドンの風景を描いた『リトル・ドリット』(一八五五～五七年)の第一部第三章の「我が家」に、ギッシングは「ユーモアを完全に失ってしまい、この大都市を何か気むずかしい感じで眺めている」(『チャールズ・ディケンズ論』第九章)先輩作家の姿を見出している。『リトル・ドリット』のロンドンには抑圧的な社会を象徴する牢獄牢獄が鮮明で具体的なイメージとして支配している。そこでは牢獄の壁という不変の物理的な形が強調され、それが個人の意志をものともせず人間を孤立させる障壁となる。この障壁を平面化したものがギッシングの作品に頻出する街路である。つまり、『リトル・ドリット』で描写されたロンドンこそ、ディケンズのリアリズムの流れを汲むギッシングの眼が捉えたロンドンなのだ。

ギッシングの登場人物たちは街路や居住区を階級的に画定されている。その区画を越えて互いに関係することはない。ロンドンロンドンは断片化された街路の連続体にすぎないのだ。『暁の労働者たち』でも、ヘレンの社会はロンドン北部の郊外ハイベリーで、アーサーが結婚する墮落した貧しいキャリー・ミッチェルの社会はトットナム・コート・ロードの貧民街に定められている。アーサーがキャリーの飲酒癖を直すために北西郊外のハムステッドハムステッドに連行した際も、そのような彼の田園趣味バスターリズムは彼女の都会性アーバニズムに逆襲される。事実、彼女は最初はハイゲートへ、次にキャムデン・タウンへ、最後はトットナム・コート・ロードに逆戻りしてしまう。キャリーは「運命の女神の声に従った」(第三部第三章)だけだが、ギッシングの小説における運命の女神とは外界、すなわち不変の階級的な壁を擁立しているロンドンという都市に他ならない。

第二節 人間を疎外する近代都市

十九世紀中葉に〈世界の工場〉として空前絶後の経済的繁栄を誇り、世界の通商金融市場を支配していたイギリスも、一八七三年に始まる世界恐慌を起点として九六年まで恒常的な不況に陥った。この大不況は機械の改良による熟練労働の解体と農業不況による不熟練労働者の都市への流入を通して大量の失業者を生み、一八八〇年代初頭に社会主義運動を復活させた。一八八四年に中産階級の知的エリートたちによって結成された社会主義者同盟やフェビアン協会は、ヴィクトリア朝初期のチャーティスト運動がイングランド北部の産業都市を中心に展開されたのに対し、首都ロンドンを中心に活動した。こうした社会主義運動に支えられた失業者たちは不満分子となり、パリで起こった一連の革命を通して支配階級に不安を与えていた。

「ブラック・マンデー」と呼ばれる一八八六年二月八日、トラファルガー広場での三〜五千人の失業者の集まりは暴動となり、ペルメルを中心としたウェストエンドは数時間にわたって民衆の手中に落ちた(本書第八章・図③)。ギッシングにとって社会主義運動は、人間の個性に脅威を与え、彼が何よりも大切にしていた教養・文化を破壊する民衆に権力を与えるだけであるように思えた。彼に『民衆』(一八八六年)を書かせる動機となったのは、そのような社会主義観である。とはいえ、『民衆』は「イギリス社会主義の物語」という副題とは裏腹に、二つのカテゴリーの対立——社会主義と保守主義をそれぞれ代表するロンドンの急進的な労働者リチャード・ミューティマーと田舎に住む旧地主階級のヒューバート・エルドンという個人の対立——を描いたものになっている。

思わぬ遺産を相続したミューティマーは地方の自然を破壊して新しい産業都市(ニュー・ウォンリー)を建設し、その地方の社交界に入ろうとする。だが、彼の運命が定められたものだと考えるギッシングは、階級の壁を強化して彼を労働者たちの住むロンドンへ最終的に戻すことで、「商人根性の染み込んだ」(第三十章)英国の社会主義を嘲罵する。一方、今では斜陽階級となったエルドンは産業革命以前の社会の価値観を代表する人間であり、芸術の世界へ逃避したいというギッシングの願望を体現している。結局、ミューティマーは没落して暴徒の投石で殺され、エルドンが産業都市を逆に破壊して以前のような美しさと静けさを持つ田園(ウォンリー)に戻す。これは単に保守主義の勝利を意味するだけではない。それは産業の拡張を反対方向に転換する審美主義的な理想をかなえた行為であると同時に、エルドンが近代社会では疎外されていること、そして社会的な壁の中における作者自身の孤立を暗示している。要するに、産業化された近代都市には知識人や芸術家の居場所はなく、そこでは疎外されて孤立するしかない。(六)

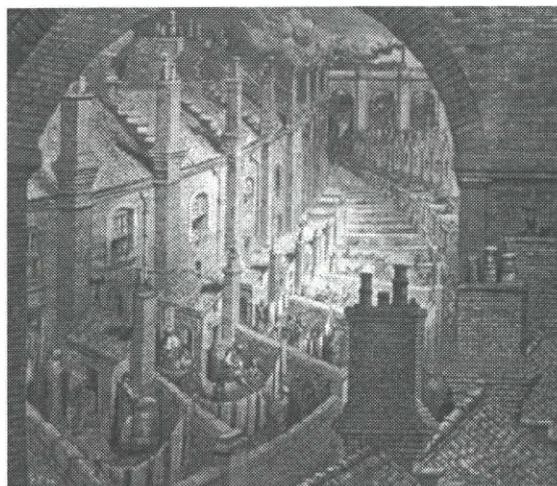
都市は個人が群集の一人として溶け込むことで匿名性を提供する。窃盗の罪を犯したギッシングがアメリカに逃避し、一年後に帰国して即座にロンドンへ出た理由は想像にかたくない。しかしながら、都市空間の匿名性は社会的な疎外と人間の孤立感を生む。労働者階級の貧困を扱った最後の小説『ネザー・ワールド』(一八八九年)では、ロンドンの都市

化による人間の疎外は最も悲観的に描かれている。『ネザー・ワールド』でロンドンを描く際のギッシングの実証主義的な正確さは、この都市のユニークな発展の点から説明可能である。北部の産業都市では労働者たちが製造工場で集団として組織化されていたのに対し、大英帝国の中心としてのロンドンでは銀行業や保険業などが発展し、不動産価格の上昇で大規模な製造工業は発展を抑制された。その結果、首都ロンドンは「熟練工や職人の都市」^(七) となってしまった。

シドニー・カークウッドのような熟練工の大半は、ロンドンの富裕層のために工芸品の生産に従事していた。カークウッドの住むクラークンウェル（図①）は、そうした熟練工たちが住む地区の典型である。クラークンウェルはロンドンにおける宝石製造の中心地で、熟練工たちは特殊な道具を共有する必要から当地での定住を余儀なくされた。一方、重工業がロンドンを無視していたことに加え、農業不況によって田舎から都会への人口流入が続いていた。この首都の人口増加は不熟練労働者の余剰につながり、一八八〇年代に一連の騒動を生み出した。結果的に日雇い労働者が激増し、彼らは仕事が朝早く始まることもあってロンドンに住まねばならなかったため、多くのスラム街が形成されてしまったのである。

ロンドンの発展に伴う別の興味深い現象として、都市中心部の空洞化と人口減少によるスラム街の周縁化がある。一八六〇、七〇年代には帝国の威信をかけてロンドン中心部で貧民街撤去がなされ、銀行、事務所、倉庫、駅などが建設された。一八五三年から一九〇一年までに七万六千人が鉄道建設のために立ち退きを強制され、彼らの住まいは周縁化された。ギュスターヴ・ドレの「ロンドンの上空を——列車で」（図②）に見られるように、鉄道の高い軌道や深い堀割は社会的なゾーンを隔離する障壁を形成した。^(八) 一八七五年の職工住宅法もまたロンドン中心部のスラム街を撤去し、鉄道との一体化によって都市を再開発するものであった。その結果、クラークンウェルはファリンドン・ロードとクラークンウェル・ロードに囲い込まれ、シティーと切り離されて孤立してしまった。この境界線の重要性にギッシングは着目する。例えば、クレム・ペコヴァーが郊外にあるバートン・クレセントの自宅から南下し、実家の下宿屋のあるクラークンウェルへ戻る場面で、「シティー・ロードを横切ったあと、クレムは生まれ育った土地に足を踏み入れた」（第三十五章）と述べられている。

ディケンズの『荒涼館』（一八五二～五三年）の登場人物の多くはホルボーンとシティーの区域に住んでいたが、ホルボーン地域



図② ギュスターヴ・ドレ『ロンドンの上空を——列車で』（1872年）

からはスラム街の撤去で一八三〇年から半世紀の間に十万人が追い出され、⁽⁹⁾ シティーの人口も一八六一年から八一年の二十年間に半減した。彼らが住んでいたチャーンスリー・レーンの周辺は、『ネザー・ワールド』の頃には非住居地域になっている。つまり、『ネザー・ワールド』の中心地がホルボーンの北側に位置するクラークンウェルへ変わったことは、人口の分散化とスラム街の周縁化を意味しているのだ。ディケンズは『荒涼館』の中で霧という包括的なイメージを使い、大都市ロンドンを統一体として捉えた。産業革命を経て巨大化・複雑化した帝都ロンドンは、ヴィクトリア朝後期にはもはや有機的な社会の統一体として捉えることができなくなった。『ネザー・ワールド』でギッシングが描いたロンドンは、断片化された社会空間の連続体としての都市になっている。大都市の中で労働者階級の分散化と周縁化が起こり、ロンドンはクラークンウェルのように孤立した多くの特殊な区域からなる都市、すなわちブースが色分けして詳細に描写できるような都市になったのである。

人間は遺伝や環境に従属するもので精神的な変化は望めないというギッシングの自然主義的リアリズムは、都市の場面から個人的な理念——例えば、ディケンズに時として見られる個性的な解釈による主題の美化——を削り取り、そうすることで都市化した社会における人間の疎外を強調している。レイモンド・ウィリアムズは『田舎と都会』で「ディケンズにおいては物理的な世界が人間と関係しないことは決してない。それはディケンズが作り、解釈したものである」と断じた。⁽¹⁰⁾ ディケンズの都市はそこに住む人間と語り手の声で構造物を人間化していた。一方、ギッシングのロンドンでは、型彫り師で贋金作りに手を出すボブ・ヒューイットは孤独であり、明らかに自分自身が作ったものではない周囲の都市の構造物から疎外されている。『ネザー・ワールド』は小説の最後の一行に明示されているように、「奈落の底まで敗残者たちであふれさせる社会の非情な力に対する抗議」(第四十章)の書である。ギッシングの世界では、労働者階級だけでなく下層中産階級でも、志を立てた人物が生存競争から脱落し、近代都市ロンドンの外的な力によって疎外される。そのような敗残者たちが集められたギッシングの小説は、ピューリタンの自助の精神セルフ・ヘルプと実学の精神でヴィクトリア朝中期の繁栄を支えた中産階級の様々な立志伝中の人々からなるサミュエル・スマイルズの『自助論』(一八五九年)と対蹠的な世界だとと言えるだろう。

第三節 都市と郊外の同一化

一八五〇、六〇年代の〈イギリス大好況期〉の嚆矢となるロンドン万博において、鉄道利用の割引料金で一般大衆の団体旅行を企画して成功したトマス・クックは、ロマン主義的魅力を持つスイスや教育的価値の高いイタリアに目を向けるようになり、一八七三年には『ヨーロッパ鉄道時刻表』を発行し、それまでは特権階級だけのものであった外国旅行を中産階級にも可能にした。『ネザー・ワールド』を書き上げたギッシングは、一八八八年

九月末に少年時代からの憧憬の地であったイタリアへ旅立ったが、その旅の様子が手紙を通してよく分かるように、妹のマーガレットにクック社の『南イタリア・ガイド』を送っている (Letters 3: 275)。そして翌年十一月にも、彼は自分の教育の基礎工事を仕上げるためにギリシャへの旅に出た。多くの批評家が指摘するように、ギッシングがロンドンを離れた二回の大陸旅行を彼の生涯における転換点と見なすことは可能だ。彼自身も旅行中に日記の中でロンドンの都会生活を呪い、「私は海峡を渡ると純粹素朴な詩人となった」 (Diary 54) と書いているからである。さらに、二回目の大陸旅行から戻って約一年後の一八九一年一月、彼はロンドンから逃れてデヴォン州のエクセターへ引っ越し、二年間そこで生活することになる。

一八八〇年代のギッシングの小説は、その大半が陰鬱な労働者階級に焦点を当てたものだったので、このようなロンドンからの脱出は彼の気持ちを幾らか楽観的、審美的にしたようである。例えばマイケル・コリーは、「ギッシングは『ネザー・ワールド』出版後、人物と物理的環境との決定論的相関関係から逃れるようになった」 (Collie, *Alien Art* 68) と論じている。しかし、この人間と空間との「決定論的相関関係」はギッシングの小説を通して常に維持されているので、その関係が以後の作品では単に他の社会領域に移されただけで反論せざるを得ない。というのは、登場人物がどこにしようが、ギッシングの小説ではロンドンの支配体制から逃れる道はないのだから。

『ネザー・ワールド』のクラークンウェルから『女王即位五十年祭の年に』(一八九四年、以下『五十年祭』と略記)のキャンバーウェル(図③)への移動は、労働者階級の生産に重きが置かれたロンドン内部の地区から、ロンドン南部の郊外ブリクストンの近くにあるミドルクラスの消費に重きが置かれた地区へ移動である。だが、そのように焦点が移っても、人間と空間の関係および個人と社会の関係は変わらない。一八九三年六月、ギッシングはデヴォン州からブリクストンへ引っ越ししていたが、このブリクストンでの生活はロンドン中心部を支配するイデオロギーが郊外にも浸透していることを彼に認識させただけだった。鉄道のような交通機関が都心の経験を郊外まで伝えていたからである。十九世紀の郊外は都市と距離を保つことを理想としていたにもかかわらず、都市との結びつきによって維持・管理されていた。英国支配下の平和に支えられた一八五〇、六〇年代の大好況期



図③ 1870年代のロンドン郊外、キャンバーウェル・グロウヴ

に最も富裕化して経済的実力階級となったミドルクラスの郊外の住人たちもまた、ロンドンの中心に住む労働者階級と同様に物質主義、商業主義、資本主義といった目に見えない都会の支配勢力に従属していたのである。

ロンドンの郊外は一八六〇年代から急速に発達して八〇年代にピークに達した。⁽⁺⁾ 十九世紀前半の都市化とは対照的に、ヴィクトリア朝後期に見られたのは都会からの脱出であった。かつての郊外は都市生活の最も墮落した部分（賤業者や犯罪者）を遠ざけるための場所だった。昔の都市警察には原始的な監視能力しかなかったため、郊外が無法地帯と思われていたのも当然である。⁽⁺⁾ だが、郊外はやがてロンドンで激増した労働者たちと距離を置き、自分の富を物質的に認識したい新興ブルジョア階級の理想の場所となった。『五十年祭』のキャンパーウェルは、十八世紀末には人家がまばらな寒村にすぎなかったが、百年後には人口が約二十五万人となり、⁽⁺⁾ ロンドンのミドルクラスが住む郊外の縮図と見なされていた。

ギッシングはミドルクラスの価値観の支配——都市に集中する産業・経済の発展を重視することや精神的な生活（芸術志向の生活）を軽視すること——を恐れていた。これが『五十年祭』の中心テーマとして郊外生活の空虚さに焦点が当てられた理由である。サバービア（郊外生活特有の様式・風俗・習慣）の現実は、『暁の労働者たち』のヘレン・ノーマンが郊外のハイベリーで送るような理想化された半田園的な隠棲生活とは違うのだ。ギッシングはそのことをブリクストンでの経験によって悟っていた。その証拠に、『五十年祭』のキャンパーウェルは世間体^{リスベクタレリテイ}と地位の向上に執着するミドルクラスの虚栄と偽善が支配した郊外として描かれている。

ヴィクトリア女王の即位五十年記念式典（一八八七年）には、世界中の様々な国から代表者たちが表敬のために出席し、その豪華絢爛たる祝賀行進（本書第八章・図④）を見たロンドンの人々は、太陽が没しない大英帝国の無敵を誇る威容を初めて体験した。この五十年祭はイギリスの発展や変化の象徴と見なされたが、そうは思っていなかったギッシングの態度は実に冷ややかである。「郊外の神（suburban deity）」（第五部第三章）と呼ばれるサミュエル・バームビーにとって、五十年祭を祝うのは英国の「五十年の発展が完了したことを祝う」ことであり、それは「人類の歴史に前例のない国家的な発展」（第一部第七章）に他ならない。郊外社会のイデオロギーを体現するバームビーを通して、サバービアが首都ロンドンの社会システムから分離されておらず、むしろその本質的な一部であることをギッシングは強調している。経済的に成功したバームビーは郊外のキャンパーウェルの中心にあるダグマー・ロード（ダグマーはデンマーク語で「栄光の日」の意）へ引っ越すことができた。しかし、彼が「ダグマー・ロードという住所の魅力を密かに認めていた」（第四部第一章）ことは、国家が発展しているという考えも、郊外が汚濁の都市から分離されているという考えも、自己欺瞞的な虚構にすぎないことを示している。

広告業のラクワース・クルーは文明の発展に関して「近代の科学と広告の技術がなかったならば、どうやって私たちは今のようになり得ただろうか」（第一部第八章）と言う。こ

のような考えはキングズ・クロス駅の構内に見られる近代文明の象徴としての広告、「一ヤードでも利用できる壁があれば、至る所で人の目に訴える広告」（第五部第二章）と結びつけられる。鉄道駅の列車が広告の伝播性を連想させるのは、この交通機関が商業主義というロンドンを支配するイデオロギーを郊外および国内の隅々まで伝達するからに他ならない。それまで画然と隔てられていた都市と郊外が鉄道によって連結され、都市も郊外も商業主義の影響を受けて同一化されるという現象は、ヴィクトリア朝末期になって特に顕著になっていた。ミドルクラスを描いたギッシングの一八九〇年代の作品は、そうした史実の宝庫である。^(十四)

第四節 現実の都会と虚構の田舎

後期ヴィクトリア朝も時代が進むにつれ、ロンドンから遠く離れた地方の農村生活は、鉄道を通して都会から押し寄せる新聞、雑誌、観光客、そしてギッシングのような長期滞在者などのために、都市郊外のような生活に変貌しつつあった。歴史家トレヴェリアンの指摘にあるように、一八七〇年の初等教育法によってヴィクトリア朝末期には田舎の農業労働者やその家族たちも読み書き能力を持つようになり、軽い記事と写真からなる廉価な日刊大衆紙『デーリー・メール』（一八九六年創刊）などが至る所で読まれていた。^(十五) ロンドン万博があった一八五一年は都市と農村の人口が同じになった記念すべき年であるが、それから半世紀の間に農場労働者は半減してしまっていた。都会生活の悲惨さや工場労働の苦勞を聞いても、都会へ出たいという彼らの希望は抑えられなかった。田園生活への憧れは支配階級の感傷にすぎず、農民にとっては田舎の風景を破壊する鉄道も都会の素晴らしい生活につながっているように見えたのである。^(十六)

確かに、鉄道が通っていないデヴォン州の内陸部などでは理想的な田園生活が残っていたが、少なくともギッシングの田舎の描写には常に文化的エンクレーブへの逃避という私的願望が隠されている。言葉を換えれば、彼の小説における田舎は決して現在の現実ではなく、都市の商業主義から逃れるための慰安の地という虚構にすぎないのだ。都会が裏舞台となって田舎が表舞台となる随筆集『ヘンリー・ライクロフトの私記』（一九〇三年、以下『私記』と略記）ですら、ロンドンの支配から脱してはいない。

一八九四年九月、ギッシングはロンドン南東の郊外エプソムへ移ったが、三年後には肺気腫を患い、田舎へ引っ越すように医者に命じられた。その時すでに彼はイーディス・グリーンウッドと衝動的な再婚をしていたが、彼女が階級的にも知的にも意に満たなかったので、一八九七年二月にはエプソムから逃れ、デヴォン州の海岸町ハドリ・ソルトトンに行き一人暮らしを始めた。やがて、一八九八年七月から中産階級のフランス女性ガブリエル・フルリと関係を持つようになり、これが失意の時の慰めとなる。ここで見落としてならないのは、フランスで送るようになるガブリエルとの重婚生活においても、彼が本当の満足を見出せなかったことだ。彼は幸福の最中にあっても、英国を離れたことや大都会

ロンドンの知的刺激がなくなったことを嘆いていたと考えられる。なぜならば、ガブリエルは一九〇一年六月にH・G・ウェルズへの手紙 (*Letters* 8: 202) で「彼は生まれつきの不満家です。・・・彼にとって常にパラダイスは自分のいない場所にあるのです」(傍点は筆者) と語っているのだから。

ギッシングは『私記』の焦点を境界線が細かく画定された都市空間からデヴォン州エクセターの田舎家(図④)に移している。一八八五年八月の手紙の中で、彼は「六ヶ月ほど本当の田舎家でゆっくりとホームーでも読めるのであれば、人生の一年ぐらいをあげてもよい」(*Letters* 2: 337) と書いていた。近代都市からの私的逃避というのはギッシングの生涯と作品にとって重要な概念である。語り手ライクロフトと作者ギッシングの見解の類似性は少なくとも表面的には明らかだ。『私記』を「小説というよりは薄い仮面をつけた個人的回想」(Halperin 307) と呼んだジョン・ハルペリンのように、この作品を多くの批評家が作者の「精神的な自伝」(Lowell 41) として見ている。だが、ギッシングが一九〇三年二月の手紙 (*Letters* 9: 58) で『私記』を回想録^{メモリー}というよりは熱望^{アスピレーション}と言っていることから、作者と語り手のギャップに留意せざるを得ない。この手紙は『私記』の虚構性を語っているのではあるまいか。ギッシングが近代都市で抱いた疎外感^{ユートピア}は逃避願望を育んだが、ロンドンに対抗するための実現可能な代替物は、実際にはどこにもない理想郷として以外に何ら提示されていないからである。



図④ アーサー・クロード・ストローン『デヴォンの田舎家』(1901年)

シャーロック・ホームズが四十九歳で探偵を引退して風光明媚なサセックス州の丘で読書と養蜂という隠遁生活に入ったように、文筆家のライクロフトは五十歳の時に亡友から終身年金を遺贈されてデヴォン州の田舎家に隠遁した。しかし、ライクロフトの田舎への逃避もまた私的なもので、非現実的だと言わねばならない。『私記』の「序文」によれば、ライクロフトはロンドンを去る前に著述業に別れを告げ、出版用にはもう一行も書きたくないと語っている。それに対し、ギッシングの方はロンドンを離れても書き続け、まだ文学的・商業的成功を望んでいた。ライクロフトとは違って、ギッシングは依然として文学市場を意識し、田舎で生活する自分自身を外界であるロンドンの意志に従わせねばならないと考えていたのだ。ピエール・クスティヤスが道破したように、語り手ライクロフトの田舎への逃避は決して作者ギッシングを満足させていなかったのである。(十七)

一八九一年から九三年にかけてデヴォン州エクセターに住んでいた頃、ギッシングは自分の芸術の源泉たるロンドンから離れすぎてしまったと感じていた。それは「このデヴォンで二年ほど浪費してしまったようだ。私の題材があるのは明らかにロンドンだ」(*Letters*

5: 104) と一八九三年四月に弟アルジェノンへ書き送った手紙から分かる。ある程度の金銭的余裕があるライクロフトのような隠遁した文筆家は別にして、知性と教養を求めるギッシングの若者たちにとって、ロンドンから離れることには深刻な損失が伴う。文学界での出世という野心を持つ『三文文士』(一八九一年)のジャスパー・ミルヴェインにとって、「どこか郊外に小さな家を持つ」ということは「野心を幾らか放棄する」(第三十四章)ことを意味する。ギッシングは売れない作家エドウィン・リアドンに次のように言わせている。

「・・・ぼくは^{ブレインズ}知力を意識していたので、自分にとっての唯一の場所はロンドンだと思っていた。・・・ぼくたちはロンドンについて今なお知的生活の唯一の中心地であるかのように考えているのさ。・・・だけど、実際、今日の知識人はロンドンから逃避しようと懸命になっている——一度この場所のことが分かってしまうとね。・・・ロンドンに住まなければならないのは、特殊な仕事に携わっている稀な場合だけだよ。・・・このロンドンが知力のある若者たちを鬼火のように引きつけているのは大きな不幸だね。彼らはロンドンに出てきても、墮落するか身を滅ぼすかのどちらかだ。彼らの本当の領域は田舎の平和な生活なのだよ。ロンドンで成功できるタイプの人間は、多かれ少なかれ冷淡でシニカルな人間なのさ。・・・」(第三十一章)

これは文学市場の生存競争に負けた敗残者による〈酸っぱいブドウ〉と〈甘いレモン〉の論理である。この合理化がうだつの上がらないストレスに対するリアドンの防衛機制なのか、ギッシングが自分のストレスを彼に投影した結果なのかはさておき、^(+八) ディケンズのようにロンドンで成功することが「鬼火 (will-o'-the-wisp)」のように追ってみても達成できない望みと分かっているながら、「特殊な仕事に携わっている」ギッシングは追わずにいられなかったのではないだろうか。そして、(理性では押さえることができない) この衝動こそ彼の都市に対する両価感情の源であるように思えてならない。

そのような衝動はライクロフトにも見られる。ライクロフトの都会から田舎への物理的な退却は、メアリ・ハモンドが言うように、孤独で内省的な生活を送ると同時に、中途半端な教育を受けた大衆のためではなく、自分自身のために書くという精神的・芸術的な意味を持つ退却だと言える。^(+九) とはいえ、ロンドンの「昔なじみの恐ろしい場所 (dear old horrors)」へのライクロフトの(強迫観念と言ってもよい) ^{ホームシックネス} 懐郷の念を、彼が若い頃に抱いた「野心」や「希望」(「春」第十章)と切り離して考えることはできない。ライクロフトは自発的にロンドンから離れたにもかかわらず、彼の意識は常に現実の都会へ引き戻されている。田舎のことを考えている時でさえ、それは以前のロンドン生活の現実とのコントラストにおいてのみ重要なのである。「閑居幽棲の作家 (An Author at Grass)」という『私記』の原題が暗示するように、ライクロフトは都会を離れることで実質的な活動をやめて世を捨てたのだが、これは一種の精神的な自殺である。ロンドンで生活することは大英帝

国の中心で生きることであり、その圏外で生きようとするのは非現実と死を受容することに他ならない。ロンドンにはギッシングの小説における唯一の現実だったのであり、『私記』の田園生活ですらロンドンに支配されていたのである。

ライクロフトの田舎は後期ヴィクトリア朝の社会で疎外された知識人や芸術家の現実逃避への衝動を映し出した虚構の地だと言える。この虚構性はギッシングが逃避願望を成就できないことを示している。ギッシングは自分の芸術の中で新世界を創造することも社会を再構築することもせず、ただ近代社会の現実の中で実現不可能な私的理想空間を描いているだけなのである。マーティン・ウィーナーは「世界初の産業国では、産業主義は都市化を率先したが、完全になじんでいたわけではなく、英国人は都市を無視したり、蔑んでいた」と言っている。^(二)しかし、ギッシングが都市を蔑むことはあっても、無視したりすることは決してなかった。ロndonはそこから周縁化されたギッシングにとって彼の小説の中心だったのだから。ギッシングは真善美の追求、獲得した知識の伝達、人に感動を与える精神活動といった狭義の文化を何よりも重視していた。彼の場合、そうした文化を育む社会は、たとえバビロンのように華美で悪徳がはびこっていようと、少年時代の古典学習で燦然と輝いていた古代のローマやアテネのように文明化された大都市、すなわちロンドン以外に考えられなかったのである。

ロンドンの現実に幻滅して、郊外の田園都市に引っ越そうが、田舎に安住の地を求めようが、ギッシングは実際そこに住んでしまうと、都会の文化と知的な刺激を求めざるを得なかった。もっとも、一九〇三年の年末にピレネー山麓の村で四十七歳の短い人生を終えることなく、ロンドンへ戻る事ができていたとしても、すぐまた彼は都会生活を呪って文化的エンクレーブとしての田舎や外国に逃避していたであろう。妻ガブリエルの言葉は正しかった——生まれつきの不満家であるギッシングにとっては、「自分のいない場所がパラダイス」だったのである。

註

(一) ネオ・ゴシック様式の重厚な建築物は、ヴィクトリア朝の経済を牛耳った中産階級の俗悪な成金趣味と結びつけられることが多い。例えばE・M・フォスターは、『ハワーズ・エンド』(一九一〇年)の第二章で無限^{インフィニティ}を暗示するキングズ・クロス駅に対して、「上辺だけの壮麗さ (facile splendours)」が目立つセント・パンクラス駅を蔑視した。しかし、ギッシングは『五十年祭』でキングズ・クロス駅構内の広告を「文明が生み出した屑^{くず}」(第五部第二章)と言っている。

(二) George Orwell, "George Gissing," *Collected Articles on George Gissing*, ed. Pierre Coustillas (London: Frank Cass, 1968) 50.

(三) Asa Briggs, *Victorian Cities* (1963; Harmondsworth: Penguin, 1980) 349-50.

- (四) Peter Keating, *The Working Classes in Victorian Fiction* (London: Routledge, 1971) 24.
- (五) ジェイコブ・コールグが指摘するように、ブースが詳細に記述したロンドン、ギッシングが知っていたロンドンと同じで、メイヒューの著書がディケンズ小説の確証となったように、ギッシングの写実の正確さを裏づけている (Korg 32)。
- (六) ロンドンから遠く離れたウォンリーの村はウィリアム・モリスの理想の保守版だと言えよう。それは歴史の進行を逆にした非現実的な、社会のエリートにとって周縁的な避難所にすぎない。皮肉にも、『民衆』における産業都市の破壊と田園の回復は、モリスの社会主義宣伝の物語『ユートピア便り』(一八九一年)で起こる田園化の過程と同じ道をたどっている。ギッシングもモリスも産業革命による社会の変化に反対する立場だが、モリスが特権階級の芸術を労働者階級にも普及させるためにユートピアをロンドンに置いて社会全体の再生を考察したのに対し、ギッシングは芸術を基本的に貴族やインテリゲンチヤのものと考えていた。
- (七) Gareth Stedman-Jones, *Outcast London: A Study of the Relationship between Classes in Victorian Society* (London: Clarendon, 1971) 240.
- (八) J. R. Kellet, "The Railway as an Agent of Internal Change in Victorian Cities" in *The Victorian City: A Reader in British Urban History, 1820-1914*, ed. R. J. Morris and Richard Rodger (London: Longman, 1993) 181-208.
- (九) Stedman-Jones 161.
- (十) Raymond Williams, *The Country and the City* (London: Chatto and Windus, 1973) 161.
- (十一) Kellet 149-80.
- (十二) Donald J. Olsen, *The Growth of Victorian London* (Harmondsworth: Penguin, 1976) 191.
- (十三) V. T. J. Arsell, *British Transformed: The Development of British Society since the Mid-Eighteenth Century* (Harmondsworth: Penguin Education, 1973) 85.
- (十四) 大都市圏での鉄道の拡張によって郊外に住むようになった人たちについては政治的・社会的調査がなされなかったし、ギッシング以外に彼らに関心を示した小説家もほとんどいない——ジャック・シモンズはそう述べている。Jack Simmons, "The Power of the Railway" in *The Victorian City: Images and Realities*, ed. H. J. Dyos and Michael Wolff, 2 vols. (London: Routledge, 1973) 1: 299. 例えば、シティーまで鉄道で通勤するマムフォード氏とその妻が金のために受け入れた下宿人に家庭を乱される『下宿人』(一八九五年)では、郊外のサットンに住みながらもロンドン時代の思考から抜け出せず、世間体を最優先する下層中産階級の哀れな姿が、揶揄と嘲笑の対象となっている。
- (十五) G. M. Trevelyan, *English Social History* (1942; Harmondsworth: Penguin, 1982) 588-89.
- (十六) W. J. Reader, *Life in Victorian England* (London: Batsford, 1964) 53.
- (十七) Pierre Coustillas, "Gissing's Variations on Urban and Rural Life" in *Victorian Writers and the City*, ed. Jean-Paul Hulin and Pierre Coustillas (Villeneuve d'Ascq: Publications de l'Université de Lille III, 1979) 143.

(十八) 一九〇〇年十月三十一日、漱石はロンドン塔を見物する前に群集や交通に圧倒され、これから始まる留学生活で神経をやられるようなストレスを覚え、「マクス・ノルダウの退化論」を信じる心境になっている。ノルダウの著書『退化論』（一八九二年）によれば、近代の芸術家は過密する都市や工業化された生活によって脳の中樞が冒された病人と見なされる。産業革命を経て環境が激変したロンドンで適合できずに疎外感に苦しんだギッシングも、『三文文士』のリアドンのように人間社会と同様の熾烈な「本の社会における生存競争」（第三十三章）でストレスを味わっていたはずである。

(十九) Mary Hammond, “‘Amid the Dear Old Horrors’: Memory, London, and Literary Labour in *The Private Papers of Henry Ryecroft*” in *Gissing and the City: Cultural Crisis and the Making of Books in Late Victorian England*, ed. John Spiers (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2006) 176.

(二十) Martin J. Wiener, *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit, 1850-1980* (Cambridge: Cambridge UP, 1981) ix.

『大いなる遺産』——逆様の世界と自己欺瞞

松岡光治

1. 時代背景とトポグラフィ

ディケンズは『大いなる遺産』の時代設定に関して具体的な日付けを記していないが、作中に散見される内的証拠によって時代背景を窺い知ることができる。例えば、成年の21歳になったばかりの主人公ピップ (Pip) が狂恋の相手エステラ (Estella) と馬車で通った街路のガス灯 (33) は、1827年以降に本格的に使用され始めたものである。ピップが親友ハーバート (Herbert Pocket) とボート漕ぎの練習をして旧ロンドン橋 (46) をくぐった時は23歳であったが、この橋は1831年に取り壊されている。そうした内的証拠によって、ピップが生まれたのはディケンズが生まれる5年前の1807年頃だと分かる。また、ピップはパイを盗んだ恐怖から抱きついたテーブルを「現代の霊媒」(“a Medium of the present day,” 4) のように動かすが、心霊主義 (Modern Spiritualism) が1852年にボストンの霊媒 (Maria B. Trenholm Hayden, 1826-83) によってイギリスに紹介されて流行した史実から判断するならば、語り手ピップは少なくとも45歳以上となる。したがって、語り手ピップが過去を振り返っている時期は、ディケンズが『大いなる遺産』を書いていた時期 (48~49歳) とほぼ同じ頃だと考えてよい。

この小説で描かれるロンドンの様々な場所には実名が使われている。それに対し、作品冒頭で描かれるピップの生まれ故郷については、テムズ川とメドウェイ川の河口に挟まれた沼沢地帯 (Hoo Peninsula) のどこかであること以外は確定できない。ピップが義兄で鍛冶屋のジョー (Joe Gargery) と一緒に住んでいる村に関してはクーリング (Cooling) とローハイナム (Lower Higham) の説がある。クーリングについては、そのセント・ジェイムズ教会の墓地に語り手ピップが夭折した5人の兄弟の墓石について記した「長さ1フィート半ほどの小さな菱形の石」(1) が実際にあり、ディケンズがしばしば友人を連れて見せに行った (Forster 8: 3) こともあって、説としては有力である。一方、ピップが呼ばれて出かける (父親が醸造業で財をなした) 中産階級のミス・ハヴィシャム (Miss Havisham) の住む町は、ディケンズが幼少時代を過ごしたKent州チャタムの隣町ロチェスター (『エドウィン・ドルードの謎』の舞台クロイタラムのモデル) であり、これについては異論がない。そして、ミス・ハヴィシャムの屋敷 (Satis House) はロチェスターの本通からはずれたメイドストーン・ロードに



あるレストレーション・ハウスがモデルとなっている。また、ジョーの叔父パンプルチュック (Pumblechook) の店と紳士になったピップが泊まる青猪亭 (Blue Boar Inn) は、それぞれ現在もロチェスターの本通にあるイースゲイト・ハウス (ディケンズ・センター) の斜め向かいの家とロイヤル・ヴィクトリア・アンド・ブル・ホテルだと言われている。

2. 執筆、出版に至る経緯

ディケンズは『大いなる遺産』を 1860 年 9 月下旬から書き始めたが、その構想は『春夏秋冬』に自ら寄稿していたエッセイの一つから生まれた。同じ月の中旬に、彼は知友フォースター (John Forster, 1812-76) に宛てた手紙で、「とても素晴らしい、斬新でグロテスクな着想がひらめいたので、この考えを新しい小説のために取っておいた方がよいと思いはじめています」と記している。このグロテスクで悲喜劇的な構想とは、主人公ピップに脱獄囚マグウィッチ (Abel Magwitch) と善良で愚かな義兄ジョー・ガーサリーを絡め、それを中心に物語が回転する軸を設けることであつた。しかし、フォースター宛ての 10 月 4 日付けの手紙を読めば、この考えをディケンズは従来どおり 20 回の月間分冊の形式で出版するつもりだったことが分かる。ところが、その頃『春夏秋冬』の巻頭に連載されていたアイルランドの作家 (Charles Lever, 1806-72) の小説 (*A Day's Ride*) が不評で、雑誌の売れ行きが落ち込んでいたので、ディケンズは参謀会議を開き、自ら割り込んで巻頭小説を書くことに決めてしまった。

こうして『大いなる遺産』の出版は週刊形式に変更され、1860 年 12 月 1 日号から連載が始まった。具体的には、第 1 部 (*The First Stage of Pip's Expectations, Chaps. 1-19*) が 1861 年 2 月 16 日号まで、第 2 部 (*The Second Stage, Chaps. 20-39*) が 2 月 23 日号から 5 月 11 日号まで、第 3 部 (*The Third Stage, Chaps. 40-59*) が 5 月 18 日号から 8 月 3 日号まで連載され、いずれも 12 週間に及んだ。そして、この小説のおかげで『春夏秋冬』の発行部数は、約 6 万部の日刊新聞『タイムズ』より数千部ほど多くなった。ディケンズは自分にとって 5 回目の週刊連載となる『大いなる遺産』で、雑誌の巻頭に 2 段組で 5 ページ強、約 5,200 語を毎週ほぼ均一に書いたわけであるが、スペースについて漏らした不平不満にもかかわらず、これは彼の最初の週刊雑誌『暮らしの言葉』で培われた編集の才と臨機に事処理する類まれな能力を証明するものだと言える。

3. 作品の批評史

ニュー・クリティシズムの流行まで (1860-1960)

『大いなる遺産』の出版直後の書評には、例えば 1861 年 7 月 20 日の『サタデー・レビュー』に代表されるように、人物描写における矛盾や誇張に難癖を付けながらも、ディケンズが 1850 年代に書いた一連の暗い小説からユーモアに富む前期の明るい小説への回帰を歓迎したものが多かった。1860 年 10 月初旬にフォースターへ宛てた手紙で、ディケンズが『二都物語』のようにユーモアの不足を嘆かれることはないでしょう。冒頭場面の全体的な効果を非常に滑稽なものにしたと思っています」と書いたように、確かにピップとジョーの関係は笑いを誘うものである。しかしながら、その効果が脱獄囚のグロテスクで

陰鬱な描写によって中和されているのも事実である。フィリップ・コリンズは、牢獄のテーマや自信と陽気に欠ける主人公などの点で、『リトル・ドリット』(1855-57)や『二都物語』(1859)との共通性を指摘している(Collins 345)し、人間を墮落させる金の影響力というテーマでは『互いの友』(1964-65)と密接な関係があるので、『大いなる遺産』はやはり後期作品群に共通する悲観的なトーンに支配された小説だと言わねばなるまい。

1880年代から1940年過ぎまではディケンズ批評にとって冬の時代であった。スウィンバーン(A. C. Swinburne, 1837-1909)、ショー(G. B. Shaw, 1856-1950)、ギッシング(George Gissing, 1857-1903)、チェスタトン(G. K. Chesterton, 1874-1936)といった作家たちは『大いなる遺産』を高く評価したが、この小説もまた批評家の間ではずっと日の目を見なかった。1941年に出版された2つの研究書、すなわち伝記的事実からディケンズの心中の葛藤に注目して負の側面をえぐり出したエドマンド・ウィルソンの『傷と弓』と、ディケンズがきた時代と社会を実証的に論じたハンプリー・ハウスの『ディケンズの世界』は、この小説家の再評価に先鞭をつけたが、まだ春の到来とは言えなかった。しかし、1950年代になって作品の形式と内容との融合状態を明らかにするニュー・クリティシズムが流行するにつれ、『大いなる遺産』は恰好の研究対象となった。この小説が高い評価を受けるようになった理由は、形式的に焦点が定まり、作品のあらゆる段階において各部分が密接な繋がりを持っている点、つまり前期作品群には見られなかった作品の統一性にある。実際に、この頃からニュー・クリティシズムの方法によってイメージやシンボルの分析が行なわれた。『荒涼館』の〈霧〉や『リトル・ドリット』の〈牢獄〉のような大がかりな象徴的意義こそ欠けているものの、『大いなる遺産』の統一性を強めている要素としては、時を定めて効果的に使用されるイメージの他に、ピップの恩恵者は誰かというミステリーを中心に巧みに操作されるプロット、相互に作用する社会的および個人的な不正に対するアイロニーなどが挙げられる。

語りの構造もまた『大いなる遺産』が高い評価を得た要因の一つである。この小説には、遺産相続の3つの段階でいろいろな経験をする登場人物としてのピップ、年功を積んで過去を回想する語り手としてのピップ、そして登場人物と語り手のピップの背後にいる作者としてのディケンズという3つの視点がある。語り手ピップは登場人物ピップの言動について親近感を抱いて描くと同時に、その愚かさをアイロニカルに語るのに十分な距離を保っている。この着かず離れずの状態が語りの客観性を読者に強く感じさせるのである。

同じ一人称小説であっても、『大いなる遺産』は自分の生前の出来事が弁解もなく記される『デイヴィッド・コパフィールド』(1849-50)や現実でありそうにないことが何度も記される『荒涼館』(エスタ・サマソンが語る部分)とは違い、ギッシングが指摘したように、「語り手にディケンズ自身の天才を持たせることで現実感を驚くほど入念に保っているし、書き手が見たり聞いたりできないことは何ひとつ見たとも聞いたとも記されていない」(Gissing 60)。また、『荒涼館』で哀れみや自己犠牲といった資質を備えた女性の語り手を試みた結果、ディケンズは『大いなる遺産』で男性的な強さと女性的な優しさが混在するような、視点の偏りの少ない語り手を創造することができたというアン・テイラーの指摘(Taylor 152)も首肯できる。語り手ピップの独善性や語りの中に見られる騙りを指摘する

批評家もいるが、『大いなる遺産』の語りの評価は総じて高い。

主人公の自律性に関する批評 (1950-1980)

ディケンズが前期作品群に見られたような気ままな筆の運びを押さえ、作品の統一性を意識して執筆した『大いなる遺産』は、ニュー・クリティシズムの時代に高く評価されると同時に、その副産物として主人公の自律性に関する批評を生み出した。換言するならば、教養小説に特有の精神的成長 — 社会風潮や時代精神に影響されて俗物に堕したピップが、最終的には外部からの力に縛られることなく、新しい規範に従って行動すること — が、作品の統一性に照らして考察されたのである。その結果、1950年から1980年にかけては個人と社会の関係を分析した論文が数多く見られる。

例えば、J. ヒリス・ミラーはピップを「ディケンズのヒーローの原型」(Miller 248)として捉え、この主人公は富、社会的地位、教養があれば、人格は自然に備わるという社会通念が全くの偽りであるという真実に、最後は立ち向かっているという見解を示した。敷衍すれば、ピップは社会的な孤立から逃れる唯一の道が〈愛〉、つまりキリスト教の自己犠牲的な愛であることを学び、その愛をマグウィッチに対する態度の変化を通して実践することで、社会に対する個人の本当の自我 (selfhood) を発達させているのである。

Q. D. リーヴィスもまたピップをヴィクトリア朝社会の普通の人間の典型であると考え、彼の言動を必然的なものと見なした (Leavis 330) が、この歴史的な解釈に実証を試みたのが『ヴィクトリア朝小説における紳士観』の著者ロビン・ギルマーである。ディケンズは『大いなる遺産』の時代設定を19世紀初期(犯罪者たちが残酷な扱いを受けていた時代)にする一方で、小説が執筆された1860年当時(国民の紳士意識が強くなった時代)を念頭に置き、貧しい鍛冶屋の少年が紳士になるという典型的な具体例を描いて見せることによって、ヴィクトリア朝社会が上品であることに拘泥した複雑な要因を示すことができた (Gilmour 129) — というのがギルマーの主張である。つまり、紳士 (gentleman) になりたいという願望は、自分の階級から抜け出したいという名利に囚われた俗物根性だけでなく、洗練されて見苦しくない生活の中で優しい男 (gentle man) になりたいという気持ちでもあったという観点から、ピップの紳士階級への憧れは肯定的に解釈できるわけである。

ピップの心中では野心と良心(罪意識)とが絶えずせめぎ合っている。このような相克で苦しむピップについて、『大いなる遺産』の前年に出版された『自助伝』(Samuel Smiles, *Self-Help*, 1959)の精神を体現しているハーバート・ポケットは、その精神を喪失して大いなる遺産相続の見込みだけに依存する親友ピップの実体が「性急と逡巡、大胆と内気、行動と夢想が奇妙な具合に混在している善良な男」(30)であることを見抜いている。したがって、ディケンズがピップの道徳的な葛藤をマグウィッチと似非紳士コンピソン (Compeyson) のみならず、対照をなす副次的な人物たち — ハーバートと鍛冶屋の職人オーリック (Dolge Orlick)、ハーバートの父から紳士教育を受けるスタートップ (Startop) と邪悪な男ドラムル (Bentley Drummle)、田舎の仕立屋の小僧 (Trabb's boy) と復讐小僧と呼ばれる召使い (the Avenger, a.k.a. Pepper) など — にも反映させている点に、読者は気づく必要がある。

ピップの強い罪意識は、『大いなる遺産』を「ヴィクトリア朝中期の紳士観を検証した最も説得力のある小説」(Gilmour 138)と考えるギルマーによれば、まだ残酷さが残ってい

た摂政時代 (the Regency, 1811-20) から抜け出したヴィクトリア朝の中産階級 — 犯罪と文明、暴力と上品は対立せずに密接な関係にあることを認めたくなかった中産階級 — の人々が、自分の犯罪性や暴力性に対する意識的な抑圧にもかかわらず、時として抱かざるを得なかった罪悪感の典型ということになる。このような中産階級の精神構造を理解するためには、地表で美と醜に見える花と雑草も地面の下では互いの根を密接に絡ませていることを思い起こせばよい。弁護士ジャガーズ (Jaggers) の家政婦モリー (Molly) とマグウィッチという犯罪者たちの娘として、中産階級のエステラを設定したディケンズの目的は、表面上は異なって見える対立物も表面下では密接な関係にあるヴィクトリア朝社会の実態を暗示することであったと思われる。美醜や善悪を混在させるピップのような都市生活者が、そうした相克の苦しみを感ぜずには済むためには、ジャガーズの事務員ウェミック (John Wemmick) のように仕事と私生活を画然と分けた機械的な生活を送るしかない。その意味において、ウェミックの自宅が都市と田舎の接点である郊外のウォルワース (Walworth) に位置しているのは興味深い。

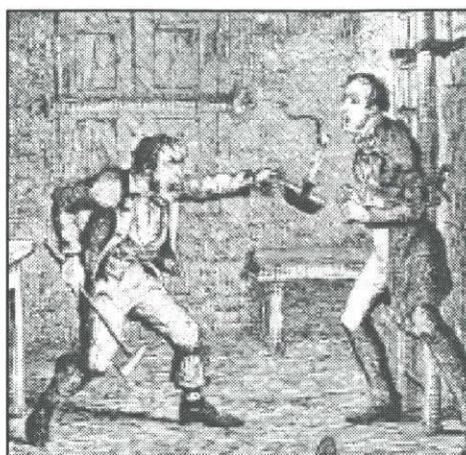
ピップの罪意識は、姉さん女房としてジョーを支配する家母長のジョー夫人 (ピップの実姉) による暴力と、彼女の性悪説に基づいた厳格な福音主義的教育によって、植え付けられたものである。その証拠に、脱獄囚のために自分のパンをズボンに隠した時、ピップは姉のものを盗もうとしているという「罪意識」 (“guilty knowledge,” 2) に苛まれる。同様に、パンプルチュックや教会の庶務係ウォプスル (Wopsle) といった大人たちが、聖書の放蕩息子の物語 (4) やロンドン商人ジョージ・バーンウェルの物語 (15) の主人公たちとピップを同一視したことも、彼に罪悪感を抱かせる大きな要因となっている。脱獄囚との接触、ハーバートとの戦い、ジョー夫人の襲撃、いずれの場合もピップが抱く罪悪感は、いわれなきものである。罪悪感が強いピップが読者の同情を失わない理由としては、彼は「罪を犯すというよりも罪を犯される」(Welsh 108) 人物として描かれていることが挙げられる。作者はピップを俗物的な加害者として描写しながら、同時にヴィクトリア朝の時代精神や社会風潮の被害者であることを読者に意識させているのだ。その意味で、ピップの問題は個人の問題を超え、「資本主義が人間関係を歪めたヴィクトリア朝の虚偽に満ちた世界の象徴」になっているという指摘 (Lindsay 369-70) は正鵠を射ている。

ニュー・クリティシズムを超えて (1970-)

文学作品の統一性や自律性といったニュー・クリティシズムの理想を疑問視し、文学言語による構築物の特権性への信仰に異を唱える批評理論が流行し始めた 1970 年代以降、『大いなる遺産』の評価も変質するようになった。1983 年の『ディケンズ研究年報』(*Dickens Studies Annual*) 第 11 巻に掲載された 3 点の論文 — Robert Tracy, “Reading Dickens’ Writing”; Murray Baumgarten, “Calligraphy and Code: Writing in *Great Expectations*”; John O. Jordan, “The Medium of *Great Expectations*” — は、いずれも書くことの問題性に焦点を当てている。トレイシーは、ピップが読み書きを習得するにつれ、読み書きのできないジョーと疎遠になって道徳的に墮落している点に注目し、そうしたピップが改悛行為として書く物語を含めて、話すことに特権を与えた小説における書くことの問題性を論じた。また、

本章 (3) の「時代背景とトポグラフィ」で触れた「現代の霊媒」に着目したジョーダンによれば、罪意識の表われとして幽霊を見るピップも自分の物語を語るピップも『大いなる遺産』における霊媒と言えるので、ピップの書く行為には霊媒（心霊主義者）に必然的に伴う偽造の問題——“forger”に鍛冶屋と偽造者の意がある点に注意！——を孕んでいる。このように自らの主張を疑問視する自己言及的なテキストとして『大いなる遺産』を捉える方法が、ポスト構造主義の影響を受けていることは論を俟たない。

ポスト構造主義以降の批評理論によれば、それまで首尾一貫した正しい自己認識を持つと思われてきた人間の主^{サブジェクト}体は、歴史的、社会的、文化的、経済的な力に従属して (subject) いるという認識を避けるために、さまざまな幻想を創作してしまう。その最たる例は、おとぎ話の主人公と自己を同一視するピップの〈自己欺瞞〉である。実は、特権化された人間の主体（そこにあるとされている安定した自己同一性）を脱中心化するような読みの前兆は、批評理論が流行する以前からあった。



例えば、ピップの罪意識に独創的な分析を加えたジュリアン・モイナハンの論文がある。彼はオーリックがジョー夫人への襲撃 (15) やパンブルチュックへの強盗 (57) を働いたことに着眼し、オーリックをピップの悪の分身（鏡像）として捉えた。この画期的な解釈が説得性を持つのは、作品後半でオーリックがピップを石灰窯小屋に呼び出し、「貴様のうるせえ姉ちゃんを殺ったのは貴様だぞ」(53) と断じているからである。しかし、そうした視点から見れば、ピップを苦しめたエステラに虐待を加えるドラムルの存在もまた、オーリックの場合と同じだと言える。また、ピップの誤解を放置して彼を苦しめたミス・ハヴィンシャムについても、花嫁衣装の炎上場面で語り手ピップが用いた「私たちは不倶戴天の敵のように床の上で揉み合った」(49) という表現は、ピップが二度にわたって見た彼女の絞首刑についての幻覚 (8, 49) を考えると、不当に虐待された少年の抑圧された復讐心、あるいは彼女と他の女性たちが母性と女性性を拒むことによってピップに加えた危害に対する「象徴的な復讐——レイプ」(Hartog 259) を仄めかしていると解釈できる。

ここでポスト構造主義以降の批評理論を援用した代表的な論考を幾つか挙げておきたい。モイナハンの流れを汲む精神分析的批評としては、ピーター・ブルックスの「反復・抑圧・回帰」がある。プロットが最高度に秩序づけられた『大いなる遺産』にはプロット概念そのものを切り崩して無化するものがあると主張するブルックスは、サティス・ハウスを中心として構築された美しいおとぎ話のような公式のプロットが、醜い魔女（マグウィッチの名前に注意！）の物語という抑圧されたプロットによって常に侵犯されており、結局はピップも読者も満足の見出すことができないと述べている。

プロットに対する物語の優位性を前もって論証した原英一の「物語の不在と不在の物

語」は、説得力のある秀逸なディコンストラクション批評である。原は、パンプルチュックやウォプルスによって書かれた「犯罪者ピップの物語」、階級社会という巨大な他者が書いた「徒弟ピップの物語」、そしてピップの空想によって書かれる「大いなる遺産をめぐるおとぎ話」が、マグウィッチの書く「ピップの物語」の周囲を同心円のように取り巻いていることに注目し、それらは物語の不在という自己解体による消滅を運命づけられており、この崩れ去るテキストはピップのエステラに対する非理性的な愛という不在の物語を最後に提示していると主張する。

エドワード・サイードは、『世界・テキスト・批評』においてジャック・デリダの表象理論を考察する際に、『大いなる遺産』第31章のウォプルスと下手くそな一団による『ハムレット』上演の失敗を取り上げ、その失敗は「テキスト自体の表象あるいは上演をきちんと機能させることができないテキストの不十分な権威のせいである」(Said 198) と述べ、ディコンストラクションというデリダの哲学的な懐疑的戦略を例証してみせた。

更に、ポストコロニアリズム批評の基盤を提供したサイードは、『文化と帝国主義』の序論で再び『大いなる遺産』を取り上げ、マグウィッチのようなアウトサイダーを収容する流刑の植民地(豪州)に対して、中心(帝都ロンドン)と周縁(植民地)の貿易を活性化させる健全な植民地(生まれ変わったピップが熱心な事務員として働く東洋)という対位的な読みを通して、植民者と〈被〉植民者との二項対立の存在を暗示している。このような二項対立的図式の脱構築についてサイードが詳述していないのは残念だが、帝国の中心から対蹠地へ遠ざけられた他者としてのマグウィッチが命を賭けて帰国しようとした動機について次のような解釈をすれば、それは紛れもない脱構築的批評となるだろう。流刑囚であるはずのマグウィッチは自分自身を植民者だと思い込んでいる——そうした視点によって中心と周縁という図式は脆くも瓦解する。彼の帰国の真の動機は、恩義を受けたピップに会うためではなく、ある目的で自分が作った紳士を見て満足するためである。ロンドンで紳士を作るとは帝国の中心から認知されるだけでなく、植民地での成功では獲得できない中心的な体制における自己を確立することを同時に意味する。しかし、周縁の他者から中心の自己へというマグウィッチの野心は、ピップの野心と同じように他者としての自分を再確認する皮肉な結果にしかならないのである。

ジェンダーとセクシュアリティの批評では、キャロル・シーゲルの「ポストモダン女性小説家によるヴィクトリア朝男性マゾヒズムの批評」が示唆に富む。家父長制社会が理想とする〈家庭の天使〉は、『大いなる遺産』の主要人物ではビディーだけしかおらず、残りの女性はほとんど伝統的な女性性と母性を喪失している。ディケンズがガーサリー夫妻の間でジェンダーの役割を逆転させたのは、それが暴力と無秩序を生むことを暗示するためである。その証拠に、規範から逸脱した女性たちは、最後はより大きな暴力に——ジョー夫人はオーリックに、モリーはジャガーズに、エステラはドラムルに——支配されてしまう。しかし、そうしたジェンダーの逆転の犠牲者であるピップが、結婚とはぶつかぶたれるかだという考えを成長の過程で内面化していることに着目したシーゲルは、この主人

公をマゾヒストと見なし、彼は姉の打擲^{ちようちやく}を内面化した結果として、女性の愛を暴力や苦痛と同一視するようになる」と述べている。ビディーは「私に苦痛を与えたら、それを悲しく思うだけで、決して喜んだりしない」(17) 女性だと分かっているが、ピップが心の冷たいエステラの方を選ぶ理由は、理性より被虐性愛の方が強いからに他ならない。

このように批評理論を援用して、テキストが権威づけようとする解釈に抵抗する読みを提示した他の代表的な論文としては、次のようなものがある。(精神的批評) Steven Connor, "The Structures of Looking," *Charles Dickens* (Oxford: Basil Blackwell, 1985) 126-37.

(フェミニズム批評) Linda Raphael, "A Re-Vision of Miss Havisham: Her Expectations and Our Responses," *Studies in the Novel* 21 (1989): 400-12; Susan Walsh, "Bodies of Capital: *Great Expectations* and the Climateric Economy," *Victorian Studies* 37.1 (1993): 73-98. (ジェンダー・セクシュアリティ) Carolyn Brown, "'Great Expectations': Masculinity and Modernity," *English and Cultural Studies*, ed. Michael Green (London: Murray, 1987): 60-74; Curt Hartog, "The Rape of Miss Havisham," *Studies in the Novel* 14 (1982): 248-65. (カルチュラル・スタディーズ) Jeremy Tambling, "Prison-bound: Dickens and Foucault," *Essays in Criticism* 37 (1986): 11-30; Pam Morris, "*Great Expectations*: A Bought Self," *Dickens's Class Consciousness: A Marginal View* (New York: St. Martin's, 1991) 103-19. (ニュー・ヒストリシズム) William J. Palmer, "Dickens and George Barnwell." *Dickens and New Historicism* (New York: Palgrave Macmillan, 1997) 101-48.

4. 作品へのアプローチ

作品の統一性とイメージ

『大いなる遺産』では、作品構成に統一感を持たせるために、古代哲学で万物の根源をなす要素と考えられた4つの元素^{エレメンツ}、特に〈火〉と〈水〉がイメージとして効果的に使用されている。ジョーが火かき棒を持って担当する暖炉の火は、古代ケルトの火の女神を語源とする名を持つビディー (Bidly < Bridget < Bridhid) が〈家庭の天使〉と結び付くように、暖かい家庭の団欒 (hearth and home) を連想させる。反対に、全男性に復讐するためにエステラを養女にしたミス・ハヴィシヤムの——身を焼き尽くすような激情の象徴と言える——サティス・ハウスの暖炉の火は、花嫁衣装に燃え移って彼女を死に至らしめることを考えると、破壊と懲罰の意味を持つ。そして、燃え移った火を消す時にピップが負った大火傷 (49) と石灰窯小屋で仇敵のオーリックから受ける火の試練 (53) が、この主人公の精神的成長に必要な贖罪としての通過儀礼^{イニシエーション}となっている。

火と同じように水に関しても、ノアの洪水を思い起こすまでもなく、ディケンズは相反する伝統的なイメージ——すべてを飲み込む破壊のイメージと精神的再生や新生といった創造のイメージ——を利用している。例えば、脱獄囚マグウィッチの運命は、『互いの友』で人間の生死や社会の清濁を併せ飲む巨大な力の象徴となる〈川〉と常に関連づけられ、その水のイメージは彼がピップの前に姿を現わして逮捕後に流刑となる作品序盤、そしてピップと一緒に国外へ逃げる際に再逮捕されて死刑に処せられる作品終盤を支配している。

この破壊的な川の水はマグウィッチに致命傷を負わせ、彼の宿敵で同情 (compassion) を連想させる皮肉な名前のコンピソンを溺死させるが、同時にマグウィッチの罪を洗い清め、悔い改めたピップを浄化して精神的に再生させる役割も果たしている。

作品構成と最も有機的に連関しているのは〈手〉のイメージである。『大いなる遺産』には階級意識によって惹起される社会的な問題と金銭が精神に影響を及ぼす個人的な問題がある。その両方の問題においてピップに多大な影響を及ぼすのがエステラである。エステラは、その名前の語源 (ラテン語で「星」の意) が示すように、ピップにとっては到達しがたい理想を体現している。ピップのエステラに対する狂恋は、執筆当時ディケンズが愛人としていた若い女優エレン・ターナン (Ellen Lawless Ternan, 1839-1914. 頭文字がエステラの名前に含まれている点に注意!) に対する邪恋の客観的相関物と見なす伝記作家が多いが、マイケル・スレイターは挫折した愛という点で若いディケンズが失恋の憂き目にあった初恋の相手マライア・ビードネル (Maria Beadnell, 1810-86) とエステラの関係の方を重視している (Slater 74)。

エステラから労働で黒ずんだ手を軽蔑されたピップは階級意識に目覚め、労働者階級はすべてが「下品で粗野」 (“coarse and common,” 14) だという脅迫観念に囚われる。ディケンズはジョーの「黒ずんだ手」 (35) とエステラの「白い手」 (29) を使い、それを社会階級の指標としているが、重要な点はピップが脱獄囚との関係を「気がとがめるほど下品で粗野なこと」 (“the guilty coarse and common thing,” 10) と感じ始めることである。これによって、ピップが次第に労働者の汚れた手と犯罪者の汚れた手を混同し、



エステラと同じ中産階級の立場から両者を一緒に軽蔑していることが分かる。このような社会問題は、ピップが自分の意識に受け入れがたい階級的な劣等感をジョーに投影して処理しようとする、俗物根性という個人的な問題を生み出すことになる。

ディケンズはまた、相手に触れるという同じ手のイメージに相反する意味を付与し、個人の道徳的な善悪を暗示させている。サティス・ハウスを訪問した時、ピップはミス・ハヴィンシャムから肩に手を置かれ、部屋の中をぐるぐる廻れという命令 (11) を受けるが、エステラにも肩を貸して小姓のように荒廃した庭をぐるぐる歩き回ること (29) を余儀なくされる。これらの手のイメージは階級意識に根ざした支配欲を表わしているが、そうした意識に目覚めて苦悩するピップの肩に置かれたビディーの「労働で荒れているが慰めを与える手」 (17) や、徒弟の損失を金で補償しようとした弁護士ジャガーズに対して、激怒したジョーがピップの腕に置く「愛情で震える手」 (18) は、ディケンズが得意とする視覚記号に翻訳された身振り言語 (kinesics) として、ピップに対する教育的な意味を雄弁に語

りかけている。

マグウィッチが帰国して大いなる遺産の恩恵者が判明した時、ピップは自分の肩に置かれた昔の脱獄囚の手が「血で汚れている」(39) と思って身震いする。しかし、その懲罰としてミス・ハヴィシャムの炎上で両腕に火傷を負った (49) あとは — 特にマグウィッチと一緒に乗ったボートが転覆してテムズ河の水で象徴的に罪を浄化された (54) あとは、彼の手を拒むことなく、衆目が集まる法廷でその手を自発的に握ること (56) によって、自分と犯罪者が同じ人間であること (作品冒頭のマグウィッチとコンピソンの逮捕場面でジョーがピップに教えたこと) を公然と示している。俗物性から人間性への、道徳的墮落から再生への変化は、このように手のイメージだけでも裏づけることができる。

逆様の世界と自己欺瞞

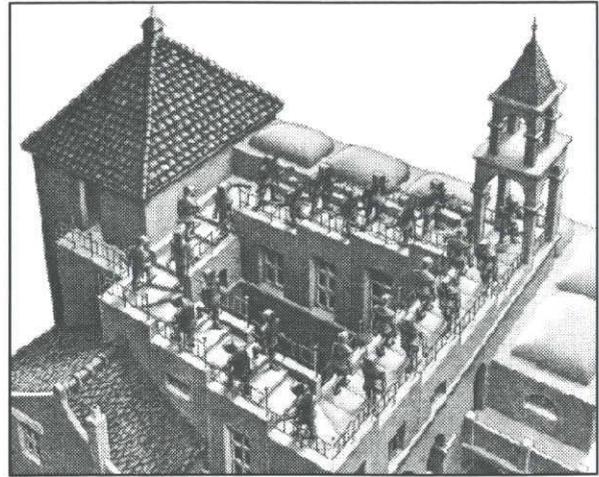
G. R. スターンジは、マグウィッチがピップを逆さ吊りして教会の尖塔をひっくり返して見せた冒頭場面に着眼し、読者もピップにならって教会に象徴される既存の価値体系を逆に見る必要がある (Stange 10) と主張した。ここで忘れてならないのは、伝統的な家父長制社会の中で力関係が逆転したガージャリー夫妻の家で厄介になっているピップには、物事を逆様に見る傾向がもともと育まれていたことである。この逆様の世界は『誰の責任でもない』(*Nobody's Fault*) という原題を持つ『リトル・ドリット』のライトモチーフとなっている。社会の諸問題は〈事大主義〉によって社会を支えている「万人の責任である」 — これが原題の含意であることは瞭然として明らかである。

逆様の世界はアイロニーを主たる目的とする。『大いなる遺産』(*Great Expectations*) というタイトルは、正確には大いなる遺産相続の「見込み」の意味であり、それは将来いつか財産を所有することに対する単なる「期待」にすぎない。期待という言葉には失望に帰着するピップの誤解に対する作者の痛烈なアイロニーが読み取れる。将来どうなるか分からないピップは、強迫観念 — 遺産相続の見込みによって自分のアイデンティティの基盤を築けるようになった紳士階級から、昔の労働者階級へ逆戻りするかもしれない不安 — に絶えず悩まされている。この不安を抑圧すべく、彼は恩人が自分とエステラを結婚させようとしているミス・ハヴィシャムだという誤解の罪を犯さざるを得ないのだ。その意味において、偽の恩人ミス・ハヴィシャム (*Havisham* < *Have a sham*) は、彼女が恩人であって欲しいと思うピップと、彼に感情移入する読者の注意を意図的にそらすことによって、真の恩人についての両者の誤解を持続させるための戦略的人物だと言える。

ピップという名前もまた皮肉な解釈が可能である。第一に、ピップにはリンゴやブドウなどの「種子」の意味がある。ミス・ハヴィシャムの屋敷へ行く前に、パンプルチュックの店で紙袋に包まれた種子を見たピップは、「こんな監獄のような包みを破って、いつか晴れた日に花開くことを望むだろうか」(8) と思う。この何気ないコンテクストへの投入によって、彼の名前は将来への期待という点で大いなる発展のもととなる小さきものとして聖書の「一粒の芥子種」(Matt. 13: 31-32; Mark 4: 30; Luke 13: 19) を想起させ、強烈なアイロニーを浮かび上がらせる。更に、種子のイメージは『ハード・タイムズ』(1854) の「種まき」「収穫」「蓄え」(*SOWING, REAPING, GARNERING*) という3つの巻題をはじめ、他の作品でも頻繁に言及される因果応報を通して、ピップの誤解の罪に対する罰を読者に

暗示してやまない。

ピップ (Pip < Pirrip) という名前はまた、逆様にして読んでも同じ言葉、つまりパリンδροーム(回文)となっている。レディーのエステラを求める労働者であろうと、逆に幼なじみの労働者ビディーを求める紳士であろうと、そういったピップの期待は結果的に失望に終わるといふ点では等しく無益な誤解にすぎない。その点において、サティス・ハウスで与えられたピップの仕事が、ミス・ハヴィシャムを部屋中ぐるぐる歩かせることだというのは、実に意味深い。ピップが円



弧を描く部屋は、色あせた花嫁衣装に身を包んだ老女を中心に、9時20分前でストップした屋敷中の時計(8)を含め、一切の活動が停止した活人画 (*tableau vivant*) の世界であり、絵になる要素をふんだんに内蔵している。この場面は、幾何学を応用した錯覚を利用し、遠近法や透視法を逆手に取って、ありえない世界を作り出したオランダの版画家エッシャー (M. C. Escher, 1898-1972) が、無窮階段をモチーフにして描いた『上昇と下降』(*Ascending and Descending*, 1960) を連想させる。野心を抱いて紳士階級への階段をいくら昇ったところで結局どこにも到達しないピップの無益な堂々巡りは、彼がサティス・ハウスという錯視の世界で抱いた数々の期待が、すべて誤解を基盤にしていることの皮肉な結果である。

『リトル・ドリット』に登場する退職した銀行家ミーグルズ (Meagles) は、感染力が極めて強い麻疹 (measles) を連想させ、常にディケンズの擲揄の対象として描かれている。それは事大主義によって社会を支えるヴィクトリア朝の人々が例外なく患っている自己欺瞞という病原体の典型的な保有者であるからだ。この小説の主人公クレナム (Arthur Clennam) は、ミーグルズの胸の中にすら「繁文縟礼省という大樹に芽を出すような、顕微鏡なしには見えないほど微小な、芥子種のかげら」(1:16) が宿っているのではないかと考える。この聖書を眼中に置いたイメージとしての^{ピップ}種子は、寄らば大樹の陰に影響されて紳士階級にあこがれる『大いなる遺産』の主人公ピップの中で開花することになる。

ピップの自己欺瞞を的確に要約した一節としては、エステラに会うために帰郷する際、ジョーの家ではなく青猪亭に泊まる口実を作る場面がある。

ジョーの家に行けば迷惑になるだろう。私の帰りを待ってベッドの準備なんかしていないはずだ。ミス・ハヴィシャムの屋敷からは遠くなるし、あの方は厳しいから、気に入らないかも知れない。この世のどんなペテン師だって、私のような自己欺瞞家に比べれば物の数ではない。こんな口実で私は自分をだましたのである。本当に奇妙なことだ。私が誰か他人の偽造した半クラウン銀貨を何も知らずに受け取ったのであれば、それは無理もないことであろう。しかし、自分自身で作った贋金をそれと知っていながら、本物の金だと思ふなんて！ (28)

意識的に誤解せざるを得ない自己の欠点を、ピップが語り手や読者のように客観的に見て反省できない主な原因は、産業革命後に急速に発展した資本主義社会の価値観という色眼鏡をかけられていることにある。成長して社会事情に通暁した語り手が自己欺瞞の説明に用いた「お金」の比喻は、その点を裏づける傍証だ。もとより、お金は時代の価値観を鮮明に反映する鏡であるから、読者はピップの自己欺瞞に時代精神と社会風潮が大きく影響しているのに気づかねばならない。ピップが時代精神と社会風潮を体現した典型的な人物だとするならば、彼の存在意義は家柄のよい者や勢力の強い者に付和雷同する衆愚を自ら代表し、なすべきこと——鍛冶屋の徒弟としての道義的な務め——をしない不作為の罪 (sins of omission) を犯している点にある。そうした事大主義の自覚を阻止する自己欺瞞こそ、ディケンズは近代社会の原罪と考えていたのではないだろうか。

二つの結末

『大いなる遺産』の結末は、初代リットン男爵 (Edward Bulwer-Lytton, 1803-73) がピップを孤独な男として残す結末に反対したので、ディケンズが最初の原案をグラ刷りの段階で修正したものである。原案では修正版の最終章 (第 59 章) の最初の部分——ハーバートの共同経営者として東洋で 11 年ほど働いたのち、帰国してジョーとビディーに再会し、彼女にエステラのことを忘れていないと言った部分——以下がなく、その最後の部分は第 58 章に続いている。そして更に 2 年後、ピップはピカデリーで馬車に乗ったエステラに呼び止められるが、そのまま二人は簡単な挨拶をただけで別れてしまう。これに対して修正版では、帰国したピップがサティス・ハウスの荒廃した庭でエステラと再会する。そこで、ピップは彼女の顔、声、そして手の感触によって、彼女が苦しみを通して昔の彼の心を理解できる心を持つほどに変化したことを確信し、彼女と手を取り合って庭を出て行く。

変更された結末については賛否両論があるが、最初に不平を鳴らしたのは親友フォスターであった。彼は修正された結末を改悪と見なし、「やはり最初に書いた結末の方が物語の自然な進行や趣旨に合っているように思える」(Forster 9: 3) と述べた。そして、ヴィクトリア朝末期のギッシングやチェスタトン以降、20 世紀中葉に権威あるディケンズ伝を著したエドガー・ジョンソン (Johnson 2: 992-93) を経て現在に至るまで、作品の統一性ゆえにディケンズの最高傑作とされる『大いなる遺産』については、その修正された結末を玉に疵と見なす批評家が少なくない。

このように、ディケンズの死後しばらくは、作品全体の雰囲気との整合性から、ピップの悲哀感が漂う最初の結末を支持する傾向が強かった。そして、作品冒頭との照応関係をかんがみ、後日談にすぎないピップとエステラの結末は重要ではなく、むしろ彼が精神的な再生を遂げ、ジョーとビディーの子供 (ピップ) に対して、自分に対するマグウィッチ以上によい代父になる結末の方を重視する意見 (Meisel 327) をはじめ、これまで作品の結末については様々な解釈がなされてきた。しかしながら、次第に修正された結末の方が高く評価されるようになっていく。特に最近では、ピップとエステラが別れるのか結ばれるのか判然としない曖昧性、あるいはそのアンビヴァレンスのために、修正版を支持する批評家の方が圧倒的に多い。

結局、この問題の解釈の分岐点はエステラの道徳的变化を許容できるか否かにあるように思える。1937年の Limited Editions Club 版を編集した時に、作品の結末に原案を復活させて論争の火に油を注いだバーナード・ショーは、最初の結末を全面的に支持したわけではなく、エステラの変化についてのピップの確信が蛇足だと言い、修正版については心理的によくないが、芸術的には原案より調和していると主張した。しかし、特にニュー・クリティシズムの観点から捉えた場合、修正版は芸術的な点のみならず心理的な点においても調和しているように思えてならない。ピップとエステラが会う場所については、二人が最後にサティス・ハウスで別れたことを考えると、その後の再会場所も喧噪のピカデリーよりは、夕方の冷たい銀色の薄霧に包まれたサティス・ハウスの荒廃した庭の方がふさわしい。なぜならば、庭も薄霧も作中で有機的に反復使用されているイメージであるからだ。また、ピップが彼女の変化を感じ取った〈手〉は、沈黙の言語として作品を通して最も頻繁に使用されるイメージである。これは一般的な読者の好みを考えて修正されたハッピー・エンディングのように見えるが、それだけの理由でディケンズがリットン男爵の忠告に従ったとは考えられない。つまり、修正に応じたのは文学市場への配慮も確かにあったかも知れないが、それ以上に修正版が作品全体の構成美と抑制されたトーンに原案よりも調和すると思ったからに違いない。

ただし、修正された結末については、そこにピップとエステラの別離を読み取る批評家と結婚を読み取る批評家に分かれている。1868年の Charles Dickens Edition 以降に定着した最後の一文 (“I saw no shadow of another parting form her.”) に関しては、1861年の版 (“I saw the shadow of no parting from her.”) のようにピップはエステラと別れるつもりがないと解釈できる一方で、「ピップとエステラは二度と会わないので、また別れるようなことはない」(Dunn 41) と解釈し、その曖昧性にディケンズの意図を見出すこともできる。最後の一文は何でも予示し得ると言ったのはミルトン・ミルホーザーで、彼はそのように曖昧な状況で語り手が自分の知っている現在の事実 (エステラと別れたのか結ばれたのか) を語らないのは何故かという疑問を呈している (Millhauser 274)。

「新たな別れ」に先行するピップとエステラの別れの場所は、第44章で彼が彼女からドラムルと結婚するつもりだと聞かされ、断腸の思いで彼女と別れたサティス・ハウスであった。しかも、修正された結末でピップは、その最後の別れの思い出がいつも「悲しくて苦しい」 (“mournful and painful”) ものだったと彼女に告白している。修正版でエステラがピップの心を理解できるようになって彼の赦しを求めたこと、そして彼女の最後の言葉が「別れても友達の間でいましょう」 (“[We] will continue friends apart”) であることを考えるならば、「新たな別れ」とは物理的なものではなく、「新たな (悲しくて苦しい) 別れ」という精神的なものだと解釈するのが最も妥当ではあるまいか。



しかし、最後に二人が手を取り合ってサティス・ハウスの廃墟を出て行く場面は、結婚したクレナム夫妻が教会から騒々しい町の中へと下りて行く『リトル・ドリット』の結末を想起させる。その結末に漂う「日向と日陰」(“sunshine and shade,” 2: 34) の混在したイメージがクレナム夫妻の完全な幸福を約束しないように、夕方の「薄霧」と月の「静かな光」という明暗が交錯した『大いなる遺産』の修正された結末も、ピップとエステラの幸せな結婚を約束するものではない。それは読者の様々な解釈を許容する開かれた結末である。特定の解釈に最終的な権威を与えることを疑問視した K. J. フィールディングは、『大いなる遺産』の長所の一つとして解釈の多様性を内包する点を挙げた (Fielding 86) が、修正された結末の曖昧性についても同じことが言えるだろう。

引用文献

- Baumgarten, Murray. “Calligraphy and Code: Writing in *Great Expectations*.” *Dickens Studies Annual* 11 (1983): 61-72.
- Brooks, Peter. “Repetition, Repression, and Return: *Great Expectations*.” *New Literary History* 11 (1980): 503-26.
- Collins, Philip. “A Tale of Two Novels: *A Tale of Two Cities* and *Great Expectations* in Dickens’s Career.” *DSA* 2 (1972): 336-51.
- Dunn, Albert A. “The Altered Endings of *Great Expectations*: A Note on Bibliography and First-Person Narration.” *Dickens Studies Newsletter* 9 (June 1978): 40-42.
- Gilmour, Robin. *The Idea of the Gentleman in the Victorian Novel*. London: Allen, 1981.
- Gissing, George. *Charles Dickens: A Critical Study*. London: Gresham, 1903.
- Fielding, K. J. “The Critical Autonomy of ‘*Great Expectations*.’” *Review of English Literature* 2 (1961): 75-88.
- Hara, Eiichi. “Stories Present and Absent in *Great Expectations*.” *ELH* 53 (1986): 593-614.
- Johnson, Edgar. “The Tempest and the Ruined Garden.” *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*. New York: Simon and Schuster, 1952.2: 972-94.
- Jordan, John O. “The Medium of *Great Expectations*.” *Dickens Studies Annual* 11 (1983): 73-88.
- Leavis, Q. D. “How We Must Read ‘*Great Expectations*.’” *Dickens the Novelist*. Ed. F. R. Leavis and Q. D. Leavis. London: Chatto, 1970.
- Lindsay, Jack. *Charles Dickens: A Biographical and Critical Study*. London: Dakers, 1950.
- Meisel, Martin. “The Ending of *Great Expectations*.” *Essays in Criticism* 15 (1965): 326-31.
- Millhauser, Milton. “*Great Expectations*: The Three Endings.” *DSA* 2 (1980): 267-77.
- Miller, J. Hillis. *Charles Dickens: The World of His Novels*. Cambridge, Harvard UP, 1958.
- Moynahan, Julian. “The Hero’s Guilt: The Case of *Great Expectations*.” *Essays in Criticism* 10 (1960): 60-79.
- Paroissien, David, *The Companion to Great Expectations*. Westport, CT: Greenwood, 2000.
- Said, Edward W. *The World, the Text, and the Critic*. Cambridge: Harvard UP, 1983.
- . *Culture and Imperialism*. New York: Knopf, 1993.
- Shaw, G. Bernard. “Preface.” The Limited Editions Club ed. Edinburgh: R. & R. Clark, 1937. v-xxii.

- Siegel, Carol. "Postmodern Women Novelists Review Victorian Male Masochism." *Genders* 11 (1991): 1-16.
- Slater, Michael. *Dickens and Women*. London: Dent, 1983.
- Stange, G. Robert. "Expectations Well Lost: Dickens' Fable for His Time." *College English* 16 (1954): 9-17.
- Taylor, Anne Robinson. *Male Novelists and Their Female Voices: Literary Masquerades*. Troy, NY: Whitson, 1981.
- Tracy, Robert. "Reading Dickens' Writing." *Dickens Studies Annual* 11 (1983): 37-59.
- Welsh, Alexander. *The City of Dickens*. Oxford, UK: Clarendon, 1971.

第3部

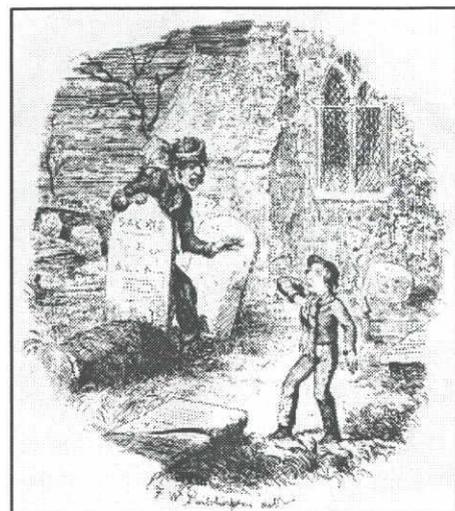
狂気と罪悪感の投影物としての幽霊

Madness and Ghosts: The Presentation of Childhood in *The Turn of the Screw* and *Great Expectations*

Mitsuharu MATSUOKA

Following the tradition of the Christmas ghost story turned into true art by Dickens in the early Victorian era, Henry James's short novel *The Turn of the Screw* (1898) starts with friends sharing their separate stories round the fire after dinner. An unnamed narrator listens to a man named Douglas, after describing his childhood relationship with a nameless young governess, reading her narrative in answer to another spooky tale about a ghostly visitation on a child. In the previous story, Douglas cites the little boy's *immature* age as the reason for its subtle peculiarity: "I quite agree - in regard to Griffin's ghost, or whatever it was - that its appearing first to the little boy, at so tender an age, adds a particular touch." (1) And Douglas promises another chilling account in the same vein. The governess is employed by a gentleman to take charge of the two orphan children, Miles and Flora. The idea of these vulnerable young children being visited by ghosts or, in this case, supposedly possessed by the dead, is indeed particularly horrific. In *The Turn of the Screw*, their apparent failure to behave like *ordinary* children is a source of immense disturbance both to the governess and the reader, and a discussion about the presentation of childhood is certainly appropriate in this context.

There is a certain amount of emphasis on the theme of childhood in *Great Expectations* (1860-61). The account of Pip's childhood is significant because an occurrence in his youth transpires to have an important bearing on his later life. He first meets Magwitch, the escaped convict that turns out to be his real benefactor, in the village churchyard at the age of seven, and it is to such a *tender* age that he wishes he could return after his great expectations come to nothing: "O, that he had never come! That he had left me at the forge - far from contented, yet, by comparison happy!" (306) *Great Expectations* begins with Pip as a child of tender age, caught up in his own day-to-day traumas, searching for his own identity by contemplating the tombstones of his parents and their other children in the churchyard near the marshes not far from his village. He is suddenly seized and filled with terror by the convict wearing a leg-iron. The convict's threat generates a great deal of



fear in the vulnerable and imaginative boy, who is so much enthralled as to turn back and see him limping away like a ghost:

As I saw him go, picking his way among the nettles, and among the brambles that bound the green mounds, he looked in my young eyes as if he were eluding the hands of the dead people, stretching up cautiously out of their graves, to get a twist upon his ankle and pull him in. (4)

The defencelessness and vulnerability of the tender boy is made the most of here. The ghostly figure of Magwitch is the living embodiment of Pip's childhood fears. Dickens's portrayal of the convict includes many *ghost* associations, thereby suggesting that the boy should keep haunted or possessed by the ghost.

However, Magwitch is not the only ghost that haunts Pip. He meets another convict in returning with the food to Magwitch on the marshes. The other convict proves to be Compeyson, the gentlemanly rogue that led Magwitch into crime and abandoned Miss Havisham on the morning of their wedding day. After the comic Christmas pantomime, Mr. Wopsle tells Pip that he remembers catching sight of Compeyson in the theater - the second convict they had seen grappling with Magwitch on the marshes once: "I had a ridiculous fancy that he must be with you, Mr. Pip, till I saw that you were quite unconscious of him, sitting behind you there, like a ghost." (364) In ghostly terms Compeyson can be safely said to show himself as Pip's other self. Pip's original childhood innocence is stripped of him when he begins to desire material wealth and influence, and then great expectations enable him, like the evil-hearted Compeyson, to pass as a gentleman in Victorian London. The terror with which Pip saw Magwitch limping away is of the same kind as "the special and peculiar terror [he] felt at Compeyson's having been behind [him] 'like a ghost.'" (365) Compeyson as well embodies the traditional concept of a gentleman; the 'gentleman' concept is as void of substance as a ghost.

Mr. Wopsle is frustrated by his job as a parish clerk in the village and throws it up for the stage at a minor London theater, just as Pip leaves for the capital as a sham gentleman with great expectations. Nonetheless, the ham actor receives nothing but boos and jeers from the unreceptive audience while playing Hamlet. It is worthy of note that these boos and jeers echo a whoop of joy the curious onlookers give when Trabb's boy makes such a fool of Pip dressed up as a gentleman before going up to London. After seeing Mr. Wopsle play Hamlet, Pip goes to bed miserable and dreams that his great expectations have all fallen to pieces. Mr. Wopsle and Pip are pretty much cut out of the same cloth in going after their dreams. They are quite unable to see themselves as they really are. The blacksmith's boy is ambitious to be a gentleman and the parish clerk to be an actor, but their respective ambitions are too absurd and insane.

Mr. Wopsle's Hamlet suggests that Pip is a ghost-haunted man like Hamlet, who is told by his

father's ghost to take revenge through the death of his brother Claudius. Pip's life is all ruled by the gentleman concept he has in common with his real benefactor Magwitch. The convict is to Pip what is called a revenge ghost, because he used the boy to revenge himself on the other convict, Compeyson as a sham gentleman deferred to for being, and doing, nothing. Likewise, Miss Havisham, who tried in vain to *have the sham* gentleman for a husband, has brought up her protégée Estella to "wreak revenge on all the male sex" (166) including her old lover Compeyson.

Like the ghost of Hamlet's father, Miss Havisham is a ghostly type. Pip portrays her as sitting "corpse-like" (55) when playing cards with Estella. Pip is asked to go and play at Satis House, but he is as much of a tool of Miss Havisham's revenge as Estella. After seeing Mr. Wopsle's Hamlet, Pip imagines himself to "play Hamlet to Miss Havisham's Ghost, before twenty thousand people, without knowing twenty words of it" (244). Bringing together Pip and Estella is just the beginning of her revenge. Pip falls into blind love with Estella, but his love is characterized by a madness because he takes in Miss Havisham's self-righteous definition of real love as "blind devotion, unquestioning self-humiliation, utter submission, trust and belief against yourself and against the whole world, giving up your whole heart and soul to the smiter." (227) Miss Havisham's revenge on Pip is not misplaced but justified in a roundabout way. Great prospects of inheritance change Pip into a pompous pseudo-gentleman, "not a true gentleman at heart." Pip and Compeyson are birds of a feather and deserve Miss Havisham's revenge equally.

Miss Havisham is a withered, white-haired old woman who sits in yellow bridal finery in a room darkened against the daylight outside. Her way of life results from an acutely heightened sense of inability to inflict hands-on revenge on Compeyson. It is a mere hatred and self-revenge in which she desires to hurt herself. Such unachieved revengeful desire becomes warped and corrupted, based on phantasm. This is perhaps why she seems to have used Pip as well as Estella to play out her sick fantasy of revenge.

Pip, too, is subject to phantasmal visions. We find that the phantasmal, chilling atmosphere of a ghost story that surrounds Miss Havisham at Satis House as well as Magwitch on the marshes. Innocence and vulnerability, it appears, enable Pip to see the supposed ghosts of imagination. However, we find Pip's fantasies are the results of his unconscious desires. After Estella tells him she has no heart, they walk into the brewery, where he sees the vague suggestion of the ghost of Miss Havisham:

But ever afterwards, I remembered – and soon afterwards with stronger reason – that while Estella looked at me merely with incredulous wonder, the spectral figure of Miss Havisham, her hand still covering her heart, seemed all resolved into a ghastly stare of pity of remorse. (360)

Miss Havisham's ghost is the bizarre figure of the hanging woman that appears a number of times in

the novel. After Pip met Miss Havisham at Satis House for the first time, he was fed *like a dog* by Estella outside in the ruined gardens.

It was in this place, and at this moment, that a strange thing happened to my fancy. I thought it a strange thing then, and I thought it a stranger thing long afterwards. I turned my eyes - a little dimmed by looking at the frosty light - towards a great wooden beam in a low nook of the building near me on my right hand, and I saw a figure hanging there by the neck. A figure all in yellow white, with but one shoe to the feet, and it hung so, that I could see that the faded trimmings of the dress were like earthy paper, and that the face was Miss Havisham's, with a movement going over the whole countenance as if she were trying to call to me. (59)

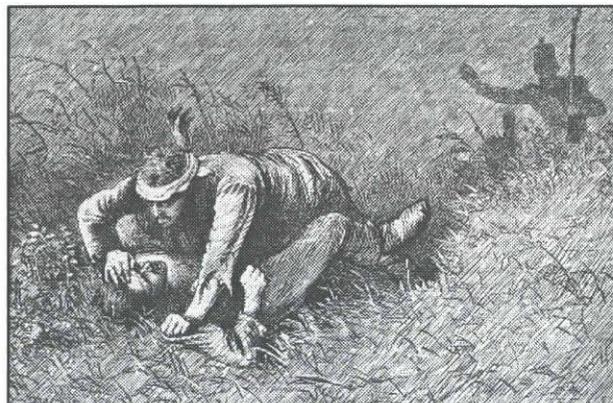
Here we are forcibly reminded of “a decided similarity between the dog's way of eating, and the man's” (16) which Pip noticed when Magwitch bolted down the food he had given on the marshes. Considering the dog imagery, Pip's visionary glimpse of Miss Havisham hanging from the beam is nothing but a representation of his subconscious desire for revenge in hallucination.

Pip has this vision again, when Miss Havisham asks for forgiveness much later in the novel. He replies he can forgive her now, but it is difficult to believe, not least when we think of these repeated visual hallucinations:

Taking the brewery on my way back, I raised the rusty latch of a little door at the garden end of it, and walked through. [. . .] A childish association revived with wonderful force in the moment of the slight action, and I fancied that I saw Miss Havisham hanging to the beam. So strong was the impression that I stood under the beam shuddering from head to foot before I knew it was a fancy - though to be sure I was there in an instant. (380)

This hallucination determines Pip to return to see her once again before leaving, only to see her flowing garments enveloped in fire. He tries to smother the fire, while they are on the ground “struggling like desperate enemies.” (380)

This scene reminds us of the “struggle” (32) of the two escaped convicts, Magwitch and Compeyson, swearing viciously at each other on the marshes. Magwitch is to Compeyson what Pip is to Miss Havisham. A symbolical interpretation of Pip's struggle with Miss Havisham would be that he is taking revenge on the enemy. In fact,



however, these hallucinations come from his fear of revenge. To put it another way, the revenge hallucinations are caused by fear, guilty consciousness, or other negative emotions. The “guilty knowledge” of going to rob Mrs. Joe for the sake of the convict almost drives Pip mad and makes him “imagine [himself] drifting down the river on a strong spring-tide, to the Hulks; a ghostly pirate calling out to [him] through a speaking-trumpet.” (10) Pip’s robbery is a substitute for revenging himself on his elder sister Mrs. Joe, a relentless termagant who has brought him up by hand, but his imaginative experience with the ghost can be interpreted as an indication of his fear and guilt eroding childhood innocence.

In *The Turn of the Screw*, when the governess first meets Flora, she is enchanted by the young girl: “She was the most beautiful child I had ever seen [. . .].” (7) The girl is likened to “one of Raphael’s holy infants,” and so are her “sweet serenity” and “placid heavenly eyes.” (8) Miles, too, has “the same positive fragrance of purity” (13) as his sister, and the governess is struck by their childhood innocence at this stage:

What I then and there took him to my heart for was something divine that I have never found to the same degree in any child - his indescribable little air of knowing nothing in the world but love. (13)

Indeed, in this part of the novel, the children’s allegedly innocent behavior seems at least relatively *normal*. Despite their unsettling tranquility, they do display some childlike qualities. For example, Flora proudly shows the governess around the house with “droll delightful childish talk.” (9) The idea of childhood innocence has the power to attract the governess. Her special obligations and responsibilities increase stress and frustration in the real world, while the children must be spared all of these. The children ought to be kept away from the temptations and perils of experience. In protecting them from any experience of depravity in their everyday lives, the governess becomes that child in a sense and enjoys imagining its safety and comfort vicariously.

Later in the novel, when the governess desperately encourages Miles to disclose his secret, she accuses him:

Until you came out, that way, this morning, you had since the first hour I saw you scarce even made a reference to anything in your previous life. You seemed so perfectly to accept the present. (63)

Yet this tendency to enjoy the present moment rather than reflecting upon the past is surely natural in a young child. At times like this perhaps the reader questions the governess’s judgment. The unreliability of the governess as narrator will be discussed later.

Pip as a youngster, though well-behaved, finds himself in awkward situations, and he always seems in fear of being found out. For example, he “fully expected to find a Constable in the kitchen,

waiting to take [him] up” (19) on Christmas day after committing robbery for Magwitch. When all he wants is to be left alone, Pip feels under constant attack from adults, such as his sister Mrs. Joe Gargery, Joe’s uncle Mr. Pumblechook, and her neighbors Mr. and Mrs. Hubble:

‘Especially,’ said Mr. Pumblechook, ‘be grateful, boy, to them which brought you up by hand.’

Mrs. Hubble shook her head, and contemplating me with a mournful presentiment that I should come to no good, asked, ‘Why is it that the young are never grateful?’ This moral mystery seemed too much for the company until Mr. Hubble tersely solved it by saying, ‘Naterally wicious.’ Everybody then murmured ‘True!’ and looked at me in a particularly unpleasant and personal manner. (22-23)

Next to his terror, childish unease, and guilty conscience, though, is Pip’s certainty that he is loved and protected from his sister’s tyranny by Joe. There is a touching exchange between the two, when Pip returns from his first run-in with Magwitch, in the danger of suffering from Mrs. Joe’s abuse and constant complaints:

At this point, Joe greatly augmented my curiosity by taking the utmost pains to open his mouth very wide, and to put it into the form of a word that looked to me like ‘sulks.’ Therefore, I naturally pointed to Mrs. Joe, and put my mouth into the form of saying ‘her?’ (11)

It is clear that they are committed allies at this point in the novel. Pip, then, seems more of a lively, winning child than either of the youngsters in *The Turn of the Screw*, and this could be probably attributed to his consistent relationship with a doting father figure like Joe. Meanwhile, Flora and Miles have no such present, permanent guardian and have perhaps understandably learnt to rely only upon themselves and each other.

It is certainly true that as the novel develops we find some of Flora’s and Miles’s behavior decidedly disturbing. Their relationship with each other seems *extraordinary*: “they never either quarreled or complained.” (39) They seem to have “traces of little understandings between them by which one of them should keep me occupied while the other slipped away.” (39) Also, they walk around the garden together in a most bizarre way:

They moved slowly, in unison, below us, over the lawn, the boy, as they went, reading aloud from a storybook and passing his arm round his sister to keep her quite in touch. (46)

They seem very restrained and composed for young children, but it is possible that in this context their disturbing behavior has a sexual implication.

In *The Turn of the Screw*, the governess is conscious of Miles's and Flora's secrecy. She is convinced that they have conspired together to conceal what is going on between themselves and the ghosts of Peter Quint and Miss Jessel. The governess is afraid of the children's understanding what the relationship between Quint and Jessel is, but the nature of that relationship is never explicitly defined. This indefinability, reflecting the author's strategies of silence, could be interpreted as an ironic or even satiric portrayal of Victorian or Puritan reticence in matters of sex. The most probable interpretation is that the ghosts might deprave the children with adult sexuality. For this reason, perhaps, the governess tries to place herself between the children and the ghosts:

I was a screen - I was to stand before them. The more I saw, the less they would. I began to watch them in a stifled suspense, a disguised excitement that might well, had it continued too long, have turned to something like madness. What saved me, as I now see, was that it turned to something else altogether. (28)

Is the governess actually experiencing the ghosts or merely having hallucinations out of her mind? The most notable fact is that no one else claims to have seen the ghosts. The author suggests a hallucinatory madness affecting the governess at the levels of her senses and keeping her out of the real world.

Another interpretation of her madness would be that her hallucinations are signals of her sexual frustration. The governess is infatuated with the man for whom she agrees to educate and train the children even though she has never met him. This state is not real love but an imaginary infatuation with the master, which leads to her imaginary meetings with the ghosts. We must not overlook the fact that her initial vision of Peter Quint occurs immediately after she invents a fantasy about her involvement with the master in the garden. If she projects the master onto Quint, Miss Jessel will be her double raised up from the grave. The governess is both the most naïve and the most curious character about sex. She is at once appalled and enthralled by the adult sexuality of Quint and Jessel. There is a profound ambivalence in the feelings of the governess toward sex. The sexual ambivalence, driving her insane, seems to represent her projection of her own fears and desires about sex onto Miles and Flora.



The Turn of the Screw is not merely a traditional ghost story but a story about madness. The ghosts are disembodied hallucinations, but the hallucinations seem almost substantively alive to the

governess whose mind is twisted by the reality of her situation. Although she first adores Miles and then suspects his words and actions, the governess kills him in the end in a fit of insanity brought on by her sexual ambivalence. Miles is the victim of her madness. She considers her first meeting with Quint a “bewilderment of vision” (16). This shows how unreliable the sexual ambivalence makes the sight.

An important point to consider in *The Turn of the Screw* is the governess’s reliability as narrator. Throughout the novel, in fact, there is such a lack of trust between the governess and the reader that it is almost impossible to believe anything she tells. For instance, the novel has no definition of what “depravity” (49) is. The governess dreads that childhood innocence might be depraved, but it is merely a matter of her baseless and wicked conjecture. The presentation of childhood is conveyed to us through the governess, subject to her own suppositions and insecurities, at the family estate that bears the warm and inviting name of Bly. The young and inexperienced governess admits to the housekeeper Mrs. Grose at the beginning of the novel that she is “rather easily carried away,” (9) and later that she has “dreadful boldness of mind.” (36) Certainly, the governess sees the figures of Quint and Miss Jessel; she describes them accurately to Mrs. Grose. Yet perhaps her ideas about the children’s involvement are too far-fetched. As the novel goes on, her language becomes more and more crazed:

As soon as I appeared in the moonlight on the terrace he had come to me as straight as possible; on which I had taken his hand without a word and led him, through the dark spaces, up the staircase where Quint had so hungrily hovered for him, along the lobby where I had listened and trembled, and so to his forsaken room. (46)

Her language signals her growing paranoia. Her fears that the children are communicating with Peter Quint and Miss Jessel surely prove unfounded, when Miles and Flora adamantly assert that they cannot see the governess’s visions. Understandably frightened by her governess’s *imaginings*, Flora says, “I don’t know what you mean. I see nobody. I see nothing. I never *have*. I think you’re cruel. I don’t like you!” (73) The reader wonders whether the whole story is merely an accumulation of the governess’s disturbed imaginings.

Whether she is mad or not, it is perhaps the case that the author intends the reader to view the governess as mad. The Victorian desire to suppress and repress the public visibility of sex made women subject to male sexuality. It is very possible that the Victorian reader thought of the governess in terms of Victorian society’s forbidden sexual fantasies. In other words, female sexuality and desire defined feminine derangement even in the late Victorian era. It is natural that the governess’s speech and behavior should have been viewed as a mad woman’s.

The governess goes all but mad, suspecting that the children are sharing secrets while playing

together:

“[. . .] even while they pretend to be lost in their fairytale they’re steeped in their vision of the dead restored. He’s not reading to her,” I declared; “they’re talking of *them* - they’re talking horrors! I go on, I know, as if I were crazy; and it’s a wonder I’m not. What I’ve seen would have made *you* so; but it has only made me more lucid, made me get hold of still other things.” (48)



Her suspicion that the children’s overt placidity is nothing more than a cover for their unnatural worldliness is a growing fear for the governess, a fear which engulfs her by the end of the story and thwarts her powers of reason. Indeed, Miles and Flora behave in a careful and knowing way which seems peculiarly disturbing for such young children. They seem to outwit the confused governess at every turn. She suspects Miles of having incredible insight and unspoken sensitivity:

There was something new, on the spot, between us, and he was perfectly aware that I recognised it, though to enable me to do so he had no need to look a whit less candid and charming than usual. I could feel in him how he already, from my at first finding nothing to reply, perceived the advantage he had gained. (55)

As well, Miles has extraordinary powers of composure and an ability to lie unflinchingly. The governess could not look as straight as he. Flora at times seems to have an old head on young shoulders, and by the lake the governess tells Mrs. Grose that she is sometimes not a child at all: “She’s not alone, and at such times she’s not a child: she’s an old, old woman.” (69)

Pip, too, is perhaps more worldly and knowing than the adults in the novel might think. To him, his life is far more complex and painful than his sister and Joe can possibly imagine. While Pip is patronized by reminders of his sister’s untiring efforts to bring him up by hand, and is struck and thrown across the room for not arriving home in time, his mind is wrought with terror that the convict he met in the churchyard might really “have [his] heart and liver out,” (3) or that he will be imprisoned for stealing. He is treated as a young child while having to cope with a frighteningly real situation, and this surely makes him grow up all the quicker.

However, his insight into adults’ real life, though greater than Mrs. Joe and her husband imagine, is nothing if compared with the horrors to which the governess suspects Miles and Flora to have been exposed. There are undertones of abuse alluded to only subtly in *The Turn of the Screw*.

The governess says that she was “still haunted with the shadow of something [Mrs. Grose] had not told [her],” (27) and later she is struck with the appalling alarm of Miles’s being perhaps innocent in the whole affair: “It was for the instant confounding and bottomless, for if he *were* innocent what then on earth was I?” (87) The governess is terrified of what she is unwittingly allowing to happen to her charges. It is the pervading ambiguity of the relationship between the children and the ghosts that invites the possibility of some horrible depravity.

In *Great Expectations*, the only parallel is with Joe and his childhood of abuse, which he explains to Pip:

‘I’ll tell you. My father, Pip, he were given to drink, and when he were overtook with drink, he hammered away at my mother most onmerciful. It were a’most the only hammering he did, indeed, ’xcepting at myself. And he hammered at me with a wigour only to be equalled by the wigour with which he didn’t hammer at his anwil. – You’re a-listening and understanding, Pip?’
(42)

Such abuse would have had an untold effect upon Joe’s life. He was aware of its damage to his studies: “[It] were a drawback on my learning” (42). He did forgive his father, Joe tells Pip, describing what he had wanted to be written on his father’s tomb: “And it were my intentions to have had put upon his tombstone that Whatsume’er the failings on his part, Remember reader he were that good in his hart” (42). In both novels, there are hints at how abuse can affect a childhood, stunting normal development and encouraging fear and secrecy.

Another point of comparison will become clear in *The Turn of the Screw* if we consider the governess’s relationship with the children at Bly. She soon becomes rather possessive of Miles and Flora, describing Miles as “*my* boy,” (26) and expressing her intention to shape Flora: “To watch, teach, ‘form’ little Flora would too evidently be the making of a happy and useful life.” (8) These are strong sentiments to use in reference to a tiny charge whom she has just met, and suggest an over-protective nature. Indeed, though we hope to track and influence Flora’s development, she strongly disapproves of others’ controls on the girl, and resents Miss Jessel’s supposed hold. The ghost of the previous governess, she tells Mrs. Grose, had “a kind of fury of intention [. . .] to get hold of her.” (32)

Miss Havisham’s relationship with her protégée in *Great Expectations* can be said to be similar in some ways. This eccentric old lady wants to *form* Estella herself in order revenge herself on the male sex and produce a cold creature who will not be vulnerable to the heartache she herself experienced. She directs Pip’s attention to Estella’s beauty, and encourages him to love her madly in a warped attempt to repay the male sex for her own misfortune. Miss Havisham does not teach Estella to avoid suffering, though, and she has as much heartache in her life as her guardian had.

Estella very earnestly says to Pip at the end of the novel, “[. . .] now, when suffering has been stronger than all other teaching, and has taught me to understand what your heart used to be.” (460)

In this way, both *The Turn of the Screw* and *Great Expectations* give examples of the way in which parents or guardians can influence children by their own behavior. The governess fears that when they were alive Quint and Jessel planted evil in Miles and Flora, and explains to Mrs. Grose why they want to get to the children:

“For the love of all the evil that, in those dreadful days, the pair put into them. And to ply them with that evil still, to keep up the work of demons, is what brings the others back.” (49)

They have come back from beyond the grave to “keep up the work of demons.” Their evil reveals the depth of depravity that resides inside human hearts. It must be noticed here that Miss Havisham adopted young Estella for the purpose of mouldering her into the strong and heartless woman she never was.

In conclusion, because of differences in subject matter and narrative style, the presentation of childhood in the two novels is significantly different. There are, however, points of interesting comparison such as guardians’ effect upon their charges, children’s tendency to grow up faster than the adults assure, and the possibility of violence and depravity to which the youngsters are so vulnerable.

Primary Sources:

Henry James. *The Turn of the Screw*. Ed. Robert Kimbrough. A Norton Critical Edition. New York: Norton, 1966.

Charles Dickens. *Great Expectations* Introd. Frederick Page. The Oxford Illustrated Dickens Edition. 1953; London: Oxford UP, 1975.

メアリ・エリザベス・ブラッドン作

「クライトン館の謎」

松岡光治訳

私が子供時代と青春時代を過ごした地方には、クライトンという非常に名の通った一族が住んでいました。大地主のクライトンについて語ることは、遠く離れたイングランド西部地方の、この権力者について語ることに他なりません。そして、クライトン館はスティーヴン王^(一)の時代からずっと、この一族によって所有されてきました。もともとは大きな修道院の一部だったのですが、当時の珍しい翼棟と中庭を囲む回廊つきの建物が、今なお素晴らしい保存状態で残っています。この屋敷のはずれにある部屋は、確かにどれも天井が低く、少し薄暗く、陰気な感じでした。しかし、めったに使われていないわりに住まいとしては申し分なかったのもので、お屋敷が招待客で一杯になる祝祭の時などは、いつも役に立っていたものです。

お屋敷の中心部分はエリザベス女王^(二)の時代に再建され、今では宮殿のように豪華な建物になっていました。南側の翼棟と(縦に細長い八枚の窓が付け足された)屋根の高い音楽室は、アン女王^(三)の時代に新築されたものです。要するに、お屋敷は実に壮麗な大邸宅で、私たちが住んでいる州では、お国自慢の一つになっていたのです。そして、土地という土地はすべて、クライトン教区の中だけでなく、その境界をはるかに越えた所まで、大地主であるクライトン様の所有になっています。それから、教区教会は屋敷を囲む大庭園の柵内にあり、その聖職禄を授ける権限はクライトン様にありました。それは大した価値もない寺禄ですが、跡継ぎでない息子の長男以外の者に授けるのに重宝なもので、実際に授けられることがしばしばあったのです。あるいは時たまでしたが、裕福なクライトン家の家庭教師や従者に与えられることもありました。

私もこのクライトン一族と血がつながっています。現在の旦那様の遠い親類にあたる私の父は、クライトンで教区牧師を務めておりました。その父の死によって、私は生計の道を完全に断たれてしまったので、荒涼とした未知の世界に乗り出し、従属的な地位で生活費を稼がざるを得なくなりました。こんなことをクライトンの人間がしなくてはならないとは恐ろしいことです。

伝統と偏見に支配された我が一族に対する敬意から、私は彼らから遠く離れた外国で仕事を探さねばならないと思いました。外国であれば、クライトンの人間が一人ぐらい地位を下げたからといって、自分が属している由緒ある家の面目をつぶすようなことはないでしょう。幸いなことに、私はしっかりと教育を受けていましたし、静かな片田舎の牧師館で勉学に精を出していたので、ありふれた現代的な教養を身につけることができました。それで私は利運を得て、ウィーンで上流階級のドイツ人の屋敷に勤め口を見つけたのです。そして、ここに七年間ほど留まり、気前よく支払っていただいたお給金を毎年かなり貯えておりました。生徒さん

たちが大人になると、優しい奥様はサンクトペテルブルグ^(四)のもっと有利な勤め口を見つけてくださいました。そこで更に五年ほど過ごすことになったわけですが、その終わり頃には私の心の中で長年つづけていた願望——もう一度あの懐かしい我が田舎の屋敷を見てみたいという多年の願望——に屈してしまいました。

イングランドにはあまり近い親類はいませんでした。母は父の数年前に亡くなっていましたし、たった一人の兄は遠く離れたインドで公務に就いていました。姉妹はおりません。とはいえ、私はクライトン一族に連なる人間でしたし、出身地の故郷を愛していました。おまけに、私の父母に愛情と敬意を示してくれた友人たちが、私を心から歓迎してくださることは分かっていたのでした。しかし、私が故郷で今度の休暇を楽しもうという気になったのは、時おり旦那様の奥様からいただいていた、真心のこもった手紙によるところが大だったのです。奥様は心の優しい、気高い女性でしたので、私が自活の道を選んだことに十分な理解を示され、いつも私の友だちであることを態度で示してくださっていました。ここ最近のクライトン夫人からの手紙の中で、いつも言われていたのは、そろそろ里帰りしたいと思った時は、どうか自分の屋敷に長期滞在してくださいということでした。

これから私がみなさんに話をする事件のあった年の秋も、奥様は「今度のクリスマスにいらっしゃればよろしいのに」と手紙で書いてこられました。「それはもう賑やかになることでしょうし、私は館でいろんな楽しい人たちにお会いできるのを楽しみにしております。エドワードが来春早々に結婚するので、主人はとても満足していますのよ。だって、これは申し分のない、ぴったりの縁組なのですから。婚約者もお客様としていらっしゃる予定です。それはもう美しいお嬢様で、おそらく美しいというよりはりりしいと言った方がよろしいでしょうね。ジュリア・トレメインとおっしゃるのよ。ヘイズウェルに近いオールド・コートのトレメイン一族の方で、あなたも覚えていらっしゃると思うけど、とても由緒ある家です。兄弟姉妹が何人かいらっしゃるので、お父様からの遺産はほとんど、いやまったく期待できないでしょうが、かなりの財産を伯母様から残していただくということで、こちらの田舎では相当な遺産相続人だと思われています。だからと言って、こんな事実でエドワードが影響を受けたわけじゃありませんよ、もちろん。あの子はいつものように衝動的に巡回裁判^(五)の舞踏会で恋に落ち、二週間もしないうちにプロポーズしてしまったのです。これはどこから見ても完全な恋愛結婚ですわね、ほんとに」

これに続いて心のこもった招待の手紙が来ました。イングランドに着いたら、そのまま館に直行し、好きなだけ長く滞在してもらって構いませんのよ、という内容でした。この手紙で私の心は決まりました。幸せだった子供時代のなつかしい光景を再び見てみたいという願いは、ほとんど居ても立ってもいられないほど強くなっていました。私は将来の見込みを損なうことなく、自由に休暇を取ることができました。それで十二月の初旬、寒々とした陰鬱な天候にもかかわらず、母国に向かって出発したのでした。まずはサンクトペテルブルグからロンドンまでの長旅。これは外交特使のマンソン少佐が親切にも私に付き添ってくださいました。私の当時の雇い主であったフルイドルフ男爵が、お友達であった少佐のそうした御好意を私のために

取り付けてくださったのです。

私の年齢は三十三歳。青春はとうに過ぎ去ってしまい、美貌などは最初から持ち合わせていません。オールドミスを押し通す女として、つまり人生の大舞台で主役を演じたいという願望などで心を乱されたりしない、そんな静かな観客として自分のことを考えることに甘んじておりました。私のような気質の人間にとっては、こうした受動的な生活の方が気楽でした。身を焼きつくすような情熱は血管に流れていなかったのです。私の全人生はごく普通の務めや、数少ない素朴な楽しみで満たされていました。私の生活に特別な魅力と明るい光を与えてくれた人たちは、すでに亡くなっています。彼らを生き返らせることなどできるはずもないし、彼らのいない真の幸せなどあり得ないと思っていました。あらゆるものが落ち着いて中間色を帯びていたのです。私の場合、人生最良の時も波風が立たず、これといった特色もありませんでした。それは平穏ながらも物寂しい初秋の、太陽が見えない、どんよりした日のように思えました。

私が到着したのは晴れて星が見える夜の九時ごろで、古い館は盛観を極めていました。お屋敷の前にある長い石畳のテラスから、半円状に植えてある立派な古いカシの木やブナの木まで、大きく広がっている芝生は霜が少し降りて白くなっていました。また、南の翼棟のはずれにある音楽室から、重々しい枠つきのゴシック調の窓がはめ込まれた北の翼棟の古い部屋まで、まばゆい光の帯が伸びていました。その景色を見て私が思い出したのは、ドイツの伝説に出てくるような、この世のものとは思えない宮殿です。^(六) 私は、光がすべて一瞬のうちに消え、長い石畳のテラスが突然の暗闇に包まれてしまうのではないかと、そんな気がしました。

館の下僕が玄関の広間の扉を開いてくれると、まさしく私の幼児時代とともに記憶に残っていた老執事が、異郷で生活を始めた十二年前から一日たりとも年を取っていないような姿で食堂から出てきて、心のこもった歓迎を私にしてくれました。それどころか、自分の手で旅行用^{かばん}鞆の搬入を手伝うと言ってききませんでした。鞆と一緒に運ぶことは私に対して必要以上に謙遜した行為でしたが、その行為の力強さは従者たちが身をもって感じるほどでした。

「ミス・サラ、あなた様の優しい顔をまた見られるなんて、ほんとに嬉しゅうございます」この館の忠臣はそう言いながら、私が旅行用の外套を脱ぐのに手を貸し、私の手から化粧鞆を受け取りました。「牧師館に住んでおられた十二年前に比べますと、少し老けられたようですが、それでもすこぶる元気な御様子で何よりです。ほんとにまあ、あなた様を御覧になれば、さぞかし皆さん喜ばれることでしょう！ 私はあなた様がいらっしゃることを奥様自身の口から聞かされたのでございますよ。客間の方へ行かれる前に、その婦人帽をお脱ぎになりたいでしょうね。さあどうぞ。お屋敷は招待客で一杯ですよ。おい、ジェイムズ。マジョラム夫人を呼んできてくれないか？」

声をかけられた下僕は裏の方へ姿を消し、まもなくマジョラム夫人と一緒に戻って来ました。この恰幅のよい年配の女性は、執事頭のトゥルフォールドと同じように、今の旦那様の父上の時代から館に長く仕えておりました。私は彼女からも同様に心のこもった挨拶を受けました。それから彼女に案内されて、一体どこへ連れて行かれるのだろうかと思うほど、私は幾つもの

階段や廊下を通り抜けて行きました。

しかしながら、最後に私たちはとても快適な部屋に着きました。それは壁にタペストリーが飾られた四角い部屋で、低い天井は大きなカシ材の梁^{はり}で支えられていました。部屋の様子はそれはもう陽気で明るく、大きな暖炉では赤々と燃える火がゴゴゴと音を立てていました。とはいえ、幾らか古めかしい感じもしましたので、迷信深い人たちであれば、幽霊が出そうだと考えたかもしれません。

私は幸いにも現実主義的な性格で、幽霊のようなものに対しては完全に懐疑的な人間でしたので、この部屋の古めかしい雰囲気がとても気に入りました。

「マジョラム夫人、私たちはスティーヴン王時代の翼棟にいるのですね？」と私は尋ねました。「この部屋は私自身まったくの初体験で、一度も入ったことがないような気がします」

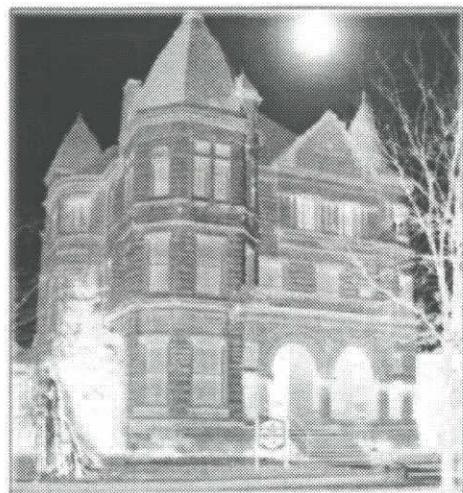
「おそらくそうでしょうね。この翼棟が古いのは確かですわ。あなたの部屋の窓は古い厩舎の中庭に面していて、そこには旦那様のお爺様の時代に犬舎がありました。その頃は館も今よりずっと素晴らしかったという噂を聞いたことがありますよ。今年の冬は、お客様がたくさんいらっしやっていますんで、こちらの部屋もすべて使わなくてはならないんです。ですから、寂しいなんて思われる必要はありませんわ。この部屋の隣にはクラニック船長御夫妻がいらっしやっていますし、反対側の青い部屋にはニューポート家の二人のお嬢様がお泊まりです」

「ねえ、マジョラム夫人、私は自分の部屋がとても気に入りましたよ。スティーヴン王の時代にはすでに存在していた部屋で寝るなんて、考えただけでも楽しくなりますわ。なにしろ館がほんとに修道院だった時代ですからね。敬虔な老いた修道僧が、まじめに膝をついて祈り、この床の板をすり減らしたことでしょうね、おそらく」

マジョラム夫人は半信半疑の目でじっと見ていましたが、それはあまり修道僧の時代なんかには共感を覚えたりしない人のような視線でした。それで、彼女は今ちょうど手のかかることをたくさん抱えていますからと言って、その場を立ち去ろうとしました。まだコーヒーさえ出されていなかったのも、自分がそばにいて万事うまく行くように注意してやらないと、食料貯蔵室の女中は物事をちゃんと処理できないと、マジョラム夫人は思っていたようです。

「お部屋の呼び鈴を鳴らされるだけで結構ですよ。そうすればスーザンが面倒をみてくれますから。スーザンは昔よく、ここのお嬢様たちの世話を手伝ってくれましたんで、ほんとに役立つと思いますわ。あなたがいつでも自由にスーザンを使えるように、奥様は特別に命令を出されたんですよ」

「クライトンの奥様には心から感謝しております。ですが、マジョラム夫人、女中の手助けが必要になることなんて、私には一ヶ月に一回もありませんわ、絶対にね。何でも自分ひとりでやるこ



とに慣れていきますから。ほらほら、マジョラム夫人、お急ぎになって。コーヒーの方に気を配ってくださいな。私の方は十分もすれば客間の方に降りて行きますから。ところで、たくさんお集まりですの、その部屋には？」

「それはもう大勢ですわ。ミス・トレメイン、それからお母様と妹様もいらっしやっております。もちろん、御結婚については全部お聞きおよびでしょうね。きりっとした目鼻立ちのお嬢様で——どちらかと言えば、お高くとまっていたらして、私は好きになれませんが。代々、トレメイン家はプライドの高い一族で、ミス・トレメインは大いなる遺産を相続されることになっているんです。エドワード様はそれはもう彼女のことが大好きで——普通の地面なんか歩かせられないと思っておいでですよ、きっと。でも、なぜかは分かりませんが、別の女性をお選びになればよかったのにと、私は思わずにおれませんの。若旦那様をもっと大切にしてください、あんな風に相手の心づかいを冷たく無雑作にあしらったりされない方であれば、よかったんですがね。でも、こんなことを言う権利は、もちろん私にはありません。ミス・サラ、あなたが相手でなければ、あえて申し上げるようなことはいたしませんわ」

彼女が、居間に行けば食事の準備ができていますよと言って、そそくさと出て行ったので、あとに残った私は身支度に取りかかりました。できるだけ急いで着替えをしている時に私が感心したのは、自分にあてがわれた部屋の申し分ない快適さでした。はるか昔の黒っぽい重厚な家具には、ありとあらゆる現代的な道具が備えられていて、その新旧の調和によって実に心地よい^{おもむき}趣が漂っていました。カシ材の大きな化粧台も、ルビー色のボヘミア・ガラス^(七)でできた香水入れ、陶器製の筆箱、指輪立てなどが置いてあって、とても明るく見えました。暖炉の前には、ぜいたくなチンツ^(八)が張られたヴィクトリア朝様式^(九)の低い安楽椅子があり、その近くには便利なように置かれた、光沢のあるカエデ材の高価そうな小さい書き物机がありました。そして、その後ろにはタペストリーを掛けた壁が薄暗い中でぼんやりと見えてましたが、数百年前もその時と同じような感じだったことでしょう。

しかし、昔のことについて夢にふける暇はありませんでした——そうした夢を引き起こしやすい雰囲気のある部屋ではありましたが。いつものように髪を簡単に結って、きれいな黒のレース（男爵夫人からいただいたもの）で縁を少し飾った濃灰色の絹のドレスを着ました——どんな場合にも通用する慎み深い略式礼装です。装飾品としては、大切な母の形見である大きな金の十字架を、深紅のリボンで結んで首にかけました。これで私の身なりは完璧です。姿見をチラッと見て、だらしく見える所がないことを確認してから、私は急いで廊下を通過して階段を降り、玄関の広間に行きました。そこでは老執事のトゥルフオールドが私を出迎えてくれ、素晴らしい御馳走が待つ居間へと案内してくれました。

朝から何も食べていなかったのですが、この御馳走にはあまり時間をかけませんでした。というのも、早く客間の方に行きたかったからです。しかし、ちょうど食事を終えようとした時に扉が開き、針編みレースの縁飾りがふんだんに施された濃緑色のビロードのドレスを目もあやに着て、クライトン夫人が颯爽と入って来られました。若い頃は美人でしたが、奥様となられた今も、人の目を引く美しさを保っておられました。とりわけ表情が魅力的で、私にとって

は美しい顔立ちや顔色よりも素晴らしい、ほれぼれとするものに思えました。

奥様は私を両腕で抱き、愛情をこめてキスしてくださいました。

「あなたの到着を知らされたのは、ついさっきでしたのよ、ミス・サラ」と奥様はおっしゃいました。「屋敷に到着されて三十分はたったでしょうに。私のこと、ひどい女だと思われたでしょうね！」

「親切この上ない方ですわ。ファニー、それ以外にどう思えるとおっしゃるのですか？お客様を放って置いて、私を出迎えてくださるなんて、思ってもみませんでした。ほんとに申し訳ありません。あなたが親切なことは熟知しているのですから、こんなに仰々しくしていただく必要はありませんのに」

「まあ、あなた、これは仰々しいとかの問題ではありません。ああいった人たちがいる前で、あなたと最初にお会いするのは、できれば避けたかったのです。あなたがいらっしゃることを、それはもう心から楽しみにしておりましたのよ。さあ、もう一度キスをしてくださいな、お願いですから。ようこそ、クライトンへ。いいですか、サラ、あなたが必要な時はいつも、この屋敷を自分のおうちと思ってくださいね」

「優しいお従姉さま！ 生計のために働くようなことをしましたのに、私のことを恥ずかしいとは、お思いにならないのですね？」

「恥ずかしいですって！ とんでもありません。あなたの勤勉さと精神力には感心しておりますのよ。さあ、客間にいらしてください。あなたに会ったら、さぞかし娘たちも喜ぶことでしょう」

「私も嬉しくてたまりませんわ。この地を離れた時は、まだ二人ともいたいけ盛りで、短い白の子供服を着て、干し草畑でふざけ廻っておられましたが、今ではもう綺麗な淑女におなりでしょうね」

「なかなかの美人ですが、兄ほどは端正な顔立ちじゃありませんよ。エドワードはほんとに素晴らしい青年です。母親特有の自慢げな、ひどい誇張に聞こえますが、そう言っても別に気がとがめることはありませんわ」

「それで、ミス・トレメインはどちらに？ 彼女にお会いしたのですが・・・」

彼女の名前を口にしたとき、私はかすかな暗い影が従姉の顔をよぎったような気がしました。

「ミス・トレメインには——ええ——確かにほれぼれとすることでしょうね」と言って、従姉は少し考え込んでしまいました。

それから彼女は私の手を自分の腕に通して、客間へと案内してくれました。それは大きな部屋で、両端にはそれぞれ暖炉があり、その晩は赤々とした光を放っていました。二十人ほどがあちこちで小さな群れをなし、みんな楽しげに談笑しているように見えました。クライトン夫人は、二人の娘が腰かけている低いソファに近い暖炉の方へ、私をまっすぐ連れて行ってくれましたが、二人のそばには背丈が六フィートちょっとある若者が、炉棚の幅広い大理石板に腕をのせて立っていました。この黒い目の、細かく縮れてウェーブしている茶髪的青年を一目見て、私はエドワード・クライトンだと思いました。母親似であることだけで彼が誰であるか

分かったのです。とはいえ、この屋敷の跡継ぎである彼が、イートン校^(一〇)の最下級生だった頃に、たびたび私の方を見上げてくれた元気な顔とぱっちりした眼だけは、はっきりと覚えておりました。

私が主として注意を引かれたのは、エドワード・クライトンの一番近くに座っていた淑女でした。この女性こそミス・トレメインに違いないと思ったからです。背が高く、きゃしゃで、頭と首の姿勢は堂々たるものでした。私は彼女を最初にチラリと見たとき、その堂々とした態度に何よりも心を打たれました。なるほど端正な顔立ちで、その点については否定できません。必ず彼女にほれぼれとするはずだという従姉の言葉は本当でした。しかし、まばゆいほど美しい、完璧な目鼻立ちの顔、人目を引く驚鼻、文字どおりプライドが外に現われたような薄い上唇、ぱっちりした冷たい青い眼、墨で書いた眉毛、そして光冠のような淡い金髪は、私の心を引きつけるどころか、その正反対でした。ミス・トレメインは万人をほれぼれさせずにおかない——その点は疑いのないことですが、どうして男性がこのような女性と恋に落ちうるのか、私には理解できませんでした。

彼女は白いモスリン^(一一)の服を着ていました。装飾品は最高級のダイヤモンドでできたロケットだけで、それを白くて長い首に幅広のリボンで着けていました。とても量が多く見える彼女の髪は、重量感のある小冠のように編み上げられていましたが、それは小さな頭の上に鎮座すると、荘厳な王冠のように誇らしげに見えました。

この若い淑女にクライトン夫人は私を紹介してくださいました。

「あなたに紹介したい従妹がもう一人いらっしゃるのよ、ジュリア」奥様はほほえんでおられました。「ミス・サラ・クライトンで、サンクトペテルブルグから到着されたばかりです」

「サンクトペテルブルグですって？　すごい旅でしたね、それは！　はじめまして、ミス・クライトン。そんな遠方からいらっしゃるなんて、ほんとに勇敢な方ですこと。一人旅でしたの？」

「いいえ、ロンドンまでは旅の道連れがございました。とても親切な方です。お屋敷までは一人でしたが・・・」

ミス・トレメインは幾分うっとうしいような態度で握手をしてくれましたが、その冷たそうな青い眼で物めずらしそうに私の全身をしげしげと見ていました。私のことを要約して言うならば、「哀れな親類で、さえないおばさん」だったのでしょうか——そうした非難するような表情が、彼女の顔に読み取れるように思えました。

ところで、その時は彼女のことを考える時間があまりありませんでした。エドワード・クライトンが横から急に私の両手をつかんで、愛情をこめて心からの歓迎をしてくれたので、私は思わず涙が「心の底から目に込み上げて」^(一二)しまったからです。

青いクレープ生地^(一三)の服を着た、かわいらしい二人のお嬢さんが、部屋の別々の方角から走ってきて、「サラ叔母さま」と叫びながら私に嬉しそうにキスをしてくれました。私は小さな群れをなす三人のクライトン兄妹に取り囲まれ、みんなが子供で私も若かった頃のありふれた娯楽について、様々な質問——これは覚えていますか？　あれは忘れたでしょうね？　干し草

畑での戦争ごっこは？ 牧師館の果樹園での慈善学校^(一四)の茶会は？ ホーズリー・クームでのピクニックは？ チョーウェル共有地での植物採集や昆虫採集の遠足は？——とかいった質問を矢継ぎ早に受けるはめになりました。この質問攻めの間、私たちを眺めていたミス・トレメインの表情には軽蔑が浮かんでいて、どうやらそれを隠したい様子でもなさそうでした。

「クライトンさん、そんな純朴なアルカディア^(一五)の世界を、あなたが受け入れるなんて思ってもみませんでしたわ」と、彼女がとうとう口を切りました。「どうぞどうぞ、思い出話に花を咲かせてくださいませ。そんな少年少女の体験談は実に興味深いものがありますから」

「こんなことに関心がおありだとは思いませんでしたよ、ジュリア」恋人にとってはかなり手厳しいと思える口調でエドワードが答えました。「つまらない田舎の娯楽なんて軽蔑しておられますよね。ところで、あなたには子供だった時代があるのでしょうか？ 幼い頃に蝶々を追いかけたことなんてないでしょうね」

ともかく、彼女の口出しによって、私たちの昔話は終わりとなりました。エドワードはいらついてしまい、少年時代の楽しい思い出も、彼女の冷笑的な顔を前にして、すべて消えてしまったようでした。しかし、ジュリア・トレメインと並んでソファに腰かけていた（ピンク色のドレスを着た）若い女性が席を離れたので、そのあとにエドワードはサッと座って、その日の夕方はずっと婚約者のために尽くしていました。私は彼女に話しかけている彼の表情ゆたかな明るい顔を時々チラッと見ましたが、あれほど彼にふさわしくない女性もいないのに、彼は彼女に一体どんな魅力を感じていたのでしょうか。

北の翼棟にある自分の部屋に戻ったのは真夜中で、その時は心のこもった歓迎を受けたことで幸せ一杯でした。翌朝は早く起き——そうするのが昔からの習慣だったのですが——部屋の窓をおおっていたダマスク織り^(一六)のカーテンを開け、何気なく下の景色を見ってみました。

私に見えたのは広々とした厩舎の中庭で、そこは扉の閉ざされた馬屋や獵犬小屋に取り囲まれていました。それらの建物群は灰色の岩でできた屋根の低い大きなもので、あちこちにツタがはびこっていて、その^{こげ}苔むした古めかしい外観が、この世のものとは思えない興味を添えているように私には見えました。ここに並んでいる馬屋は長いこと使われていなかったに違いありません。お屋敷のもう一方のはずれ、つまり音楽室の裏手にあって、館の裏の景色で著しい特徴をなしている立派な赤煉瓦の建物群が、現在使用中の厩舎だったからです。

現在の旦那様の祖父が獵犬をたくさん飼っておられたことは何度も聞いておりましたが、その祖父の死後すぐに犬たちは売られてしまったそうです。それ以後、私の従兄である現在のクライトン氏は、先祖の例にならって獵犬を飼ってはどうかと一度ならず言われたようです。というのは、ここはキツネ狩りにもってこいの地域だったにもかかわらず、お屋敷の周囲二十マイルには、今では獵犬が一匹もいなかったからです。

しかし、ジョージ・クライトン——お屋敷の現在の当主——は狩獵をする方ではありません。実は、この娯楽を密かに恐れておいででした。なぜかという、狩獵場で折あしく命を落とした一族の子孫が、一人や二人ではなかったからです。この一族は、その富と繁栄にもかかわらず、まったく幸せだったというわけではありません。莫大な世襲財産が御長男にちゃんと相続

されたことはめったになかったのです。あれやこれやの不慮の死——ほとんどの場合は壮絶な死——が跡継ぎの家督相続を妨げたのです。従姉のファニーはお屋敷にまつわる過去の悲運について考えるとき、溺愛する一人息子のことで不吉な予感に悩まされることなどないのかしらと、私はいつも思ったものでした。

クライトン館には幽霊が——大きな古い屋敷に堂々とした威厳を完璧に備えさせるのに絶対必要な霊界からの訪問者が——いたのでしょうか？ 確かに、この大邸宅の敷地内でまれに見た者がいるという影のような存在については、私もそれとなく耳にしたことが何度かあります。しかし、それがどんな形をしているのか、突き止めることはできませんでした。

私が質問した人たちは、そんなものは見たことがないと、すぐに断言しました。もっとも、耳を傾ける価値もない、馬鹿げた伝説のような昔話であれば、聞いたことがあるということでしたが。一度、この問題を私が従兄のジョージに話したとき、そんなくだらない話は聞きたくないから、口が裂けても二度と触れないでくれと言われ、怒られてしまいました。

さて、十二月はお祭り気分のうちに過ぎて行きました。お屋敷は本当に愉快な方たちであふれ、みんな心の底から楽しみ、短い冬の日々を賑やかに送っていました。かつて慣れ親しんだ英国の田舎の豪壮な屋敷での生活は、私に絶え間ない喜びを与えてくれ、自分は親類に囲まれているのだと思うと、とても嬉しくなりました。

従姉の子であるエドワードにはたびたび会っていました。どうやら彼はミス・トレメインに、自分に好かれるためにはミス・サラに対して無愛想にしているのはだめだ、ということに分らせようとしているようでした。確かに、彼女は幾らか骨を折って私に愛想よくしてくれましたが、あのプライドの高い、見下したような、冷静沈着な態度をめったなことでは隠したりしませんでした。にもかかわらず、自分の恋人に対しては満足を与えたいように見えました。

二人の婚約期間は穏やかなアルキュオン^(七)の頃みたいだったわけではありません。いさかいが絶えない二人でしたが、その詳細についてエドワードの妹たち（ソフィーとアグネス）と私は面白おかしく話したものです。それはプライドが高い者同士による支配権争奪戦でしたが、エドワードのプライドの方には気品がありました。彼は、卑劣なことは何でも蔑むような気高いプライド、寛大な性質の人間にそぐわないこともない、そんなプライドの持ち主だったのです。この青年は私にとって賞賛の的だったので、母親のほめ言葉を幾ら聞かされても、うんざりすることはありませんでした。従姉のファニーもこの点に気づいていたようで、私が実の妹であるかのように、よく打ち明け話をしてくれたものです。

「ジュリア・トレメインのこと、もっと好きになればいいのですが、実際はそれほどでもないことに、あなたは気がついておられるでしょうね、たぶん」ある日、奥様は私にそう言われました。「でも、息子が結婚することについては、それはもう嬉しいのですよ。これまで主人の一族は幸せではありませんでしたからね、サラ。ここ何世代もの間、跡継ぎたちが慎重さを欠いて不幸な目にあったのです。エドワードが子供のとき、私は将来どんなことが起こるかしらと考えるながら、よく何時間もつらい思いをしたものです。今もそうですが、これまであの子が私の期待どおりに育ったことには、神様に感謝しております。あの子の行動について、今

まで不安を覚えたことなど一時もないからです。ですが、あの子の今回の結婚については、やっぱり喜ばずにおれません。だって、早死にしたクライトンの跡継ぎはみんな、結婚することなく死んでしまったのですからね。ジョージ二世^(一六)の御代にはヒュー・クライトンが決闘で、その三十年後にはジョンが狩猟場で背骨を折って、それからテオドールはイートン校の学友の銃が暴発して、ジャスパーは四十年前に地中海でヨットが沈没して、みんな死んでしまったのです。こんなふうに列挙しただけで恐怖を覚えますよね、サラ？ とにかく、あの子が結婚してくれれば、それだけ安全になるような気がします。そうすれば、我が一族の跡継ぎの多くに降りかかった呪いから、逃れることができるように思えますからね。あの子も妻帯者になれば、それが自分の命を大切にしなければならぬ大きな理由となるはずですよ」

私もクライトン夫人と同じ意見でしたが、エドワードが冷酷な美人のジュリアではなく、別の女性を選んでくれていたらと、思わずにいられませんでした。あんな方が相手では、彼の将来の生活も不幸なものになるような気がしました。

やがてクリスマスの日となりました——本物の古き英国のクリスマスです。外では冷たい霜と雪、暖かい家の中では飲めや歌えの大騒ぎ、昼間は庭園の大きな池でのスケート遊びや氷の張りつめた街道でのそり遊び、夜は内輪の演劇やジェスチャー・ゲームや素人コンサートがありました。私はミス・トレメインを見て驚きました。こういった夕べの娯楽に積極的に参加しようとしません。年配の人たちの間に座って見物する方が好きみたいで、私たちのいろんな余興はすべて彼女の気晴らしのために計画されたかのようでした。そんな王女様のような態度をとっていたのです。静かに座って、みめ麗しくしていることが、自分の使命だと思っているようでした。みんなの注意を引きたい気持ちなど少しも念頭にないみたいで、その強烈なプライドに虚栄心などが入り込む余地はありませんでした。ですが、彼女にそうする気があったならば、音楽の面で人の注意を引くことはできたはずですよ。というのは、クライトン夫人の居間にエドワードと二人の妹さんと私しかいないとき、彼女の歌やピアノの演奏を聞く機会がありました。彼女はお客様の中では歌も演奏も抜きん出ているからですよ。

朝と昼、妹さんたちと私は教区の貧しい人たちの家を次から次へと、クライトン夫人からの贈り物を満載したポニーの馬車で廻りながら、何日も楽しく過ごしました。公共機関による毛布や石炭の配給がなかったので、たくさんの生活必需品がそっと優しく支給されたのです。この三ヶ月というもの、アグネスとソフィーは疲れ知らずのお手伝いさん（牧師の娘）と一人か二人の若い淑女の助けを借りて、小作農たちの子供のために暖かい遊び着や重宝な肌着をせっせと作っていました。それで、クリスマスの朝には教区の子供がみんな、ひと揃いの新しい服で着飾った姿を見ることができました。クライトン夫人は、どの家で何が最も必要とされているかについて正確に把握するという、それはもう立派な才能をお持ちでした。私たちはポニーに引かせた馬車に様々な品物を山のように積んで運んだものですが、お屋敷の気前のよい女主人によって、しっかりと手書きされた書体で、全部の包みに宛名が書かれていました。

こうした私たちの遠征時には、エドワードが馬車を運転することもありましたが、その際に私はクライトン教区の貧者たちの間で彼が抜群の人気を博していることを知りました。彼がと

でも陽気に楽しく話しかけるので、そんな態度を見て彼らもすぐに気を楽にすることができたのです。エドワードは彼らの名前や間柄、何が不足しているかや何の病気にかかっているかなど、決して忘れてたりしませんでした。男たちが一番好きな銘柄のタバコを一箱ちゃんと外套のポケットに準備し、いつも冗談を飛ばしていました。それは特に機知に富んだ冗談でなかったかもしれませんが、彼らが心の底から笑う声が天井の低い、小さな部屋に響き渡っていたものです。

しかしながら、このような楽しい務めの分担をミス・トレメインは冷たく断ったのでした。

「私は人としての道にはずれていると、今ここで正直に告白した方がよいでしょう。彼らとは気が合いませんし、彼らの方もまたそのはずです。波長が合うということがないのだと思います。それから、むさ苦しい部屋も我慢できません。ああいった風通しの悪い家の臭いを少しでもかぐと、私は熱が出てしまいます。それにまた、彼らを訪問して何の役に立つというのですか？ ただ彼らを偽善者にする誘い水となるだけです。彼らが受け取っても正当かつ当然なものを——毛布、石炭、食料雑貨、お金、ワインなどを——一枚の紙にリストアップし、誰か信頼できる召使いを通して受け取らせた方が、絶対によいですわよ。そうすれば、あちらもへいこらす必要がないし、こちらでも我慢する必要がないわけですから」

「でもね、ジュリア、そういったことは我慢の問題じゃないって人たちがいるんだよ」と、エドワードは怒りで顔を紅潮させながら言い返しました。「施しをする喜びにあやかりたい人たちが——悩みやつれた貧しい者の顔が突然の喜びでパッと明るくなるのを見たい人たちが——この小作農たちと地主の間には友好的な絆が、つまり彼らの農家とお屋敷の間には一致する点があるのだと思わせたい人たちが——いるんですよ。例えば、ぼくの母がそうです。こうした務めを君はとてもいやなことだと思っているけど、母にとっては無上の喜びなんだ。君が館の女主人となったあと、変化が生じないといいんだけど」

「まだそうっていないのですから、その地位に私がふさわしくないとお考えならば、決心を変える時間は十分にありましてよ。お母様のようになりますと、偽ってまで言うつもりはありません。持ってもいない女の美德については、持っているふりなんかしない方がよろしいでしょうから」

それ以来ほとんど毎日、エドワードは私たちのポニーの馬車を自分が運転すると言ってきかなかったもので、あとに残されたミス・トレメインは自分で楽しみを見つけねばならなくなりました。結局、この会話が二人の仲たがいの発端となり、それは以前に何度かあった言い争いにも増して深刻なものになりました。

ミス・トレメインはそり遊びもスケートもビリヤードも好きではありませんでした。最近よく見られるようになったふしだらな傾向が彼女には全然なく、午前中はいつも客間にある特定の張出し窓の所に座り、妹のローラに付き添ってもらって、ベルリン羊毛^(一九)とビーズ玉で^{すだれ}簾の刺繍をしていました。ローラは姉にとって奴隷のような存在で、頭の方は独自の意見など望むべくもない、非常に生彩を欠いた感じで、顔の方は姉を青白くして模写した感じでした。

お屋敷に招待された客がもっと少なければ、エドワード・クライトンと彼の婚約者の不和は

間違いなく知れ渡ったことでしょうが、実際には自分の楽しみに余念のない人たちが館にあふれていましたので、気がついた方はおられなかったはずです。みんなが集まった時はいつも、この従姉の子はミス・トレメインに心を配っているように——少なくとも表面上は献身的であるように見せていました。実情を知っていたのは私と二人の妹さんだけです。

ですから、この若い淑女が慈悲深い気持ちをすべて拒絶したあと、ある朝わきの方へ私を手招きし、二十枚の金貨——ソヴリン金貨^(二〇)——が入った小さな財布を私の手にそっと渡した時は、本当にびっくりしました。

「今日、これを小作人たちに配っていただければ、非常にありがたいのですが、ミス・クライトン。もちろん私だって彼らに何かをあげたいと思っています。私がいやなのは彼らと話を^{わづら}する煩わしさだけなのです。あなたは施し物の分配係として適任ですわ。私のつまらない頼み事は、どうか誰にもおっしゃらないでくださいね」

「もちろんエドワードには話してよいですよ」私がそう言ったのは、彼の婚約者が見かけほど無情な人でないことを知ってもらいたかったからです。

「彼だけはやめてください」彼女は真剣に答えました。「その点で私たちの考えが違うのは御存じのほうです。お金を施すのは彼の気に入られたいからだと思われてしまいますわ。お願いですから、一言もおっしゃらないで、ミス・クライトン」私は言われるとおりにしました。この上なく注意して判断力を働かせ、黙ってソヴリン金貨を配ったのです。

このようにクリスマスは過ぎ去って行きました。それは大切な祝祭日の翌日——館の家族や招待客にはとても静かな日——のことでした。同時に、それは召使たちにとっては——夕方に年一回の舞踏会が——身分の低い小作人たちをすべて招待する舞踏会が催される、そういった盛大な祝祭日でした。^(二一)しかし、霜が急に解けてしまい、まったくの雨降り日——私のように気分が天気の影響を受けやすい人間にとっては憂鬱な日——となりました。館に到着して以来、初めて私は意気消沈してしまいました。

私と同じように天気の影響を受けた人は他にいないようでした。年配の御婦人たちは客間にある暖炉の一つを半円状に囲むように座り、陽気な娘さんや威勢のよい青年たちは群れをなして、もう一つの暖炉の前で賑やかに談笑していました。ビリヤードの部屋からは、ボールが頻繁にぶつかる音やステントール^(二二)の大きな声のように響き渡る、そうした楽しげな笑い声が聞こえてきました。私はカーテンで半分ほど隠れた奥行きのある窓の所に座って、小説を——毎月のように町から送られてくる箱一杯の本の一つを——読んでいました。^(二三)

屋内の光景が明るく陽気であるのに対し、屋外の眺めは憂鬱そのものでした。雪に包まれた樹木からなる美しい森、雪で白くなった谷間や波打つ土手は消えてしまい、水につかって薄暗く陰気な草地やその背景にある葉の落ちた物寂しい木立に、陰気な雨がしとしと降っていました。その鈴の陽気な音が大きに活気を添えることもなく、すべてが静寂と陰鬱に支配されていました。

エドワード・クライトンはビリヤードをすることもなく、不機嫌で落ち着きのない様子で、客間の両端を行ったり来たりしていました。

「ありがたい、とうとう霜が解けたぞ！」彼は私が座っていた窓の前で立ち止まり、そう叫びました。

すぐ近くに私がいることに少しも気づかずに、彼は独りごとを言っていたのでした。その時の彼の顔つきは明るくなる見込みがなさそうでしたが、私は思い切って話しかけてみました。

「こんな天気の方が霜と雪よりも好きだなんて、悪趣味ですわね！ 昨日の庭園はうっとりするような美しさ——本当に妖精の国のような景色——でしたのに、今日の庭園ときたら！」

「そうですね、もちろん、美的な観点から言えば、雪の方がよかったですよ。今日は何か気が滅入るような、大きい沼地みたいに見えますからね。ですが、ぼくは狩猟のことを考えているんです。あの忌々しい霜^{いまいま}のせいで、楽しみが一日だめになりました。しかし、これでやっと穏やかな天気にはしばらくは恵まれそうです」

「でも、エドワード、狩猟はなさらないのでしょうか？」

「いいえ、優しい叔母さま、そんなおびえた表情を穏やかな顔に浮かべたって、ぼくは絶対にやりますよ」

「このあたりに猟犬はいないと思っておりましたけど」

「今もいやしませんよ。でも、お国のどこにも負けない立派な猟犬が——ダルバラ犬が——実はいるんです。二十五マイルほど離れた所にね」

「では、一日の遠出のために二十五マイルも行くのですか？」

「こうした気晴らしのためなら、四十マイルだって、五十マイルだって、百マイルだって行きますよ。でも、今回行くのはたった一日の気晴らしのためなんかじゃありません。サー・フランシス・ウィチャリーの屋敷まで行きます——三日か四日ほど——フランク・ウィチャリー君とぼくとは、クライストチャーチ校^(二四)で無二の親友だったんです。今日の到着予定なんです。こんな雨の日に丘陵地を越えて行きたくはありませんからね。でも、たとえ天蓋の水門が開いて土砂降りになろうと、明日は必ず行きますよ」

「強情な青年ですこと！」と私は叫んで言いました。「ですが、こんなふうに放っておかれたら」私は声を低くして尋ねました。「ミス・トレメインはどう思われるのでしょうか？」

「ミス・トレメインには好きに言わせておきますよ。ぼくたちはキツネ狩りで有名なシャイア^(二五)の中心にいて、大空には猟犬の吠える声が響き渡っていますが、彼女はそうしようと思えば、ぼくに狩猟の楽しみを忘れさせることだってできたんですからね」

「あっ、だんだん分かってきましたわ。その狩猟の約束は前からの約束じゃなかったのですね」

「ええ、実は数日前から、ここにいるのが退屈になり始めたんです。で、二日か三日ほどウィチャリーで厄介になるぞって、フランクに手紙を書きました。とても心のこもった返事をもたらったんで、今週末まで厄介になることにしたってわけです」

「来週の舞踏会のこと、忘れていないでしょうね？」

「ええ、そんなことをしたら、母を怒らせることになりまし、招待客を侮辱することになりますからね。何が起ころうと、来週はここにいますよ」

何が起ころうとですって！ そんなことを軽々しく口にするなんて。この言葉を記憶することになる苦々しい時が、やがてやって来ることになったのです。

「そもそも行ったりなんかすれば、お母様を怒らせることになりますよ。お父様と同じように、キツネ狩りをどんなに恐れておられるか、御存じですよね」

「父の反応は実に田舎の紳士らしからぬものです。父は書齋から出ると虫の居所が悪くなる、そうした根っからの本の虫なんです。ええ、両親ともキツネ狩りを観念的に嫌っていることは認めます。ですが、二人ともぼくの乗馬がどんなに素晴らしいか、ぼくを負かすにはウィチャリーなんかでは見られない、もっと広い土地が必要だってことも知っているはずですよ。神経質になる必要はありませんよ、親愛なるサラ、両親には少しも不安の種は与えやしませんから」

「御自分の馬を連れて行くのでしょうか？」

「言うまでもないことです。自分の馬を持っている人が別の人の馬に乗りたくないなんて思うもんです。ペーパーボックスとドルイド^(二六)を連れて行きますよ」

「ペーパーボックスは変わった気質だって、妹さんたちから聞きましたけど」

「妹たちは馬を大きくなった羊ちゃんぐらいにしか思っていないんです。馬も女も素晴らしい奴はすべて、そうした多少の欠点で、つまり気質の荒い所がありがちですよ。例えば、ミス・トレメインがそうじゃないですか」

「私はミス・トレメインの味方ですよ。この仲たがいの問題で悪いのはあなたの方です、エドワード」

「そうですか？ まあ、どちらが悪かろうと、あの美しいジュリアが優しい顔をして親切な言葉をかけてくるまで、ぼくたちが前みたいになることは絶対にありませんよ」

「キツネ狩りの遠出から戻ってくる時は、もっと穏やかな気持ちになってくださいね」と、私は返答しました。「つまり、どうしても行くというのであれば、でも、気が変わってくださればよいのですけど」

「そんな心変わりほとんど不可能ですよ、サラ。ぼくは運命の女神のように決意が固いんですから」

彼はぶらぶらと立ち去りながら、何か陽気な狩猟の歌を口ずさんでいました。その日の午後になって、私とクライトン夫人が二人だけになると、このウィチャリー訪問の計画について、奥様は次のように話しかけてこられました。

「どうやらエドワードの決心は固いみたいですよ」奥様の口調は残念そうでした。「主人も私も家庭内で横暴な行為のように見えることは努めて避けてきました。私たちの大切な息子はとてもよい子ですので、その楽しみを邪魔するのは非常に辛いことなのです。主人が危険の多い狩猟場を病的なほど恐れていることは御存じですよ。これまでは、ああ、ありがたい！ かすり傷一つせずに済みました。でも、一週間に四日もレスターシア州^(二七)へキツネ狩りに行った時は、ほんとに、あなた、私は何時間も辛い思いをしましたのよ」

「彼は乗馬がうまいと聞きましたけど」

「とってもね。この近隣の狩猟家たちの間ではもっぱらの噂です。おそらく、あの子は館の

当主になれば、獵犬を何匹も飼い始め、曾祖父メレディス・クライトンのなつかしい時代をよみがえらせることでしょう」

「その当時は、私が今いる部屋の窓の下に見える厩舎の中庭で、獵犬がたくさん飼われていたのでしょうかね、ファニー？」

「ええ」と、クライトン夫人が心配そうに答えられたとき、彼女の顔が急に曇ったので、私は驚きました。

その日の午後は、いつもより早く二階の部屋に戻ったので、七時の晚餐のために着替えをするまで、たっぷり一時間ほど暇ができました。この暇な時間を使って私は手紙を書くつもりでした。しかし、部屋に着くと気だるい感じがしたので、机に向かう代わりに暖炉の前にある低い安楽椅子に腰かけ、いつの間にか夢に陥ってしまいました。

どのくらいの間そこに座っていたのかは分かりません。半分は物思いに沈み、半分は居眠りをしていた——とぎれとぎれの考え事と夢の世界のおぼろげな光景とが混在していた——ちょうどそのとき、私は聞き慣れない音にハッとして目を覚ましました。

それは獵犬係の角笛の音——何度か吹かれた角笛の低い悲しげな音——かつて私が耳にした中で一番この世のものと思えない、遠くから聞こえるような、不思議な音でした。私は『魔弾の射手』^(二八)の音楽を思い出しましたが、ウェーバーが作曲した中で最も気味の悪い一節といえども、そのとき私の耳に何度か届いた単調な音ほど、不気味ではありません。

私は立ちつくしたまま、その恐ろしい調べに耳を傾けておりました。周囲はすでに薄暗く、部屋は陰になり、暖炉の火はほとんど消えかけていました。聞き耳を立てていると突然、光がパッと目の前の壁を照らし出しました。例の音と同じように、その光もこの世のものとは思えない——天地のどちらからも射しているようには見えない、そのような光でした。

私は窓の方へ走りました。というのは、この恐ろしい光は窓を通して反対側の壁を照らしたからです。厩舎の中庭の大きな門は開け放たれ、鞭を持った獵犬係に従う犬の群れに続いて、深紅のジャケットを着た男たちが、馬にまたがって入ってきました。この光景はすべて、冬の沈む夕陽と男たちの一人が持っていた手提げランプの不気味な閃光とによって、かすかに見ることができたものでした。タペストリーで飾った壁を照らしたのは、この手提げランプの光だったのです。私には、馬屋の扉が次々と開けられ、紳士たちと馬丁たちが馬から降り、獵犬たちが小屋へ追い込まれ、助手たちが右往左往し、例の手提げランプの奇妙な青白い光が、次第につのる暗闇のあちらこちらで明滅しているのが見えました。しかし、馬の蹄^{ひづめ}の音や人間の声は全然——獵犬がかん高く吠える声や鳴き声は、まったく聞こえませんでした。あのかすかに聞こえた角笛の音が遠方へ消えてしまってからというもの、恐ろしい静寂が破られることは一度もなかったのです。

私は窓辺にひっそりと立って、下の中庭で男たちと動物たちの群れが、音も立てずに散って行くのを眺めていました。その消え方には超自然的なところは少しもありませんでした。その姿形が虚空の中に消えたり、溶けたりしたわけではなかったからです。私には、一頭ずつ馬がそれぞれの小屋へ導かれ、赤ジャケットの男たちが順番に門からぶらぶら出て行き、馬丁たち

の何人かはある方向へ、また何人かは別の方向へ散って行くのが見えました。物音がしない点を除いて、その光景には何ら不自然なところがなく、この屋敷に来たのが初めてであったならば、私はその時に見た人影が現実のもので——馬屋もすべて使用中だと思ったかもしれません。

しかしながら、私は知っていたのです——この厩舎の中庭とそれを囲む建物群が半世紀以上も使われていなかったことを。一時間前の予告もなく、とうの昔にさびれてしまった中庭が人で一杯になるなんて——空っぽの小屋が犬馬でふさがれるなんて、私には信じられないことでした。

どこか近隣の狩猟グループが、容赦ない雨から逃れるために、ここに喜んで避難してきたのでしょうか？ そんなことはあり得ないと思いました。私は幽霊のようなものは何も信じない人間で——幻を見ているのだと思うくらいなら、それ以外のどんな可能性だって、そちらを信じた方がましだと思う人間です。しかし、あの静けさ、あの角笛の恐ろしい音——あの手提げランプの奇妙な、この世のものとは思えない閃光ときたら！ 私は迷信深い人間ではなかったのですが、額に冷や汗をかき、手足がぶるぶる震えてしまいました。

数分の間、私は彫像のように窓際に立って、誰もいない中庭をぼんやりと見つめておりました。それから急にビクッとして、召使い部屋に通じている裏の階段から下へそっと走って行きました。この謎をなんとかして解こうと思ったのです。マジョラム夫人の部屋への道は昔の経験から知っていたので、この女中頭に私が見たことの意味を尋ねようと思い、そちらに歩みを向けました。私の胸中に深く秘められた確信は、クライトン館の秘密を知っている人に相談するまで、あの光景については一族の者に話さない方がよかろうということでした。

台所と召使いたちの食堂の前を通ると、楽しそうな笑い声が聞こえました。従僕や女中はみんな、今晚の饗宴のために自分たちの部屋を飾り付けるという楽しい仕事に精を出していました。開いた扉の前を通った時には、ヒイラギや月桂樹の葉、はたまたツタやモミの葉で作った花綱に最後の仕上げをしているのが、また両方の部屋とも豪華なティーのために食卓を準備しているのが見えました。女中頭の部屋は、長い廊下のはずれの引っ込んだ隅にある素敵な古い部屋——壁板が黒ずんだカン材の部屋——で、私が子供の頃には砂糖漬けやその他の菓子類が無尽蔵に詰まった宝庫だと思っていた、そうした大きな戸棚が一杯ありました。それは陽の当たらない古い部屋で、そこにある大きな旧式の暖炉は、夏は炉端に置いた大きな花瓶にバラとラヴェンダーが生けてあって涼しそうな感じ、冬は朝から晩まで丸太がパチパチと燃えていて暖かそうな感じがしました。

私が扉をそっと開けて中に入ると、灰色の波紋のある絹の正装用ガウンをまとい、まるでバラ園のように見える帽子をかぶったマジョラム夫人は、赤々と燃える暖炉のそばに置いた背もたれの高い安楽椅子でうとうとしていました。私が近づくと彼女は眼を開け、最初はしばらく戸惑ったような顔で、私をじっと見つめていました。

「まあ、あなたでしたか、ミス・サラ？」と彼女は叫びました。「この暖炉の光を受けても、幽霊のような青白い顔に見えますわよ！ ちょっと蠟燭に火をつけさせてくださいな。それから炭酸アンモニア^(二九)を少し持ってきて差し上げますわ。さあ、私の安楽椅子に座ってください

いませ。まあ、ほんとに全身ぶるぶる震えておいでですよ！」

彼女は抵抗されないうちに私を座らせ、テーブルの上に用意してあった二本の蠟燭に火をつけました。その間、私は何か話そうとしましたが、唇が乾いていて最初のうちは声を出す力がなくなったようでした。

「炭酸アンモニアなんか気にしないでください、マジヨラム夫人」私はなんとか声を出しました。「病気じゃないのですから。びっくりした、ただそれだけのことです。ここに来ましたのは、私をおびやかしたものが何かを説明してもらおうと思ったからです」

「それはどんなものですか、ミス・サラ？」

「このことはあなたも聞いたことがあるはずですよ、確かに。今しがた、角笛が聞こえませんでしたか？ 獵犬係の角笛です」

「角笛ですって！ まあ滅相ありません、ミス・サラ。どうしてまたそんな妄想を頭に浮かべられたんでしょうか？」

マジヨラム夫人の赤らんだ頬が突如として青ざめ、その時までには私とほとんど同じ青白さになっていたのが見て取れました。

「妄想なんかじゃありませんよ。確かに音が聞こえ、人々の姿が見えたのです。今しがた狩獵グループが北の中庭に避難してきたのですよ。犬と馬、紳士と召使いのグループでした」

「どんな感じでしたでしょうか、ミス・サラ？」この女中頭は奇妙な声で尋ねました。

「うまく口では言えません。私に分かったのは、みんな赤いジャケットを着ていたということです。それ以上のことはほとんど分かりません。いいえ、手提げランプの光で、確かに紳士の一人はチラリと見えましてわ。白い髪と髭の、背が高い、猫背の方でした。襟の非常に高い、ウエストも高いジャケット——百年ものの古いジャケットをまとっていることには、気づきましたけど」

「大旦那様ですわ！」マジヨラム夫人が声をひそめて囁きました。それから私の方を向くと、断固とした態度ながら努めて明るい口調で言いました。「夢を見ていらっしゃったんですよ、ミス・サラ。それだけのことです。暖炉の前の椅子で居眠りをし、夢を御覧になられたんですわ、きっと」

「いいえ、マジヨラム、夢なんかじゃなかったわ。角笛で目がさめて窓辺に立つと、獵犬と男たちがやって来るのが見えたのですから」

「御存じですか、ミス・サラ？ この五十年間、北の中庭の門は錠が下ろされ、^{かんぬき}門まで差されていたことを。お屋敷の中を通らない限り、そこへは誰も入って行けないんですよ」

「今晚は、よその人たちに雨宿りをさせるために、門が開けられていたのかもしれませんが」

「門を開ける唯一の鍵は、そこの戸棚にかかっているんですから、あり得ませんよ」と、女中頭は部屋の片隅を指さしながら答えました。

「でも、いいこと、マジヨラム、その人たちは確かに中庭にやって来て、今まさに彼らの馬と犬たちがその小屋に入っているのよ。クライトン氏か、従姉のファニーか、エドワードの所へ行って、すべて問いただしてみるわ。あなたが真実を話してくれないのだから」

ある狙いがあった私はそう言ったのですが、それが効を奏しました。マジョラム夫人が私の手首をつかんで真剣になったからです。

「だめです、ミス・サラ、そんなことをなさっては。後生ですから、やめてくださいませ。奥様や旦那様には一言も漏らしてはいけません」

「どうしてなの？」

「あなたが御覧になったのは、ミス・サラ、この屋敷にいつも不幸と悲しみをもたらすものだからです。死者たちを御覧になったんですよ、あなたは」

「どういう意味ですか？」私はふと恐怖に襲われ、あえぐように尋ねました。

「おそらく、この館で時々あるものが見られるという噂は、お聞きおよびのことでしょうね——ありがたいことに、長い年月をおいて時々なんです。というのは、そのあと必ず災難が起こっているからです」

「聞くのは聞きましたが」と、私はあわてて答えました。「この場所に取り憑いているのが何であるのか、誰に尋ねても教えてくれないのです」

「そうですとも、ミス・サラ。知っている者は誰も口を割りません。でも、あなたは今晚すべてを見てしまわれたんです。これ以上あなたに隠しておいても仕方ありませんわね。あなたが御覧になったのは大旦那様のメレディス・クライトン氏で、御長男は狩猟場で落馬して亡くなったのでございます。十二月のある夜のことでした。大旦那様と他のキツネ狩りの一行が無事に館へ戻られてから一時間後に、御長男の亡骸が家に運ばれて来ました。大旦那様は狩猟場で御長男の姿が見えないのに気がつかれたんですが、そのことは何とも思われなかったようです。御長男はかわいそうに背骨が折れ、溝の中に倒れているところを労働者に発見されました。そのそばには馬が杭につながれていたそうです。その日からというもの、大旦那様は一度も顔をお上げにならず、馬に乗って獵犬を追いかけることも二度となさいませんでした。キツネ狩りの熱烈な愛好者でいらしたのに。犬と馬はすべて売却され、その日から北の中庭はがらんとなくなってしまったのでございます」

「こうしたことを最後に見てから、どのくらいの時がたつのですか？」

「もう随分になりますわ、ミス・サラ。こんなことが最後に起こったとき、私はまだすんなりした少女でしたから。それは冬のこと——まさに今晚——メレディス様の御長男が亡くなられた夜のことでした。ちょうど今と同じように、お屋敷は招待客であふれておりました。あのとき、あなたの部屋に寝ておられたのは、オックスフォードの血気さかんな若い紳士でした。彼もまた例のキツネ狩りの一行が中庭にやって来るのを見たんです。当然ながら彼は窓を大きく開いて、できるだけ大きな声で一行に「出たぞー」^(三〇)と叫びました。彼は前の日に到着したばかりで、この^{かいわい}界隈のことは何も御存じなかったんで、皆さんはどこでキツネ狩りをなさるんでしょうかとか、明日は館の獵犬と一緒にひとつ走りさせてもらいましょうかとか、晚餐の時に言われたんです。それは今の旦那様のお父上の時代です。テーブルの上座におられた奥様は、この話を耳にするや、顔面蒼白になられました。かわいそうに、それだけの理由がおありになったんですね。大旦那様は卒中の発作に襲われ、その後は口もきけず、誰の顔も分からな

くなくなってしまわれ、その週が終わらないうちに亡くなってしまわれました」

「恐ろしい偶然の一致ですが、単なる偶然の一致かもしれません」

「他にも聞いた噂が幾つかあるんですよ、ミス・サラ——人をだましたりしない人たちの話です——結局、すべて同じでした。大旦那様と獵犬たちの亡霊は、この屋敷にとっては死の警告なんです」

「そんなことは信じられません」と私は叫びました。「信じるなんて不可能です。このことについてエドワード氏は何か御存じでしょうか？」

「いいえ、ミス・サラ。お父様もお母様も、若旦那様に知られないように、それはもう注意しておられましたから」

「エドワードは意志が強いから、そんなことにあまり影響されないと思いますけど」

「御覧になったことを旦那様や奥様に話したりなさらないでくださいませ、ミス・サラ」と、老いた忠実な女中頭は嘆願するように言いました。「お知りになったら、きっと不安と悲しみに陥ってしまわれますわ。この屋敷に災難がやって来ているとしたら、それを食い止めることは人間の力ではできないんですから」

「災難がすぐ近くまで来ているなんて、そんなことがあるものですか！」と私は答えました。「幻とか、何かの前兆とか、私は信じませんよ。どうせなら、私は夢を見ていたのだと——窓際に立って目を開けたまま夢を見ていたのだと、そう思った方がましです——死者たちの幻影を見たと思うくらいならね」

マジョラム夫人はため息をついて黙ってしまいました。どうやら彼女は狩獵グループの幽霊の存在を固く信じていたようです。

私は晚餐の着替えのために部屋に戻りました。自分が見たことについて、どんなに理性的に考えようとしても、それはなおも私の頭と神経に強い影響を及ぼしました。他のことを考えるなんて不可能でした。不幸が近づいているという、そうした今までに経験のない病的な恐怖が、実際の重荷のように私にのしかかって来るような感覚に襲われました。

私が下に降りたとき、客間にいた人たちはとても楽しそうでした。晚餐の時も談笑は途切れることがありませんでした。しかし、従姉のファニーの顔がいつもより少し心配そうに見えたので、間違いなく彼女は予定された息子のウィチャリー訪問のことを考えているのだと思いました。

そう思うと私は突然ある恐怖に襲われました。その日の夕方に私が見た幻影が彼にとって——お屋敷の一人息子で跡継ぎのエドワードにとって——危険の前兆だとしたら、どうなるのでしょうか？ このことを考えると、心臓が冷たくなりましたが、次の瞬間には、そんな自分の気の弱さがいやになりました。

「こんなことを年老いた女中頭が信じるのは無理もないことだけど」と、私は自分に言い聞かせました。「私のような女——教育を受けて世事に通じた女にとっては、途方もなく馬鹿げたことだわ」

しかし、その瞬間から私は、何とかしてエドワードの旅を中止させる方法がないものかと、

いろいろ頭を悩ませ始めました。私自身の影響力については、たとえ一時間でも彼の出発を妨げることはできないと思いましたが、ジュリア・トレメインであれば、彼を説得して行くことを断念させられるのではないかという気がしました。ただし、そうしたことを懇願できるほど、プライドを捨てて謙虚になればの話ですが。それで、その晩のうちに私は彼女に訴えてみることにしたのです。

その晩はずっと全員が陽気に騒いでいました。召使たちや招待客たちは大広間でダンスをしていましたが、私たちの方は小さな群れをなして天井桟敷や階段に座り、みんなの楽しい踊りを見ておりました。

そのような配置は男女がイチャイチャするのに絶好の機会を与えるようで、このチャンス若手人たちは十分に利用していました。エドワード・クライトンとその婚約者だけが唯一の例外で、その晩はずっと二人とも相手にわざわざ近づかないようにしていたようでした。

下の大広間で騒々しいダンスが行われている間に、私は何とかミス・トレメインを階段にある彩色窓の斜間^{はすま}（三）へと連れ出しました。そこにあった幅の広いカシ材の椅子に私は彼女と並んで座り、彼女に秘密の約束をさせてから、その日の午後に見た光景とマジョラム夫人との会話の内容について、話して聞かせました。

「いや、まったく、ミス・クライトン！」ミス・トレメインは墨で引いた眉を上げながら、あからさまに軽蔑した様子で叫びました。「そんな馬鹿なことを——幽霊とか、前触れとか、そんな老女の戯言^{たわごと}を信じるなんて、私におっしゃるつもりではないでしょうね！」

「たしかに、ミス・トレメイン、超自然的な現象は私にとっても信じがたいことです」と、私は真剣に答えました。「ですが、今日の夕方に見たのは超人的な現象だったのですよ。あのことを考えると、とても不吉な予感がします。どういうわけか、ウィチャリーを訪問するエドワードと結びつけて考えてしまうのです。彼が行くのを妨げる力が私にあるのなら、ぜひともそういたしますが、その力がないのです。そうした影響力があるのはあなただけです。後生ですから、その力を使ってくださいませ！ 何としても、彼がダルバラ犬を連れてキツネ狩りに行くのをやめさせてください」

「私に恥をかかせてまで、彼に楽しみを控えるように頼ませたいのですか、あなたは？ 先週、彼があんな態度を私にとったあとだというのに」

「彼があなたを怒らせるようなことをしたのは認めますが、ミス・クライトン、あなたは彼を愛しておいでです。プライドが高くて、その愛を皆さんにお見せになりませんが、彼を愛していらっしゃることは間違いありませんわ。後生ですから、彼と話をしてください。あなたがほんの少し言葉をかけてくださるだけで、危険を阻止できるかもしれないのですから、どうか命を危険にさらさせないでくださいませ」

「私に気に入られようとして、この訪問を彼がやめるとは思えませんわ」と、彼女は答えました。「拒否されて恥をかいただけですから、そんなことをむざむざと彼にさせるわけには参りません。おまけに、このあなたの懸念はすべて馬鹿げたことです。みんな昔からキツネ狩りをして来たのですよ。私の兄弟など、冬は一週間に四回もキツネ狩りをしておりますが、みんな

けろりとしていますわ」

私も簡単には匙を投げませんでした。このプライドの高い頑固な女性に対して、耳を傾けさせることができる限りは、懇願を続けたのです。しかしながら、すべて無駄骨でした。彼女は最初の言葉に執着するばかり——プライドを捨ててまでエドワード・クライトンにお願いをするのは、誰が何と言おうといやだということでした。エドワードは彼女と距離を置きたかったようです。彼女の方も彼なしでやって行けるということ、そして彼と別れて館を去る時には、二人とも赤の他人になっていそうだと、態度で示したものでした。

このようにしてその晩は終わりました。翌日の朝食時に、私はエドワードが夜明け後すぐにウィチャリーへ向かったと聞かされました。彼がいなくなったことで、少なくとも私は、仲間内にぼっかりと穴があいたような悲しい気持ちになりました。もう一人にとっても同じだったと思います。というのは、ミス・トレメインは表面こそいつも以上に陽気にふるまおうとし、普段とは違って誰に対しても愛想よくしようと努力していたにもかかわらず、その誇り高く美しい顔は真っ青になっていたからです。

エドワードが出発してからの数日は時間の経過が遅く感じられました。心が圧迫されるような感じ——振り払おうとしても振り払えない漠然とした不安——があったからです。お屋敷は賑やかな人たちであふれていましたが、エドワードがいなくなった今となっては、退屈で陰鬱な場所になったような気がしました。彼が座っていた場所は別の人が占めていて、晚餐用の長いテーブルの両側に空席は一つもなかったのですが、いつも私には空席があるように見えました。元気のよい青年たちはまだビリヤードの部屋で笑い声を響かせ、陽気な娘さんたちは相変わらず楽しげにたわむれ、お屋敷の跡継ぎがないことなど、どこ吹く風といった様子でした。しかしながら、私にとっては全部が様変わりしてしまいました。私は病的な妄想にすっかり取り憑かれてしまい、気がつくや女中頭の言葉を、つまり私が見た幻影はクライトン館にとって死と悲しみの前兆なのだという言葉、いつも気に病んでいたのです。

ソフィーとアグネスも招待客たちと同じように、兄がどうしているかななどには無関心でした。華やかな行事となりそうな新年の舞踏会のことで、二人とも極度に興奮していたからです。五十マイル四方の有力者がすべて出席されるということで、館の隅々まで遠方からの客人で一杯となり、残りの客人は近くに住む比較的裕福な借地人たちの家に宿泊することになっておりました。要するに、この行事の準備は大がかりなものだったのです。クライトン夫人は午前中いつも、女中頭との相談や、料理人からのメッセージや、花を飾る問題についての庭師の親方との話し合いといった、どれもこれも女主人が自ら注意を払う必要のあることで、忙殺されていました。こうした責務や無数の客人たちからの要望などで、従姉のファニーはてんてこまいでした。それで、母親として胸中にどんな不安が潜んでいたとしても、身勝手に息子のことを心配する暇はほとんどありませんでした。館の当主に関しては、大半の時間を書齋で過ごしておられましたので——土地管理人と仕事の話があるという口実で、実際にはギリシャ語の本を読んでおられたのですが——心中を察することは誰もできませんでした。一度だけですが、私は旦那様がエドワードのことについて、その帰りをいかにも待ちわびていらっしゃるような口調

で、話されるのを耳にしました。

妹さんたちはウィグモア通りのフランス婦人帽子店から新しい帽子を受け取ることになっていました。それで、この盛大な行事が近づくとつれ、大きな箱に入った帽子類が続々と届くようになると、寝室や化粧室の扉を閉めて日がな一日、美しい装飾品について女性特有の意見交換や見せ合いっこが始まりました。ということで、例の形のない陰鬱な前兆に心を悩まされていた私も、谷間の百合^(三二)がついたピンク色のチュール^(三三)のドレスや林檎^{りんご}の花がついた薄黄色のドレスについて、意見を求められました。

しばらくして——私には異常に長く思えたのですが——とうとう新年の朝を迎えることになりました。その日は快晴で、緑が見られない地表はほとんど春のような陽光に照らされていました。大食堂は、前の晩に行く年を陽気に見送ったあと、この新年最初の日の朝食に集まった者たちが、「おめでとうございます」とか「よろしく願います」とか述べる声で、ざわついていました。しかし、エドワードはまだ帰宅しておらず、私はとても淋しい気持ちでした。この特別な朝、私はジュリア・トレメインが少しかわいそうになって、彼女のそばに行きました。ここ数日というものの、ひっきりなしに彼女を観察していましたので、その頬が日ごとに青白くなるのに気づいておりました。彼女の沈んだ眼と浮かぬ顔が、昨晩は眠れなかったことを示しています。そうです、彼女が暗鬱な気持ちでいたこと——プライドの高い、情け容赦ない彼女がひどく苦しんでいたことは確かでした。

「今日こそは帰って来るはずですよ」朝食に手もつけず黙って威厳を保ちながら座っていた彼女に、私は低い声で言いました。

「誰がですか？」と、彼女はよそよそしく冷たい表情で私の方を向いて答えました。

「エドワードですよ。舞踏会に間に合うように戻って来ると約束していましたからね」

「クライトン氏の予定の行動などまったく存じませんが」と、彼女は横柄この上ない口調で言いました。「今晚ここに帰って来なければならないのは、当たり前のことです。州のお偉いさんが半分もいらっしゃるのに、欠席して侮辱するようなことはなさりたくないでしょうから。お父様の館に今いらっしゃる方たちに、ほとんど価値を認めていないにしましてもね」

「しかし、彼が世界中の誰よりも価値を認めている方が、ここにはいらっしゃいますよね、ミス・トレメイン」この女性のプライドをくすぐろうとして、私はそう言ってみました。

「そんなことは存じませんが、彼が帰って来ることについて、どうしてそんなに深刻になるのですか？ もちろん、帰って来ますとも。帰って来ない理由などありませんわ」

それは彼女には珍しいほど、そそくさとした話し方でした。また、彼女はなぜか私の印象に残るような、彼女らしからぬ、不審そうな、鋭い視線でこちらを見ました——とても強い不安を示しているような視線に、私には思えました。

「ええ、不安のようなものを抱く正当な理由はありません」と私は言いました。「が、この前の晩に私が言ったことは覚えていらっしゃいますよね。あのことで私は絶えず心を痛めておりますので、彼が無事に帰宅した姿を見れば、それだけで得も言われぬ喜びとなるでしょう」

「そんな気の弱さにかまけるなんて残念ですよ、ミス・クライトン」

彼女が言ったことはそれだけでした。しかし、朝食後に客間で彼女を見た時は、館の正面に通じている長い曲がりくねった馬車道が見える窓際に、腰を下ろしていました。この場所からであれば、誰が屋敷に近づいて来ても必ず見えたはずです。そこに彼女は朝から晩まで座っていました。他の人たちはみんな、多少なりとも夕方の行事の準備で慌ただしいか、そうでなくても慌ただしい顔をするので忙しそうでした。それでも、ジュリア・トレメインは窓辺から動こうとせず、頭痛を口実として申し立て、本を片手に一日中じっと座ったままで、彼女の母親が部屋に戻って横になるように頼んでも、頑固に拒んでおりました。

「ジュリア、今晚は体調が悪いのだから、何もできませんわよ」トレメイン夫人はもう少しで怒るところでした。「お前はとても長いこと顔色が悪かったけど、今日は幽霊みたいに真っ青ですよ」

彼女があの方の帰りを待ちわびていることは分かっていました。ですから、日が暮れても彼が戻って来ないと、本当に彼女のことがかわいそうになりました。

私たちはいつもより早めに晚餐を済ませ、照明が蠟燭だけで外来植物の匂いが漂うビリヤード室で、食事後にゲームを一、二度しました。それから、技巧と秘術を尽くして身ごしらえに専念する長い準備の時間となりました。その間、女中たちは洗濯場からフリルの付いたモスリンの婦人服ベティコートを持って右に左に飛びまわり、廊下では髪先端を焼いた時のほのかな匂いが漂っていました。十時になると、音楽隊がヴァイオリンの音合わせを始め、綺麗な娘さんたちと優雅に着こなした青年たちが、幅の広いカシ材の階段をゆっくりと降りて来ました。また、お屋敷の外では馬車を飛ばして来る車輪の音がだんだんと大きくなり、中では州の有力者たちの到着がステントールのような大声で告げられるようになりました。

その晩の催し物の詳細について長々と記す必要はないでしょう。他の舞踏会とほとんど同じ——素晴らしい成功でした。それは、心が浮き浮きして幸せな、今の快樂にすっかり身を任せることができる人にとっては豪華絢爛たる夜でした。ですが、人に言えない不安という重荷に心を圧迫された人にとっては、明るい色のドレスを着た美人たちを遠くから眺めるような光景、つまり形と色だけからなる万華鏡を見るような、退屈な行列にしか見えませんでした。

私にとって音楽は調べのないもの、まばゆい光景は魅力のないものに思えました。刻一刻と時間が経過し、夜食も済んで、みんながいつも最大の楽しみと言われる最後のワルツを楽しんでいましたが、それでもエドワード・クライトンは私たちの間に姿を見せませんでした。

「彼はどうしたのですか？」と、数え切れないほど何度も尋ねられたクライトン夫人は、彼の不在についてできる限りの謝罪をしておられました。かわいそうに、彼女はすべての招待客に同じような愛想のよい笑みで応対し、あらゆる話題に対して陽気にちゃんと答えておられましたが、彼が帰宅しないことが今や彼女にとって激しい不安の原因になっていることは、瞭然として明らかでした。一度だけ、数分間ですが、彼女が一人で座ってダンスを眺めておられたとき、私は彼女の顔から笑みがスッと消え、そこに苦悶の表情が浮かぶのを見ました。私は思い切って彼女に近づいてみましたが、その時に彼女が私に向けた顔の表情は決して忘れられません。

「サラ、あの子は！」奥様は低い声でおっしゃいました——「あの子に何か起こったのだわ！」
私は必死に彼女をなだめようとしたのですが、自分自身の心もだんだん打ち沈んでいたのです、その試みも不十分なものとなりました。

その日の夕方、ジュリア・トレメインは体面を繕うために最初だけ少しダンスをしていましたが、それは自分が恋人の不在に心を痛めていると誰にも思わせないためでした。しかし、彼女は最初のダンスを二つか三つしたあと、疲れたと言って年配の御婦人たちの間の席に引き下がってしまいました。まるで雲のようにふわふわした白いチュールのドレスを着て、ツタの葉にダイヤモンドをちりばめた冠を淡い金髪の上に戴いた彼女は、とても青白い顔だったにもかかわらず、それはもう美しく見えました。

夜も更けて行き、みんなが最後のワルツを踊ってぐるぐる廻っていたとき、たまたま私は部屋の端にある戸口の方を見たのですが、そこに夜会服を着ていない一人の男が帽子を片手に持って立っているのに気づいて、ぎょっとしました。男は心配そうな青白い顔をして、用心深く舞踏室の中を覗いていました。私が最初に思ったのは不吉なことでしたが、次の瞬間には男が消えていたので、それ以上は彼の姿を見ることができませんでした。

長い一続きの部屋に人の気配がなくなるまで、私は従姉のファニーのそばにたたずんでいました。ふわふわのドレスを一晩だけの精力的なダンスでボロボロにしてしまったソフィーとアグネスも、自分自身の部屋に戻っておりました。舞踏室に残っていたのはクライトン夫妻と私だけで、そこでは花がしおれてしまい、蠟燭も壁から突き出た銀の燭台の中で一本、また一本と消えていました。

「夜会はともうまく行きましたわ」奥様はかなり心配そうにクライトン氏の方を見て、そうおっしゃいました。旦那様は手足を伸ばしながら、とても安心したような態度で、あくびをなさっていました。

「そうだね、行事は本当にうまく行ったよ。でも、この場に姿を現わさなかったエドワードは、礼儀作法に違反したことになるぞ。きっと、最近の若い連中は自分の楽しみしか考えないのだろうね。何か特別に魅力的なことがウィッチャリーにあって、そのために急いで帰ることができなかったのじゃないかな」

「約束を破るなんて、あの子らしくありませんわ」と、クライトン夫人が答えられました。「あなたは心配じゃないのですか、フレデリック？ 何か——何か事故でも起こったとは思われませんか？」

「何が起こると言うのだね？ この州でネッドほど乗馬がうまい者がいるかね？ あれが怪我をする恐れなんかないよ」

「病気かもしれませんわ」

「そんなことはない。あれは若きヘラクレスだ。^(三四) それに、病気などということがあれば——そんなことはあるまいが——ウィッチャリーから伝言があるはずじゃないか」

旦那様がそうおっしゃったとき、老執事のトゥルフォールドが不安に満ちた、しかつめ顔でそばに立っていました。

「あの——ある方が旦那様にお会いしたいとおっしゃっています」彼は低い声で言いました。

「二人きりで——」

「ウィチャリーからの使いなの？」と、奥様が尋ねられました。「こちらに来てもらってください」

「でも、奥様、旦那様と二人きりで会いしたいと、その方は特にお望みなのですが。書斎の方へお通しいたしましょうか？そこなら明かりがまだ消えておりませんから」

「それじゃあ、やっぱりウィチャリーからの使いなのね」奥様は氷のように冷たい手で私の手首をつかみながら言われました。「私、言わなかったかしら、サラ？あの子に何か起こったのじゃないかって。その方にはこちらに来てもらってください、トゥルフォールド。こちらへ、ぜひとも」

そうした命令口調は、いつも旦那様に対して恭順な奥様には、またいつも召使いたちに対して優しい女主人には、きわめて珍しいことでした。

「そうしてくれ、トゥルフォールド」クライトン氏がおっしゃいました。「どんな悪い知らせが届いたかは知らないが、一緒に聞くことにしよう」

旦那様は奥様の腰に腕を廻されました。お二人とも大理石のように顔面蒼白で、岩のように微動だにされず、これから自分たちに加えられる一撃を待っておられました。

訪問者が部屋に入って来ましたが、それは私が戸口にいるのを見た男の人でした。ウィチャリーの教会の牧師補で、サー・フランシス・ウィチャリーの礼拝堂つきの牧師でした。地味な中年の男です。彼は言わねばならないことをできるだけ優しい言葉で——キリストに仕える者として、また自分が経験した悲しみから思いつく、そうしたありきたりの慰めの言葉で——語りました。空しい言葉、無駄な骨折りでした。加えられる打撃は避けられないのですから、この世の慰めでは打撃を寸毫すんごうも弱めることができませんでした。

あの晴れた元旦の日に、ウィチャリーでは固定障害競争——紳士を騎手とするアマチュアの競馬——があったそうです。それで、エドワードはお気に入りの獵馬、ペパーボックスに乗るように勧められたのでした。競馬に出てもクライトンまで戻る時間はたっぷりあったので、彼は出場することを承知しました。彼の馬が簡単に優勝しそうに見えたとき、ちょうど最後の柵、すなわち先に水たまりのある二重の柵に来たとき、ペパーボックスは急にストップして跳ぶのをやめ、頭から柵を越えて倒れてしまったので、騎手は垣根を越えて、コースのすぐ内側の野原まで投げ飛ばされてしまいました。ところが運悪く、そこに重い石の地ならし機があったのです。この石の地ならし機の上にエドワード・クライトンは落ち、その激突の全衝撃を頭で受けてしまったのだそうです。すべてが語られました。この致命的な結末を牧師補が語っているとき、私が不意に周囲を見渡すと、ミス・トレメインが語り手の少し後方に立っているのに気づきました。彼女はすべてを聞いていたのです。叫び声を発することもなく、失神するような素振りも見せず、静かにじっと立ったまま話の結末を待っていたのです。

その日の晩がどのように終わったか、私は覚えていません。恐ろしい静寂が私たち全員を支配していたような気がします。馬車が一台準備され、クライトン夫妻は瀕死の息子と対面する

ためにウィチャリーに向かわれました。エドワード・クライトンは競馬場からサー・フランシスの屋敷へ運ばれる途中で亡くなってしまったそうです。私はジュリア・トレメインに付き添って彼女の部屋へ戻り、冬の夜が白々と明けるまで——悲痛の夜明けまで、彼女と一緒に座っておりました。

もう話すことはほとんどありません。悲嘆に暮れていても人生は続いて行きます。クライトン館にはひっそりとして物寂しい時が訪れました。お屋敷の当主は、俗世間から離れて独り暮らし市井の隠士よろしく、独房のような書齋に埋もれてしまわれました。あの日からというもの、ジュリア・トレメインがほほえむのを見たことはない、という噂を私は耳にしました。彼女はまだ独身のままで、もっぱら父親の田舎の広大な屋敷に住んでいます。同輩に対しては相変わらずプライドが高く打ち解けない態度をとっているものの、近隣の貧しい人々の間では慈悲と憐れみにあふれる、まさに天使のように思われているそうです。そうです、かつて貧乏人のあばら屋は鼻持ちならないと言ってはばからなかった高慢な女性は、着ている服は別にして今や愛徳会の修道女^(三五)のようになったのでした。このように、女性にとっての大きな悲しみは人生の流れを変えてしまうのです。

その恐ろしい元日の夜以後も、私は従姉のファニーにしばしば会いました。クライトン館ではいつも同じように歓迎していただきました。私は、大所帯の女主人として尊敬されている彼女が、穏やかな表情で快く自分の義務を果たし、娘の子供たちにほほえみかけておられるのを見たことがあります。しかしながら、私には彼女の心のうちが分かります。彼女の人生の歯車を動かすぜんまいが壊れ、彼女に「喜びを与えるものが地上から消え失せた」^(三六)のです。この世の喜びや楽しみをすべて冷めた、しかつめらしい顔で眺めておられる彼女にとっては、あらゆるものが大きな悲しみの暗い影のせいで光明を失ってしまったのでした。

【訳注】

(一) フランス出身のイングランド王（在位、一一三五～五四）。ウィリアム一世（征服王）の孫で、ヘンリー一世の甥。ヘンリー一世の死後、その娘であるマティルダ（通称「女帝モード」）と長い内戦状態にあった。

(二) 一五五八年から一六〇三年までイングランド女王に就いたエリザベス一世。ヘンリー八世の娘で、英国国教会を確立し、スペイン無敵艦隊を破った。

(三) 一七〇二年から一四年まで英国女王に就いたステュアート家最後の君主。ジェームズ二世の娘。イングランドとスコットランドを合併し、一七〇七年にグレートブリテン王国を成立させた。

(四) ロシア連邦北西部、バルト海に臨む港市で、ピョートル大帝によって一七〇三年に建都され、一七一二年から一九一七年までロシア帝国の首都。

(五) イングランドとウェールズの各地で主として高等法院裁判官によって定期的に行われた民事・刑事の裁判。一九七一年に廃止。

(六) 十六世紀半ばからドイツで民衆本として流布した「メルジーナ伝説」は、ゲーテによって『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』(第三卷第六章)の中で「新メルジーネ」として改作された。そこでは、小箱から漏れてくる光に気づいて覗いてみると、素晴らしい宮殿の広間のような部屋が見えるが、角度を変えて覗いてみると、灯火が消えてしまって真っ暗闇になる、と語られている。

(七) チェコスロバキア製ガラスで、特にテーブルウェア用の彫刻のある光彩豊かなガラス。

(八) 派手なプリント模様の厚手の木綿地で、特に垂れ布、掛け布として用いる。

(九) 重苦しい彫刻、装飾、精巧な^{くりがた}彫形などの多用、強烈で黒ずんだ色彩の使用、幾何学的形状の強調などを特徴とする。

(一〇) バークシャー州南部の街、イートンにあるパブリック・スクール。一四四〇年にヘンリー六世によって創立。紳士教育を伝統とし、上流階級の男子を全寮制で教育する。

(一一) 毛織物の一つで、^{そもうし}梳毛糸で平織りにした薄地で柔らかい風合いのもの。

(一二) 桂冠詩人テニスン (Alfred Tennyson, 1809-92) の『初期作品集』(Juvenilia, 1830) に収められた「オリアーナのバラッド」(The Ballad of Oriana) からの引用 (I feel the tears of blood arise / Up from my heart unto my eyes, / Oriana.)。

(一三) 布の表面に^{ちりめん}縮緬風のしぼ(ちぢれ)のある織物。

(一四) 慈善団体や篤志家の資金援助で運営された貧民のための小学校で、公立学校制度の前身となった。

(一五) 古代ギリシャのペロポネソス半島にあった高原で、牧歌的で平和な桃源郷という伝説で有名。

(一六) (シリアの首都ダマスカスにちなむ) 亜麻を使って、平織りまたは綾織り地に大きな織り模様を出した紋織物。

(一七) 冬至の頃に風波を静めて卵をかえすと想像された鳥。アルキュオーンの時期は、冬至前後の天候の穏やかな二週間のことで、一般には平穏な時代を意味する。

(一八) ハノーヴァー朝始祖ジョージ一世の子で、一七二七年から六〇年まで英国王。強いドイツ訛の英語を話したが、知性も社交性も乏しく、軍事技術以外にはあまり関心がなかった。

(一九) 刺繍・編み物用の細手の柔らかい毛糸。

(二〇) 英国の昔の一ポンド金貨で、一九一五年に英国内での使用は廃止。

(二一) 十二月二六日(法定休日)は、ボクシング・デーと呼ばれるクリスマスの心付けの日。日曜の場合はその翌日。使用人や郵便配達人などに祝儀を与える。

(二二) 五十人分に匹敵する声量を持っていたというトロイ戦争で活躍した伝令使。

(二三) 当時は上流階級も主要都市に支店を持つ貸本屋ミューディーズ・ライブラリーを利用していた。ミューディー (Charles E. Mudie, 1816-90) は一八四二年に貸本業を始め、独自の経営で評判をとり、その本はイギリス全土に行き渡っていた。一九三七年に閉店。

(二四) オックスフォード大学のカレッジの一つ。一五二五年の創立。一五四六年にヘンリー八世の手で再建され、現在に至っている。

(二五) イングランド中部地方の諸州で、キツネ狩りが特に盛んな地域。ウォリックシャー州、レスターシア州、ノーサンプトンシャー州など。

(二六) ペーパーボックスには胡椒入れ、短気者の意がある。ドルイドは、古代ケルト族の間でキリスト教

伝来以前に信仰されたドルイド教の祭司。当時は最高の学者で、予言や魔術を行ない、裁判官であると同時に民族的な詩人でもあったが、四世紀頃に絶滅した。

(二七) イングランド中部の州で、牛の全乳製の硬質チーズと長毛の羊が有名。州都はレスター。

(二八) ドイツの作曲家ウェーバー (Carl Maria Friedrich von Weber, 1786-1826) のロマン派オペラの先駆的作品 (一八二一)。必ず的に命中するという七発の弾丸 (ただし、そのうちの一発は悪魔の意中の的に当たる) が悪魔から射手に与えられる。

(二九) アルコール溶液は気付け薬として使われる。

(三〇) キツネが飛び出した時にハンターの発する声 (view-hallo)。

(三一) 戸口・窓の両壁が内側に向かって広がった空間。

(三二) ドイツスズランの別名。花言葉は「春と幸福の再来」。

(三三) ベール、イブニングドレス、バレエ衣装などに用いる薄い網状の絹。

(三四) 主神ゼウスの息子で怪力無双の英雄。

(三五) 一六三四年に St. Vincent de Paul が創立した修道女会の会員 (Sister of Charity)。

(三六) 桂冠詩人ワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) の「不滅のオード」(Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood, 1807) からの引用 (But yet I know, where'er I go, / That there hath pass'd away a glory from the earth.)。

【作品と作者の解説】

本邦初訳。原題は “At Chrighton Abbey” で、初出は作者ブラッドン (Mary Elizabeth Braddon, 1837-1915) の夫で出版者のマックスウェル (John Maxwell, 1824-95) が編集していた雑誌、『ベルグレイヴィア』(Belgravia) ——ハイドパーク南の上流住宅地の名前から取ったもの——の一八七一年五月号。夫が一八七三年に三巻本として出版した『ミリー・ダレル物語集』(Milly Darrell, and Other Tales) に再録されている。

ブラッドンは不品行な事務弁護士の娘としてロンドンに生まれたが、五歳の時に両親が離婚したので、自分と母親の生活費を稼ぐためにメアリ・セイトン (Mary Seyton) という名前で地方の舞台に立った。女優をしながら詩や劇を書いていたが、一八六〇年二月 (二十五歳の時) に作家に転向した。彼女を有名にした最初の作品は第二作目の『レディー・オードリーの秘密』(Lady Audley's Secret, 1861-62) で、これはマックスウェルの二つの雑誌 (Robin Goodfellow と Sixpenny Magazine) に連載された。彼女がマックスウェルと正式に結婚したのは彼の狂気の妻が死んだ一八七四年で、それまで二人は同棲していた。彼女はマックスウェルの五人の子供を育て、自分自身の子供も六人産んだ。



ブラッドンは文筆活動においても多産ぶりを発揮し、五十五年の作家活動において約八十の小説、九

つの劇、数多くの短篇小説と随筆を書いた。殺人、自殺、狂気、姦通、強迫、密告などを描いた彼女のセンセーション・ノヴェルは、夫が彼女のために創刊してくれた『ベルグレーヴィア』を通して出版され、一八六六年には彼女自身が夫に代わって編集者になった。「貸本小説の女王」（訳注の二三を参照）と呼ばれたブラッドンは、自分の主たる読者層が自分と同じように男性に対する社会的・性的な従属に不満を抱くミドル・クラスの女性たちであることを知っていた。彼女の作品に規範を転覆させるようなフェミニズム的言説が多いのはそのせいである。ブラッドンはフランス文学の擁護者としても有名で、一八五七年にはフローベールの『ボヴァリー夫人』を翻訳している。

J・S・レ・ファニユ作

「オンジエ通りの怪」

松岡光治訳

ぼくの話は人に語って聞かせるような価値など——少なくとも紙に書いて読んでもらう価値などありません。これまでも話をしてくれるように頼まれたことは何度かあります。実際に今回も、家の外では冷たい風が悲しげな音を立てて吹き、家の中ではすべてが快適で心地よい、そんな冬の晩に夕食を終えてから、申し分ない暖炉の火に照らされた聡明で熱心な皆さんの顔に囲まれ、こうやって語り始めてみると——自分で言うのもおこがましいのですが——滑り出しは上々だと言えます。とはいえ、皆さんの希望どおりにしようとすれば、それは勇気が必需となります。ペンとインクと紙は驚異的なことを伝えるには興ざましの道具ですし、「読み手」というのは明らかに「聞き手」よりも批判的な生き物なのですから。しかし、日が暮れてから読むようにと、皆さんが友だちに勧めてくださるのであれば——ゾクゾクするような得体の知れない恐怖の話が、しばし炉端の座談で問題になるようなことがあれば——それはまた話が別です。要するに、皆さんが語るべき好時期^{モッリア・テンボラ・ファンディ} (一) を確保してくださるのなら、ぼくは自分の仕事に取りかかり、勇気を出して自分の語りたいことを語るつもりです。では、そういった条件を前提とし、これ以上は無駄口をたたかず、怪事件の経緯をすべて簡潔に語ることにいたしましょう。

従兄のトム・ラドロウとぼくは一緒に医学の勉強をしていました。(二) 医者という職業に留まっていたならば、たぶん彼は成功していたでしょう。ですが、英国国教会^{いとこ} (三) の牧師の方に鞍替えしてしまい、その義務を立派に果たしている際にかかった伝染病の犠牲となって、残念なことに若死にしてしまったのです。さしあたり、彼の性格については、落ち着きがある一方で、ざっくばらんな明るい男だったと言えば、それだけで十分でしょう。とても厳格に真実を貫き、ぼくのような性格——興奮したり、神経質になったりする気質——はまったく持ち合わせていませんでした。

ぼくたちが大学の講義に出ていた頃だったでしょうか、ラドロウ伯父さんが——トムの父親ですが——オンジエ通り^{いよこ} (四) の古い屋敷を三、四軒ほど購入し、そのうちの一つが空き家になっていました。この伯父さんは田舎に住んでいたので、その空き家に借り手がない間は、自分たちの住まいにしようじゃないかと、トムが言い出しました。そこに引っ越せば、講義のある教室だけでなく娯楽場の近くにも住めるようになるし、下宿の家賃を毎週払うことから解放されて、願ったり叶ったりじゃないかと言ったのです。

ぼくたちが持っていた家具は実に乏しく、身のまわりの品も質素で基本的なものばかりでした。要するに、ぼくたちの住まいの備えは、ほとんど野宿^{ビバーク}同然に簡単なものだったのです。従って、ぼくたちは新しい計画を立てると、すぐ実行に移しました。表側の客間がぼくたちの共通の居間、その上の二階の部屋がぼくのもの、同じ二階の裏側の部屋がトムのものとなったわ

けです。ですが、どんなことがあっても、ぼくはその裏側の部屋を使用する気になれませんでした。

最初に言うておく必要がありますが、これは非常に古い屋敷でした。五十年ほど前に正面だけが新築された感じでしたが、この部分を除いて現代風に見える所は全然ありません。この屋敷を伯父さんのために買って権利書を調べてくれた代理人から聞いた話では、たぶん一七〇二年だったと思いますが、これは没収された他の多くの財産と一緒にチチェスター・ハウス^(五)で売却された家でした。もともとはジェームズ二世^(六)時代のダブリン市長であったサー・トマス・ハケット^(七)が所有していたのだそうです。売却された当時、築何年になっていたかは分かりませんが、いずれにせよ長い年月の間にいろいろと変化した結果、今では古い大邸宅によく見られるような、好奇心をそそると同時に気を滅入らせるような、謎めいていて悲しみに沈んだような、そんな雰囲気を醸し出していました。

装飾の細かい部分を当世風にリフォームするようなことは、ほとんどなかったようです。その方がおそらくよかったです。というのは、まさに壁や天井、扉や窓の形、暖炉の前の風変わりな対角面、梁や重厚な蛇腹^(八)には、何か過去と結びついた異様な感じがあったからです。言うまでもないことですが、階段の手すりから窓枠に至るまで、ごまかしを絶対に寄せつけず、現代の美装や上塗りをいかに多用してみても、その古さをハッキリと示してやまない、そうした非常に頑丈な木の工芸品についても、過去と結びついた異様な雰囲気がありました。

実際には、客間に壁紙をはる程度の取り組みがなされていたのですが、その壁紙はどういうわけか寒々として場違いな感じがしたそうです。隣の横町で小さな泥饅頭^{どろまんじゅう}のような店を営んでいる老婆が、その壁紙のことを憶えていました。ぼくたちが雇っていた女中は、この老婆の娘——とはいえ、五十二歳の老嬢——だけでしたが、彼女は夜明け時にやって来て大広間でティーの準備をすべて済ませると、すぐまた静かに退室して行きました。その彼女の母親から聞いた話では、当時ハロックスという（「首吊り判事」という評判が立っていて、検死陪審^(九)の評決によれば、最後は自分自身が「一時的な狂気」に駆られ、子供の縄跳び用のロープを大きな古い階段の手すりにかけて、首吊り自殺をした）老判事がここに住んでいて、素晴らしい鹿肉と上等の古いポートワイン^(十)で友だちをもてなしていたそうです。そんな黄金時代^(十一)には、実際に広々とした客間の多くは、金箔をかぶせた牛革が壁にかけられて、さぞかし異彩を放っていたことでしょう。

寝室の壁はすべて板張りでした。表側の寝室は気持ちを暗くさせるような所がなく、居心地のよい佇まい^{たたず}のせいでしょうか、陰気なものを連想させることも全然ありません。しかしながら、裏側の寝室の方は違います。変な位置にあつて人を憂鬱にするような、そんな二つの窓がベッドの足もとをぼんやり



と見つめ、ダブリンの古い屋敷によく見られる壁龕^(十二)が、幽霊の出そうな大きな収納部屋——陰影相和^{あいわ}すという点で裏側の寝室と融合し、仕切りが溶けてなくなったような収納部屋——みたくに見えました。夜中などは、この奥まった場所——ぼくたちの女中はよく引^{アル}つ込みと呼んでいました——が、ぼくの目には何かい^わくありげで、とても不気味な性質を帯びて見えたものです。このトム^{トム}の寝室では、たった一本しかない弱々しげな蠟燭が、その暗闇を照らそうと無駄な努力をしていました。そして、そこでは真っ暗な壁龕がいつも恐ろしい目でトムをにらんでいたのです——もっとも、そこは常に光線の通らない場所でしたが。とはいえ、このような印象は部屋の趣^{おもむき}の一部にすぎません。どういうわけか分かりませんが、ぼくはこの部屋全体に嫌悪感を覚えました。その大きさや形状には、目に見えない不調和——何か不可解で筆舌に尽くしがたいもの——しっくりしていて安心できると密かに思えるような、そんな感覚とは何となく相容れない、どことなく疑心暗鬼を生じさせるような雰囲気があったからです。総合的に考えた結果、ぼくが最初に言いましたように、どんなことがあっても、こんな場所では一晩だって一人で過ごす気になれませんでした。

このように迷信に囚われる自分の弱みを哀れなトムから隠そうなどという気もありませんでした。一方、トムはぼくの不安を心の底から馬鹿にして笑っていましたが、これから皆さんにお聞きいただくように、この懐疑論者も自分の経験から教訓を得るように運命づけられていたのです。

双方がそれぞれの寝室を占有するようになって間もなく、ぼくは眠れぬ夜と安眠妨害について不平を漏らすようになりました。元来ぼくは熟睡タイプで、悪夢にうなされるようなことは全然なかったもので、こうした不快なことに一層いらだっていました。しかし、每晚いつものような休息をとる代わりに、「しこたま恐怖を味わう」^(十三)ことが、ぼくの運命となったのです。手始めに恐ろしい不快な夢を連続して見たあと、ぼくを悩ませていたものがハッキリとした形をとるようになりました。細かい点ではどれも大した違いがないような、そんな同じ幽霊の訪問を最初の週に少なくとも（平均すると）二晩に一回、受けるようになったのです。

さて、この夢、悪夢、我慢ならない夢幻に——何と呼んでも結構ですが——以下のように、ぼくはみじめにも翻弄されてしまいました。

その時は真っ暗だったのですが、ぼくのいた部屋のすべての家具と雑然とした配列が、この上なく忌まわしいことに、ハッキリと見えた——いや、見えたような気がしました。ご存知のように、こんなことは普通の悪夢にありがちなことです。ところで、このように何でも見通すことができる状態というのは、さながらライトアップされた舞台の上で単調な恐怖の劇的場面^(十四)が披露されるのを見るのに似ています。おかげで、幾晩かは耐えられない時を過ごすはめになりました。そんな状態で、なぜか分かりませんが、ぼくの注意はベッドの足もとと向かい合った所にある窓にいつも釘づけになったのです。そして、ぼくはいつも同じ影響を受け、何か恐ろしい予感にじわじわと、しかし確実に囚われてしまいました。

理由は判然としませんが、何か漠然とした恐ろしいことが、どこか見知らぬ場所で、ある見知らぬ仲介者によって、ぼくを苦悩させるために着々と準備されているような、そんな気がし

ていたのです。すると、ある間隔をおいて——ぼくにはいつも同じ長さに思えたのですが——突然、一枚の絵が窓の所に飛んできて、まるで静電気を受けたように、そこにへばり付いてしまい、それからぼくにとって恐怖の試練ディシプリンが始まりました。たぶん数時間は続いたはずですが。この窓ガラスに付着した不可解な絵は、絹でできた深紅の花柄の部屋着をはおった老人の肖像画でした。ぼくはその服の折り目を今でも詳しく説明することができます。老人の顔つきは奇妙に混ざり合った知性と肉欲と権力を具現化していただけでなく、そこにはさらに邪悪で不吉な兆しもたくさん見て取ることができました。かぎ鼻はハゲワシのくちばしのようです。二つの目は大きく、灰色で、飛び出していて、人間とは思えない残酷さと冷酷さで、キラキラと輝いていました。こうした顔の上に深紅のピロードの帽子が載っていて、その下からチラッと見える髪の毛は、老齢のために白くなっていましたが、眉毛の方は本来の黒さを留めていました。ぼくは石のように非情な顔の皺しわ、色合い、陰りをどれもよく憶えています。それも無理はないのです！身の毛のよだつ顔にジッと凝視され、何時間にも思える苦悶を味わいながら、どういわけか悪夢に魅せられたように、ぼくもまたジッと凝視していたからです。ですが、とうとう

おんどり
雄鶏が鳴いたので、消え去ってくれました—— (十五)

夜の恐ろしい監視を通して、ぼくを金縛りにしていた、あの悪魔は。そうしてやっと、ぼくは苦しみもだえながらも、日々の務めがあったので起床したわけです。

この夜の苦悩の実態を親友のトムに詳しく説明するのは、いやでたまらないことでした。理由はハッキリと分かりませんが、悪夢の中で去来する不思議な幻影が、激しい苦悶や気味の悪い恐怖について受けた強烈な印象と結びついていたからかもしれません。しかし、忌まわしい夢に悩まされていることについて、ぼくは漠然とした形で彼に話してやりました。そして額を寄せ合って相談し、真偽が疑わしい医学的な唯物論(十六)に従い、呪術ではなく強壯剤を使うことで、恐怖を追い払うことにしたのです。

ぼくは素直に認めますが、この強壯剤は実に効験あらたかで、そのせいか忌々しい肖像画の出現が次第に途絶えるようになりました。これはどうしたことでしょうか？ 結局、この奇妙奇天烈な幽霊——恐ろしいだけでなく個性的でもある幽霊——は、ぼくの空想の産物だったのでしょうか？ それとも、胃の調子が悪いせいで見えたものでしょうか？ つまり、あれは（当時の専門用語を借りれば）主観的なものにすぎず、外部の第三者による明白な攻撃や侵入の結果ではなかったのでしょうか？ そういったことは、皆さん、ぼくたちが共にあとで認めることになるように、決して起こりはしなかったのです。あんな肖像画の形をとって、ぼくの五感を金縛りにした悪霊のやつは、同じように近くにおいて、精神的に活動し、こちらに悪意を抱いていたのかもしれませんが——もっとも、ぼくにはやつの姿が見えなかったのですが。自分の体調をちゃんと維持し、酒を飲まずに節制しておれば、啓示宗教(十七)の道德律など問題になることはないでしょう。物質界と霊界との関係は瞭然として明らかなのですから。すなわち、身体組織が

健全な状態で、そのエネルギーが損なわれていなければ、ぼくたちは様々な悪影響に対して自己防衛できるかもしれませんが、そうでない場合は生活自体が恐ろしいものになってしまうのです。催眠術師^(十八)や電気生物学者^(十九)も、平均すれば十人の患者のうち九人に対しては失敗するのです。だから、悪霊だって同じかもしれません。ある種の霊的な現象が生じるには、身体組織が特別な状態にあることが絶対必要なのです。そういった活動は時には成功し——時には失敗する——それだけのことです。

これはあとから知ったことですが、懐疑論者を自認していた親友もまた、どうやら悩みを抱えていたようです。とはいえ、その頃のぼくはまだ何も知りませんでした。ある晩のこと、ぼくは珍しく熟睡していましたが、突如として寝室の入り口の部屋で足音がしたので、目を覚ましてしまいました。そして、その足音にすぐ続いて、大きなガランガランという音が聞こえたのです。あとになってから、その音は大きな真鍮製の燭台が原因だったと分かりました。哀れなトム・ラドロウが力を込めて階段の手すり越しに投げた燭台が、もう一つ別の階段をはね返りながら転がり落ちて行く音だったのです。これとほとんど同時に、トムがいきなり扉を開けて、ぼくの部屋へ後退^{あとずき}りして飛び込んできました。彼の興奮たるや尋常ならざるものでした。

ぼくはベッドから飛び出て、自分がどこにいるかもハッキリと分からないまま、彼の腕をつかんでいました。そこで、ぼくたちは——シャツ姿のまま——開いた扉の前に立ち、向かい側の大きな古い階段の欄干を通して、雲のかかった月の青白い光がかすかに射し込んでいた入り口の部屋の窓を見つめていました。

「どうしたんだ、トム？ どうかしたのか？ いったい全体どうしたんだね、トム？」不安でいらいらしていたぼくは、彼をゆさぶりながら問い正しました。

彼は深呼吸してから返事をしましたが、あまり筋の通った返事ではありませんでした。

「何でもない、まったく何でもない——ぼくは何か——何か言ったかい？——リチャード、蠟燭はどこだ？ 真っ暗じゃないか。ぼくは——ぼくは蠟燭を持っていたんだぞ！」

「ああ、真っ暗だよ。でも、どうしたんだ？——ホントに何事だね？——話してくれ、トム——正気でも失ったのか？——何事かね？」

「何事かねだって？——ああ、すべて終わった。あれは夢だったに違いない——夢以外であるはずがない——そう思わんかね？ 夢じゃないなんてことはありえんよ」

「もちろん」と、ぼくは途徹もなく不安になりながら言いました。「実際に夢だったのさ」

「ぼくの部屋に誰か男がいると思ったんだ。で——それで、ベッドから飛び出たのさ。で——それで、蠟燭はどこ？」

「君の部屋だよ、たぶん。行って取ってこようか？」

「いや、ここにいてくれ——行かないでくれ。何でもないんだ。行かないで、お願いだ。すべて夢だったんだ。扉に錠を下ろしてくれ、ディック。君と一緒にここにいるからさ——不安なんだ。だから、ディック、後生だから、君の蠟燭に火をつけて窓を開けてくれ——お話にならない状態なんだ、ぼくは」

頼まれた通りにしてやると、彼は女海賊グラニューエイル^(二〇)のように毛布を一枚まとして、

ぼくのベッドのすぐそばに腰を下ろしました。

誰でも知っていることですが、どんな種類であれ、恐怖というものは伝染しやすいものです。トムが苦しんでいた特別な種類の恐怖はとりわけそうでした。このように彼をふがいない男にしてしまった、見るも恐ろしい幻影の詳細については、世界を半分やると言われても、その時だけは聞く気になれませんでした。彼もまた繰り返して話したくはなかったことでしょう。

「君の馬鹿げた夢のことなんか、話してくれなくたって構わんよ、トム」と、ぼくは軽蔑を装いながら言いましたが、内心は恐怖におびえていました。「別のことを話そうじゃないか。でも、この汚い古屋敷がぼくたちの体質に合わないのは確かだ。消化不良とか——えーっと——寝苦しい夜とかに悩まされてまで、誰がこんな所に長居なんかするもんか。だから、ぼくたちは新たに下宿を探した方がいい——そう思わんかね？——すぐにも」

トムは同意してくれ、しばらくして言いました——

「リチャード、ぼくは考えていたんだけど、^{おやじ}親父と最後に会ってからずいぶん時が経つから、明日ちょっと田舎へ会いに行つて、一日か二日で戻ってくることにするよ。だから、その間に君が新しい部屋を借りておいてくれよ」

こうした決心が幻影にひどくおびえた結果であることは明らかでしたが、その決心もたぶん翌朝になれば夜の闇や露と一緒に消えるだろうと思いました。ところが、それはぼくの勘違いでした。ぼくが適当な下宿を見つけたら、トムの訪問先であるラドロウ伯父さんの所にすぐ手紙を出して呼び戻すという合意のもと、彼は薄明に起きて田舎に向かって出発したのです。

さて、ぼくも住まいを変えたいのは山々だったのですが、偶然ちょっとした遅れや思いがけないことが連続して起こったので、賃貸契約が済んでトムを呼び戻すための手紙を出すまでに、一週間が経過してしまいました。その間にささいな事件が幾つか語り手であるぼくの身に起こったのです。今となつては遠い昔のことなので馬鹿らしいことに思えますが、そういった事件のせいで、当時は本当に早く引越したいという気持ちに駆り立てられていました。

竹馬の友が出立して一日か二日した晩のこと、ぼくは部屋の扉に錠を下ろして、暖炉のそばに座っていました。ガタガタする三脚台の上には、大きなガラス容器で温かいウィスキー・パンチ^(一)を作るための材料が置いてありました。それは、ぼくを取り囲んでいた

黒、白、青、ネズミ色の^{スピリッツ}幽霊たち^(二)

を遠ざけるのに最善の方法、つまり偉い先祖たちが推薦してきた方法を採用し、「体^{スピリッツ}にお酒を入れて体から^{スピリッツ}元気を出す^(三)」ためのものでした。ぼくは解剖学の本を脇に投げてしまったあと、パンチを飲んで寝るのに先立って例の強壯剤を飲みながら、『スペクテーター』誌^(四)を五、六ページほど読んでいました。ちょうどその時のことです。屋根裏部屋から降りる階段のあたりで足音が聞こえました。それは夜中の二時のことで、外の街路は教会墓地のように静まり返っていました。ですから、その足音はハッキリと聞き取れました。狭い階段を上から降りてくる、そのゆったりした重い足音には、老齡のせいか緩慢な動きで大きな音を出してしまう

ような特徴がありました。この足音のさらに奇妙な点は、ドシンという音とパタッという音の中間のような——耳にするだけでも恐ろしい——音から推測するかぎり、音源の足が間違いなく裸足であったということです。

女中は何時間も前に帰ってしまい、この屋敷に用があったのは自分だけです。そのことはよく分かっていました。階段を降りてくる男に、足音を隠すつもりが全然ないこともまた明らかでした。それどころか、まったく不必要なほど大きな音を立て、わざと慎重に歩を進めたがっていたようです。ぼくの部屋を出たあたりまで、つまり階段の一番下まで到達すると、その足音は急にピタッとやみました。ぼくは今か今かと待ち受けていました——部屋の扉が自動的に開き、あの忌々しい肖像画のモデルが入ってくるのを。しかし、数秒後に足音がまた聞こえ始めたので、ぼくはホッと胸をなでおろしました。それは前と同じような動きです。奥の客間の方につながっている階段の部屋を通り、そこでまたしばらくストップしてから、もう一つの階段を降りて玄関の広間の方へ行き、そこからは何も聞こえなくなりました。

さて、足音が聞こえなくなるまでの緊張状態の中で、実に不快なことに、ぼくの心の動揺は言うなれば頂点に達していました。耳を澄ましても風がそよぐ音さえしません。ぼくは勇気を出して、ある実験をすることにしました。扉を開け、ステントール^(二五)のような大声で階段の手すり越しに、「そこにいるのは誰だ？」と怒鳴ったのです。応答なし。人の気配がない古い屋敷の中で、ぼくの声が響き渡っただけです。例の動きが再開されることもありません。要するに、ぼくの不快感にハッキリとした方向づけをするような、そんなことは何も起こらなかったのです。こうした状況下では、一人で声を力一杯あげても無駄なことですが、実に不快にも、その声の響きには人を失望させるようなところがありました。そのせいでしょうか、ぼくの孤立感は次第に高まり、開けたままにしておいたはずの背後の扉が閉まっているのに気づくと、急に不安が募ってきました。それは退路を断たれるかもしれないという漠然とした不安です。できるだけ急いで自分の部屋に戻り、そこに朝方までジッとしていましたが、自分が監禁状態に陥ってしまったと思うと、本当に不愉快な気持ちになりました。

翌日の夜、あの裸足の年老いた同居人は戻ってきませんでした。とはいえ、その次の日の夜は、ぼくが床に就いて暗闇の中にいると——大体この前と同じ時刻だったと思いますが——またしても例の老人が屋根裏部屋から降りてくる足音をハッキリと聞くことになったのです。

今回はパンチを飲んでいて、敵を迎撃するための志気は、いやが上にも高まっていました。ぼくはベッドから飛び出して、火が消えそうな暖炉の前を通る時に火かき棒をつかみ、アッと言う間に玄関の広間に来ていました。この時には足音もすでに聞こえなくなっていたので、暗闇と寒さに志気をくじかれてしまいました。人間の姿をしていたのか、クマの姿をしていたのか、どちらか分かりませんが、黒い怪物の姿が見えた、あるいは見えたような気がしたのは、その時でした。その時の恐怖がどんなものだったか考えてもみてください。怪物は背中を壁に向け、玄関の広間に立ち、大きな緑がかかった二つの目をぼんやりと光らせながら、ぼくと向かい合っていました。ところで、ぼくは包み隠さずに告白しなければなりません、実はそこに皿や茶碗を陳列した食器棚があったのです——もっとも、その時は気がつきもしま

せんでしたが。同時に、次のことも正直に言うておく必要があります。想像力をかき立てられていた点を考慮したとしても、このことに関して、ぼくが自分の空想の餌食^{えじき}になっていたとは、どうしても思えません。というのも、まるで変身の始まりであるかのように、この亡霊は何度か姿を変えたあと、(ぼくには考え直したかのように見えたのですが) 再び最初の姿に戻り、ぼくの方に向かって進み始めたからです。勇氣というよりはむしろ恐怖から本能的に、ぼくは手に持っていた火かき棒を亡霊の頭めがけて力まかせに投げつけました。そして、ガシャーンという物凄い音を聞きながら、自分の部屋に逃げ帰り、扉に二重に錠を下ろしました。それから一分ほどすると、あの恐ろしい裸足の男の階段を降りてくる音が再び聞こえ、その音は前回同様に玄関の広間で消えてしまったのでした。

前の晩の亡霊はぼくの空想^{ファンシー}による視覚上の幻で、単に食器棚の薄黒い輪郭^{たわむ}と戯れていただけかもしれません。また、あの恐ろしげな二つの目玉は逆さに置かれた茶碗にすぎなかったのかもしれませんが。しかし、いずれにせよ、ぼくは火かき棒を思い切り投げつけ、本当に奇抜な言葉を使えば、「二つの目玉をぶんなぐって一つ目小僧にしてやった」^(二六) のです。そのことは壊れて粉々になった茶道具一式が証明してくれます。これらの証拠によって、勇氣と元気を出そうと努めたのですが、どうしても駄目でした。こんなことでは、あの恐ろしい裸足の足音——階段の上から下までずっと降りながら、ひっそりした幽霊屋敷の隅々まで、しかも草木も眠る丑三つ^{うしみ}時に、時を定めて聞こえたドシン、ドシン、ドシンという足音——について、何かが分かったなどとはとても言えません。畜生め！ 何もかも腹立たしい。ぼくは意気消沈してしまい、夜になるのが怖くなりました。

夜の到来を不気味に告げるかのような雷鳴が聞こえ、気が滅入るような鬱陶しい土砂降りの雨となりました。街路はいつもより早く静かになり、十二時になる頃にはパラパラと侘び^わしく降る雨の音しか聞こえなくなりました。

ぼくはできるだけ居心地よくしていました。蠟燭も一本ではなく二本に火をつけ、絶対に床には就くまいと思い、蠟燭を手に持って今か今かと突撃に備えていました。というのは、もし屋敷の夜の無言^{しじま}を乱したものが肉眼で見ることのできるものであれば、是が非でも、この目で見てもと決めていたからです。ぼくはそわそわして神経質になったので、書物に関心を移そうとしましたが、やっぱり駄目でした。部屋の中を行ったり来たりし、軍楽や楽しい曲を口笛で順繰りに吹きながら、あの恐ろしい足音が聞こえはしまいかと、時おり耳を澄ませてみました。しばらくして腰を下ろし、もったいぶって打ち解けなさそうな顔をしたウィスキー・ボトルの四角いラベルを見つめていると、「フラナガン社の極上モルト・ウィスキー」という文字が、異様で恐ろしい想念——ぼくの頭の中で互いに追いかけてっこをしていた想念——の静かな伴走者のように見えてきました。

その間に周囲はさらに静かになり、さらに暗くなっていました。馬車のガタゴトという音とか遠くの方で喧嘩でもして騒いでいるような鈍い音とかが、聞こえるのではないかと耳を澄ませてみましたが、聞こえるのはただ、ダブリンの山々を越えて聞こえなくなった雷鳴に代わって、風が出てきた音だけでした。この大都市の真ん中で、ぼくと一緒にいるのは自然の女神だけ、

そして神のみぞ知るあるものだけだと次第に思うようになりました。ぼくの勇気は潮が引くように消えかかっていた。だが、今回は多くの人に威勢をつけてくれるパンチ酒のおかげで、ずんぐりして肉がたるんだような裸足で、再び階段をゆっくりと降りてくる例の足音に対して、なんとか凶太い神経と固い決意とで対処できそうな気がしました。

ぼくは蝋燭を手に取りましたが、震えていなかったと言うと嘘になります。部屋の床を横切るとき、その場しのぎに祈りの言葉を神様に発しようとしたのですが、聞き耳を立てるために急に立ち止まり、その言葉を途中でやめました。足音は相変わらず聞こえています。正直に言うと、勇気を奮い起こして扉を開くまで、その前で数秒ためらっていたのです。ですが、あの忌々しい音がやんだので、安心して階段の手すりの近くまで思い切って進み出ました。すると、ぼくが立っていた階段の一、二段下のあたりで、この世のものと思えない物体によって、床がドシンと強打されました。うわあ！ ぼくの視線が捕らえたものは、動いていないのですか！ その大きさはゴリアテ^(二七)の足ほどもあります。灰色っぽくて重量感があり、垂れ下がるような重い感じでズシンズシンと一段ずつ降りていました。ぼくが生きているのと同じくらい確かなことに、それは今まで見たことも想像したこともないほどの大きな灰色のネズミでした。

「口を開けているブタを見て胸がむかつく者もいれば、ネコを見ただけで気が狂う者もいる」^(二八)——シェイクスピアはそう言っています。このネズミを見たとき、ぼくは正気を失いそうになりました。というのは、笑われるかもしれませんが、この野郎は悪意に満ちた、まるで人間のような表情で、ぼくをジッと見ているぞと思ったからです。こいつがぎこちなく動きながら、ぼくの両足の間あたりから顔を上げたとき、例の肖像画に描かれていたあいつの悪魔のような目つきと忌々しい顔つきとが融合して、目の前のぶくぶく太ったネズミの顔になるのが見えました——間違いありません。あの時もそう感じましたし、今でもそれを憶えています。

ぼくは言葉では説明できないような嫌悪と恐怖を感じて、再び自分の部屋へ飛び込み、まるで向こう側にライオンでもいるかのように、かんぬきを扉にかけて錠を下ろしました。畜生め！ 肖像画も爺^{じい}もくたばってしまえ！ ぼくは心の中で、ネズミが——そうです、今しがた見たネズミめが、ネズミ野郎が——実は仮面をつけた悪魔で、何か夜の極悪非道な悪ふざけのために屋敷中をぶらぶら歩いているのだと思いました。

翌朝、ぼくは早起きして泥道をてくてくと歩いていました。他の用事はさておいても、とにかく有無を言わずにトムを呼び戻したかったので、手紙を投函しに行ったのです。ですが、家に戻ってみると、この留守にしていた学友^{がくゆう}^(二九)からの手紙が届いていて、そこには明日帰ってくる予定だと書いてありました。ぼくの喜びはいやが上にも増しました。なぜならば、うまい具合に新しい部屋がすでに見つかっていましたし、昨晚の半ば馬鹿げた、半ば恐ろしい出来事を考えると、今回の転居と親友の帰宅は特に嬉しいことに思えたからです。

その晩、ぼくはディジェス通り^(三〇)に借りた新しい住居に何の準備もせずに泊まって、翌朝は朝食のために幽霊屋敷に戻りました。トムは帰ってきたら即座に、この屋敷へやって来るに違いないと思ったのです。

ぼくの思ったとおり——彼はやって来ました。彼の最初の質問は転居の主たる目的について

だったような気がします。

「ありがたい！」準備がすべて整ったと聞くや、彼は熱弁を振るうかのように言いました。「君のためにも嬉しいよ。ぼくの方は、どんな考慮すべきことがあろうと、こんなひどい古屋敷では一晩だって過ごす気になれないよ」

「古屋敷なんて糞くらえだ！」ぼくは恐怖と嫌悪が純粹に混ざったような声で叫びました。「ここに住むようになってからってもの、ひと時だって楽しかったことはないじゃないか」と話を続けて、ついでに例のぶくぶく膨れたネズミの出来事を話してやりました。

「まあ、それだけのことなら」従兄のトムは、このことを問題にしないで無視するふりをしながら、言いました。「あまり大して気にならないな、ぼくは」

「ああ、でも、あの目つき——あの顔つきはね、トム」ぼくも負けずに言い返しました。「君だってあれを見ていたら、見かけとは違った何かがあるような、そんな気になっていたはずだぞ」

「そんな場合、一番いい悪魔払いきょうじんは強靱な猫を飼うことじゃないかって、いつもぼくは思っているぜ」腹の立つような含み笑いを浮かべながら、彼はそう言いました。

「そんなことはいいから、君自身の体験を聞こうじゃないか」ぼくも辛辣な言葉を返しました。

このように挑発されて、トムは不安げに周囲を見ましたが、それはぼくが彼の非常に不快な記憶を呼び起こしたからに他なりません。

「じゃあ、聞いてもらおうか、ディック。ちゃんと話すからさ。畜生め！でも、こんな所で話していると、すごく気分が悪くなりそうだ。もっとも、ぼくたちは頑丈な若者だし、今なら幽霊だって手出しなんかできないだろうがね」

彼は冗談のような言い方をしましたが、それは真剣に計画されてのことだったと思います。その時ちょうど、ぼくたちの女中（三）が部屋の片隅にいて、ひび模様の入ったデルフト焼き（三）の茶器類やディナー用の食器類を籠に詰めていました。やがて彼女はその作業を中断し、口と目を大きく開いたまま、こちらの話に耳を熱心に傾けるようになりました。トムが体験したことは、およそ次のような言葉で語るができます——

「三回も見ただぞ、ディック。確かに三回だった。あいつがぼくに何かひどい危害を加えるつもりだったことは間違いない。実際、ぼくは危なかったんだ。途轍もなくね。だって、すぐさま逃げたからよかったものの、たとえ他に何も起こらなかったとしても、いざという時にきっと理性が働かなくなっていたらどうからね。なんとか逃げ出せたのは、ホントにありがたいことだった。

この忌まわしい騒動が始まった最初の夜、ぼくは寝る準備をしてから、あの場所をふさぐ古ベッドに横になっていたんだ。考えるのもいやだなあ。蠟燭の火を消して、寝てしまったように静かにしていたんだが、目はパッチリと覚めていた。でも、ちょっとしたことで胸騒ぎがしたけど、思考経路は楽しく愉快なことの方に向いていたんだよ。

いずれにせよ、あそこで——寝室の向こう側にある、例の呪わしい、暗い壁龕へきがんで——怪しい

物音が聞こえるぞと思ったのは、夜中の二時だったはずだ。まるで誰かがゆっくりと絞首索を床の上で引きずり、持ち上げて、ぐるぐると巻き、またゆっくりと床の上に落とすような、そんな音だった。一度か二度ぼくは起き上がったけど、何も見えなかったよ。それで、壁板の裏にいるネズミどもに違いないって思ったわけさ。好奇心はあったけど、深刻な感じもしなかったのよ。数分後には監視するのをやめちゃったよ。

妙な話だが、こんな状態で横になっていると、最初は超自然的なことなんかには気づきもしなかったけど、突然ある老人が——かなり^{かっぶく}恰幅がよくて、鹿毛色の化粧着のようなものをまとい、頭には黒い帽子^(三三)をかぶった、がっしりした老人が——ゆっくりとした堅苦しい動きで、寝室の向こう側にある壁龕から斜めの方向に姿を現わし、ぼくのベッドの足もとを横切って、左側の物置部屋に入るのが見えたんだ。あいつは脇の下に何か持っていて、頭を片方に少し傾けていた。そして、その顔が見えたとき、うわあ！」

ここでトムはしばらく話をやめ、それからまた話を続けました——

「あの恐ろしい表情は死んでも忘れられんぞ。だけど、あれを見て老人の実態が明らかになったよ。あいつは右も左も向かず、ぼくのそばを真っ直ぐ横切って、そのままベッドの枕もとの近くにあった物置部屋に入って行ったのさ。

この何とも言えない、恐ろしい死と罪の化身が横切っている間、ぼくは自分が死体と化したみたいに、口も体も動かす力がなくなったような気がしたよ。あいつが姿を消したあと何時間も、恐ろしさのあまり力が抜けてしまって、動けなくなっちゃったのさ。翌朝、ぼくは明るくなるや、勇気を出して部屋を調べてみたよ。特に、恐ろしい侵入者が通ったように思える場所をね。でもね、誰かがそこを通ったことを示すような跡は全然なかった。物置部屋の床に散らばっていたガラクタ類を第三者が動かしたような、そんな痕跡は一つもなかったんだ。

それから、次第に少しずつ力を取り戻したんだけど、疲労困憊してしまい、とうとう熱っぽい睡魔に襲われちゃった。それで、起きてくるのが遅くなったんだ。君が例の肖像画について見た夢のことで意気消沈しているのに気づいたんで、今では確信していることだけど、ぼくにも肖像画のモデルがハッキリと分かったから、自分が見た幻のことを君に話したくなかったのさ。実際、すべて幻覚だったんだと自分に言い聞かせようとしていたし、前の晩に頭に焼きつけられた^い忌まわしいイメージを、また強烈によみがえらせるのはいやだったんだ。つまり、自分が味わった苦しみを君に一つずつ詳しく述べることで、これまでずっと懐疑的だった自分の立場を危うくしたりしたくなかったんだよ。

次の夜、幽霊の出る自分の部屋に行って、同じベッドで静かに休むのは、実のところ度胸が少し必要だったね——トムの話は続きました。「そうするのに少し体が震えちゃったけど、別に恥ずかしいことじゃないさ。ほんのちょっとしたことでも、それが十分な刺激になって、間違いなくパニックに陥っていたはずだからね。でも、この夜は何事もなく、静かに過ぎ去ったよ。次の夜もまたそうだったし、さらに次の二晩か三晩も同じだった。次第に自信が出てきてね、ぼくは分光による幻覚^(三四)の理論の方を信じるぞって、次第にそう思うようになったよ。もともと、その理論によって自分の確信に乗じ、すべて幻覚なんだと思おうとしても、最初の

うちは失敗したけどね。

実際、この亡霊はどこから見ても変わり種だったよ。こっちの存在なんか気にも留めず、スーッと部屋を横切って行ったんだからね。ぼくもあいつの邪魔をしなかったし、あいつもぼくには用がなかったみたいだ。だったら、わざわざ目に見える姿で寝室を横切るようなことをして、いったい何になると言うんだ？ もちろん、人間の五感で識別できるような姿で寝室を通ることなく、あの壁龕へきがんに入り込んだ時みたいに、今回もわざわざ寝室を通って行かずに、たやすく物置部屋に入ることができたはずなんだよ。おまけに、いったい全体どうして、あいつの姿がぼくに見えたんだろうか？ 真っ暗な夜だったし、蝋燭も暖炉も火はついていなかったのに、ぼくには色合いも輪郭も人間の姿以上にハッキリと見えたんだぞ。強硬症患者(三五)が見るような夢であれば、すべて説明がつくんだけどね。で、ぼくが出した結論は何かというと、あれはやはり夢だったということだ。

狂言癖に見られる最も顕著な現象の一つは、だます相手としては最も考えられない人間に対して、すなわち自分自身に対して、故意的に嘘をつく回数が非常に多いということだよ。このことで、君に言う必要もないけど、ディック、要するにぼくは自分に嘘をついていたくせに、実に不快なペテン師である自分自身の言葉は、少しも信じていなかったんだ。だけど、ぼくは人間の習性として自分をだまし続けてしまった。単に同じことを繰り返すことで相手を疲れさせ、結局は信じさせてしまうような粘り強いホラ吹きやサギ師みたいにね。で、ぼくはうまく自分を言いくるめ、やっぱり幽霊については懐疑論者なんだと思って、悦に入っていたってわけさ。

あいつが再び現われることはなかったよ。それは確かに慰めになった。結局、あいつとあの奇妙な古着や異様な顔つきが、気になっていたんだろうか？ そんなことあるもんか！ あいつの姿を見ても平気だったし、いい話のネタを一つもう儲けたわけだからな。というわけで、ぼくはベッドに転がり込んで蝋燭を消し、裏の路地で聞こえる酔っ払った夫婦の喧嘩に元気づけられて、ぐっすり寝ちゃったよ。

ところが、この深い眠りから、ハッとして目が覚めたんだ。恐ろしい夢を見たからなんだけど、どんな夢だったかは思い出せない。心臓が激しく鼓動し、ドギマギしちゃって、熱っぽい感じになってね。ぼくはベッドで身を起こしたまま部屋を見渡したよ。カーテンのない窓を通して、月の光が洪水のように一杯あふれて射し込んでいたけど、何もかも前に見たとおりで、裏の路地で聞こえていた夫婦喧嘩は、ぼくにとって不運なことに鎮まっていた。でもね、陽気な男が一人、家路に就きながら、「マーフィー・デラニー」(三六)という当時人気のあった滑稽な歌を口ずさんでいるのが聞こえたよ。この気晴らしを利用して、ぼくは顔を暖炉の方に向けながら、目を閉じて再び横になり、聞こえてくる歌以外のことは考えないようにしたんだ。だけど、その歌も次第に遠ざかって聞こえなくなっちゃった。

元気一杯の剽軽者ひょうきんもの、マーフィー・デラニー
酒を一杯飲むのに、行き先は場末の居酒屋

樽酒一杯詰め込み、出てきたときは千鳥足
元気一杯の白爪草、酔いつぶれて猪突猛進^(三七)

歌っていた男の状態も、おそらく歌の主人公と似たりよったりだったと思うけど、この男がすぐに遠ざかってしまい、ぼくの耳を楽しませてくれることもなくなっちゃった。歌声が消えたんで、うつらうつらしてしまっただけ、それはさわやかな眠りでも深い眠りでもなかったよ。どういうわけか、その歌が頭の中に残ってしまっただけ、ぼくは当てもなくさまよいながら、尊敬すべき同郷のマーフィー・デラニーと同じ経験をするようになったんだ。つまり、「場末の居酒屋」から出てくるや、そのまま川にドボンと落っこちて、そのあと釣り上げられて検死陪審員たちに「審理」されたまではよかったが、土左衛門は「扉の釘みてえに死んでしまった、はい、一巻の終わりだよ」^(三八)って、みんなヤブ医者からそう聞かされ、そのとおりの評決を下ししまった。ところが、その時に土左衛門が意識を取り戻したんで、陪審団と検死官との間に押し問答、というか大激論が勃発し、元気一杯、楽しさ一杯の中で、歌の締めくくりになったってわけさ。

この流行歌の一本調子にうんざりしながらも、文字どおり最後の一行までゆっくりと進んで行き、そしてまた初めから——意識が朦朧^{もうろう}として苦しい状態だったんで、どのくらい続いたかなんて分かりやしない。でもね、最後の最後には、気がつく、「扉の釘みてえに死んでしまった、はい、一巻の終わりだよ」って、ぼくはぶつぶつ言っていたよ。ぼくの内なる、何かもう一つの声みたいなものが、非常にかすかな、しかし鋭い調子で「死んだ！ 死んだ！ 死んでしまった！ 主の慈悲があらんことを！」って言っているようで、ぼくはたちまち目が覚めちまい、枕もとからすぐ目の前を見つめていたってわけさ。

それで——信じるかい、ディック？——あの呪わしい人物がすぐ前に立ち、ベッドから二ヤード^(三九)と離れていない所で、石のように冷たい、悪魔みたいな顔をして、ぼくをジッと見ていたなんて」

ここでトムは話をやめて顔から冷や汗を拭きました。ぼくは気分がひどく悪くなり、女中の顔はトムと同じように真っ青でした。ハラハラドキドキの体験をした現場で、ぼくたちは額を寄せ合っていたので、家の外が真昼のように明るくなり、往来の雑踏が始まったことを皆一緒に喜んでいたに違いありません。

「ハッキリと見えたのは三秒ほどだった。それからぼやけてしまったが、ずいぶんと長い間、それまであいつが立っていた場所、つまりぼくと壁の間だけ、そこに黒ずんだ蒸気の柱みたいなものが残っていたよ。あいつはまだそこにいるはずだと思ったね。でも、かなり時間が経ってから、この幻影も消えちゃった。それで、ぼくは衣類を下の玄関の広間へ持って行き、そこで扉を半分ほど開けたままにして着替えをし、それから往来へ出て行って、ずっと街中を歩いていったってわけさ。朝になって帰宅した時は、不安と疲労で見るも無惨な状態だったよ。ぼくは馬鹿だった。どうしてそんなに取り乱してしまったのか、恥ずかしくて君に話せなかったんだから。君に笑われると思ったんだよ。特に、ぼくはいつも哲学めいたことを話し、君の幽

霊話を軽蔑していたからな。結局、君に話せば容赦なく逆襲されるだろうと思い、それでぼくの怪談は自分の胸の内にしまっていたというわけさ。

ところで、ディック、この最後の体験以降、ぼくはもう夜は自分の部屋へ戻らなくなったんだ。ホントの話なんだけど、信じてくれないだろうね。君が自分のベッドに戻ったあと、ぼくはしばらく居間で起きていて、それから忍び足で玄関の広間の扉まで行き、そのまま外出して、「ロビン・フッド」亭^(四〇)で最後の客が帰るまでジッとしていたものさ。そのあとは、番兵よろしく朝まで街路をゆっくりと歩きながら、夜の時間を過ごしていたんだよ。

結局、一週間以上もベッドの上で寝ることはなかった。「ロビン・フッド」亭の長い腰かけで居眠りすることもあれば、日中に椅子に座ったまま昼寝をすることもあったけど、いわゆる普通の睡眠はまったく取れなかったよ。

別の家に移ろうと決意を固めていたのに、移る理由については君に話す気になれず、なぜか一日また一日と、話すのを延ばしてしまったわけだ。こんなふうにもたもたしていると、ぼくの生活は刻一刻と、警察に追われる凶悪犯の生活みたいに、惨めなものになってしまったよ。こうした悲惨な生活ぶり、完全に具合が悪くなっちゃったのさ。

ある日の午後だったか、ぼくは一時間でいいから君のベッドでぐっすり寝てやろうと思った。自分のベッドはいやだったんで、あの不吉な部屋には二度と入らなかったよ。でも、ぼくが夜その部屋にいないという秘密を女中のマーサに知られるといけなから、ベッドを乱すために毎日こっそりと忍び込んでいたんだがね。

運の悪いことに、君は部屋に錠を下ろして、鍵を持って行ってしまった。それで仕方なく、いつものように寝具を乱して、ベッドで寝ていたと思えるようにするために、自分の部屋へ行ってみたよ。ところが、いろんな状況が重なり合って、その晩ぼくが体験することになる恐ろしい事件が起こっちゃったんだ。まず、ぼくは疲労困憊して、死ぬほど眠かった。それから、この極端な疲労が神経に及ぼす影響たるや、さながら麻薬のそれに似ていて、その頃にはぼくの習慣となっていた興奮が伴うような恐怖を——そんな状態でなければ、おそらく感じていたはずの恐怖を——感じなくなっちゃっていた。でもね、窓が少し開いていて、部屋には心地よい新鮮な空気が充満して、さらには楽しげな陽光で部屋は実に心地よくなっていたよ。こんな場合にだよ、疲れていたぼくが一時間ほど昼寝をせずに済むわけじゃないか。あたり一面に賑やかな生活の雑音が響き渡り、部屋の隅々まで現実世界の明るい陽光が満ちていたんだからね。

ぼくはほとんど抵抗できない睡魔に——不安を抑えながらも——負けてしまい、コートを脱いで幅広のネクタイをゆるめただけで、倒れ込んでしまった。絶対に三十分以上は昼寝をしないぞって自分に言い聞かせ、ふかふかのベッドと布団と長枕を久しぶりに楽しんだっていうわけさ。

あれはひどく狡猾なやつだった。あの悪魔め、頭がボーッとしたままで寝る準備をしていたぼくに、注意を払っていたに違いない、絶対にね。寝不足で心身とも疲れ切って、優に一週間の睡眠が滞っていたのに、そんな状態でも三十分という時間限定の昼寝が可能だと思うなん

て、ぼくはホントに間抜けだったよ。結局、死んだように、長く、夢も見ることなく寝ていたんだからね。

突然、ぼくは静かに、しかし完全に目が覚めたよ。それはハッとしたからでも何か恐怖を感じたからでもないんだ。もちろん君も憶えているだろうが、それは夜中もかなり更けた頃、そう二時頃だったと思うよ。長時間ぐっすり眠ることで生理的欲求が満たされた場合、こんなふうに人は突然、静かに、完全に目を覚ますものさ。

すると、暖炉の近くにある、あのガタピシの古い長椅子に、一人の男が座っていたよ。背中をぼくの方に向けていたけど、見間違えるなんてことはあるはずがない。あいつはゆっくりと振り返ると、うわあ！ 悪意と絶望からなる忌々しい表情を浮かべた冷酷な顔で、さも満足そうにぼくを眺めていやがった。その時はもう、あいつがぼくの存在を意識していることや、悪魔のような怨恨に駆り立てられていることは、疑いようがなかったよ。だって、立ち上がって、ベッドの脇まで近づいてきたんだからね。あいつはロープの先端を自分の首に巻き、もう一方の先端をぐるぐると巻いて、それを手にしっかりと握っていやがった。

でもね、この恐ろしい危機に際して、ぼくは守護天使から勇気を与えてもらったんだ。あの恐るべき亡霊に見つめられたまま、数秒間ぼくが立ちすくんでいると、あいつはベッドの近くにやって来て、今にもベッドの上に乗ろうに見えた。その瞬間、ぼくは亡霊と反対側の床にベッドから降りたけど、次の瞬間には、どんなふうにかは憶えていないが、玄関の広間に来ていたよ。

だがね、ぼくの金縛りはまだ解けていなかった。まだ死の影の谷^(四一)を通り抜けていなかったのさ。呪わしい幽霊はまだぼくの前の、階段の手すりの近くに立って、少し身をかがめ、ロープの端を自分の首に巻いたまま、もう一方の端で輪を作って、ぼくの首に投げるみたいに手に持っていやがった。こんなふうに悪意に満ちたパントマイムを演じながら、あいつは実にみだらな、何とも言えないほど恐ろしい笑みを浮かべていたんで、ぼくは正気を失いそうだったよ。実際に見て憶えているのはそれだけだ。気がつくやうに君の部屋にいたっていうわけさ。

ディック、ぼくは見事に脱出できたんだぞ。そのことについては疑問の余地がない。この脱出で、ぼくは生きていくかぎり、慈悲深い神に感謝するからな。こんなやつと向かい合って立つということが、生身の人間にとってどういうことか、同じような恐ろしい経験をした者にしか想像できないだろうよ。ディック、ディック、ぼくは死の影に襲われ、血と骨の髄が凍る思いをしたんだぞ。もう二度と今までのような自分ではいられない。二度とね、ディック。絶対に！」

ぼくたちの——前にも言ったように、五十二歳になる——女中は、トムが話を続けている間は手を休め、あんぐりと口を開けたまま、黒いビーズのような小さい目玉の上の額にハの字を寄せ、時おり肩越しに盗み見しながら、少しずつ忍び寄っていました。それで、ぼくたちが気づいた時には、すぐ背後に立っていたのです。話の合間に、彼女は小声で真剣に何度も論評を加えていましたが、そうした論評や叫び声については、話を簡潔にするために省略させていただきます。

「その噂についちゃ何べんも聞いたんじゃが」そのとき女中は言いました。「オラは今の今まで信じやせんかったんじゃ。じゃがな、今となつちや、信じねえわけにはいくめえ。おっかさんは裏手の路地に住んどるんじゃが、ホンマに変ちくりんな話をいろいろ知つとるけえ、その噂も話してくれるはずじゃ。じゃがな、あの裏側の部屋で寝るなんて、とんでもねえこった。おっかさんは、キリスト教徒たるもんが、あんな部屋で夜を過ごすのはもちろんじゃが、昼間だってオラが出入りするの、いやがとつたんじゃよ。おっかさんの話じゃ、あの部屋は絶対あの人が使つとつた部屋に間違いねえってことじゃ」

「誰の部屋だって？」ぼくたちは同時に尋ねました。

「まあ、あの人の——老判事の——ハロックス判事の部屋に決まっとるじゃねえか。どうか神様、あの人の霊を休ませてくださいませまし！」こう彼女は言って、不安そうに周囲を見渡しました。

ぼくは「アーメン！」とつぶやきました。「でも、あそこで死んだのかい、その老判事は？」

「あそこで死んだのかじゃって？ いやいや、あそこでっていうわけじゃねえ。確か、あの爺さんが首を吊ったのは、階段の手すり越しじゃなかったかね？ ああ、くわばらくわばら！ 切断された縄跳びの取つてが見つかったのは、あの引^{アル}込^{ミー}のあたりじゃなかったかね？ ナイフについちゃ、うわあ、首を吊るのに縄跳びのヒモを結びつけた場所じゃなかったかね？ 縄跳びのヒモの持ち主は家政婦の娘だって、おっかさんはよく言つとりましたよ。それからってもの、娘っ子がすくすく育つことはなかったそうじゃ。寝てる時に突然ガバツと起きて、悪^ムや恐怖に襲われちまったんじゃろうかね。よく夜中に金切り声で叫んどつたそうじゃ。老判事の幽霊が娘っ子を苦しめとるんじゃろうってことじゃった。首の折れ曲がった爺さんが出てこんように、娘っ子は喚^{わめ}いたり叫んだりしとつたそうじゃ。それからってもの、「ああ、旦那様、旦那様があたいに足をドンドン鳴らして、おいでおいでしとる！ かあさーん、あたいを行かさんで、ああ！」って、金切り声で叫んどつたそうじゃ。で、かわいそうに、とうとう娘っ子は死んじまってね。医者どもの話じゃ、原因は水頭症^(四二)だったそうじゃよ。そのくれえしか分からなかったんじゃろうね」

「こういったことが起こつたのは、どのくらい昔のことなんだね？」と、ぼくは尋ねました。

「まあ、どうしてオラなんかに分かるんじゃね？」というのが彼女の返事でした。「じゃがな、ずいぶんと昔のことに違いねえ。だつてよ、歯が一本もねえのにパイプを口にくわえてた、その家政婦はもう婆さんじゃつたし、オラのおっかさんが最初に結婚した時にゃ、もう八十を超えとつたそうじゃからね。老判事がアツケなく最期を遂げた時にゃ、その婆さんはホンマに胸がふくよかで、立派な服を着てたそうじゃ。それに実際の話、オラのおっかさんも今では八十に手が届きかけとるからな。あんなふう^に娘っ子を恐怖で死なせただけでもヒデエことじゃが、さらにヒデエことに、あの冷酷な人でなしは、たいていの連中から、こんなふう^に思われとつたんじゃよ。つまり、おっかさんが言つとつたんじゃが、あの哀れな娘っ子は老判事の子供だったんじゃねえかって。誰に聞いたって、あいつはあらゆる点で悪党じゃつたし、アイルランドの国でとびきり有名な首吊り判事だったんじゃからね」

「あの部屋で寝るのが危険なことは分かったけど、そこから判断すると、あそこでは他の人たちにも幽霊が現われたという、そんな噂もあるんだろうね？」と、ぼくは尋ねました。

「そうじゃね、実際いろいろ取り沙汰されとったんじゃけど——確かに、どれも変ちくりんな噂話じゃったよ」彼女は答えるのに気が進まない様子でした。「もちろん、噂話がねえはずはねえ。二十年以上ずっと、あの人が寝てたのは、あの二階の部屋じゃなかったかね。生前たかさんの人間にしていたように、あの人は最後に自分で自分を処刑しちゃったんじゃが、それに使ったロープが準備されとったのは、あのアルコール^{なき}じゃなかったかね。死んじまってから、亡骸^{がら}は同じベッドに横たわったまま、そこで棺桶に入れられちまって、検死が済んだあと、そこからペテロ教会の墓地まで運ばれたんじゃなかったかね。じゃがな、ニコラス・スペイトという人が、いとも簡単に厄介なことになっちゃったことについちゃ、奇妙な話が幾つもあるよ。全部おっかさんが知るとるよ」

「それで、そのニコラス・スペイトについては、何て言われていたんだね？」と、ぼくは尋ねました。

「ああ、それについちゃ、わけなく話せるよ」

確かに彼女はとても不思議な話をしてくれました。ぼくはひどく好奇心をそそられたので、この機会を捕らえて彼女の故老の母親を訪ね、非常に興味深いことを詳しく聞き出しました。実際、ぼくが聞いた話を皆さんに語りたいのは山々ですが、筆を持つ指が疲れてしまったので、先延ばしにせざるを得ません。しかし、皆さんがお聞きになりたいのであれば、ぼくはまたの機会に最善を尽くしたいと思います。

皆さんに語ることはしませんが、この不思議な話を聞いたあとで、真偽のほどはどうであれ、邪悪な老判事が死んでからずっと、この屋敷がたびたび幽霊の訪問を受けていた点について、ぼくたちは女中に幾つか質問をしてみました。

「ここに住んだ人たちはみんな、不幸な目にあったんじゃよ」と、女中は話してくれました。「ここじゃな、いつも予想外の事故が起こったり、人が急に死んだりして、みんな短命だったそうじゃ。ここを最初に借りたのは、ある家族で——名前は忘れちゃったけど——ともかく、二人の若い娘さんと父親が住んでいたそうじゃ。父親の方は六十歳ぐれえじゃったかね。あの年齢じゃ滅多に見られんほど、がっしりした健康そうな紳士だったそうじゃ。で、父親はこの不吉な家の裏側の部屋で寝とったわけじゃ。ああ神様、オラたちに危害が及びませんように！案の定、ある朝のことじゃったが、父親は体がベッドから半分はみ出してな、床の近くまでぶら下がって死んでたんじゃよ。頭はブディングみてえに膨れちまい、リンボクの実^(四三)みてえに真っ黒になっちゃってね。どうやら原因は発作だったようじゃ。腐った鯖^{さば}みてえに死んじまってたんじゃ。本人は何が原因だか分からなかったじゃろうが、年とった連中はみんな、この父親を恐怖で発狂させて殺しちゃったのは、老判事以外にや考えられんと言とったよ。いやはや、とんでもねえことじゃ！

しばらくしてじゃが、今度はな、ある年輩の裕福な御婦人が屋敷を借りましたんじゃ。その人がどの部屋で寝たかは知らんのじゃが、ひとり住まいじゃった。いずれにせよ、ある朝のこ

とじゃが、召使たちが早めに仕事に降りて行ったそうじゃ。じゃが、その人は廊下の階段に座って、ぶるぶる震えながら、まったく気が狂っちゃって、ひとりごとを言っとったそうじゃ。「私を行かさないで。彼を待つと約束したのですから」って言うばかりで、その人の召使たちも友だちも、そのあとずっと何も聞き出せんかったということじゃ。「彼」っていうのが誰のことか、その御婦人の言葉からは理解できんかったんじゃが、この古い屋敷のことを知っとる人間で、その人の身に起こったことの意味が分からん者は、もちろん一人もおらんかったじゃろうね。

それからまたのち、この屋敷が下宿の形で貸し出された時じゃけど、ミッキー・バーンという人が、奥さんと三人の幼い子供と一緒に、例の部屋を借りましたんじゃ。確かにオラは聞いたんじゃよ。バーンの奥さんは、子供たちがよく夜中にベッドで体を持ち上げられとったって、自分で言っとったんじゃから。どんな力で持ち上げられとったんか、それは分からんかったそうじゃがね。それから、子供たちは一時間ごとにビクツとしてな、金切り声をあげとったそうじゃ。こいつは死んじまった家政婦の娘っ子と同じじゃねえか。で、とうとうある晩のこと、かわいそうにミッキーが（この旦那は時々こういうことがあったんじゃが）一杯ひっかけたところ、何とまあ、真夜中に階段で物音が聞こえたような気がしたって言うじゃねえか。酒が入とったこともあったんじゃろうが、どうしたのか気になって、自分の目で確かめに行かねえことにゃ満足できんかったようじゃ。で、結局、奥さんが最後に聞いたのは、「ああ神様！」っていう旦那が叫んだ言葉だけじゃったが、そのあと何かが転落したようで、その音で屋敷全体が揺れたそうじゃよ。案の定、旦那は入り口の部屋の下に続く階段に倒れとったそうじゃが、どうやら欄干を飛び越えて頭から落ちたみてえで、くゝの字に首が折れとったということじゃ」
そのあと女中は付け加えて言いました――

「ちょっと裏の路地まで行って、ジョー・ギャビーをこちらにやりますから、茶道具の残りを荷造りさせて、身のまわりの品をすべて新しい下宿に運ばせてくださいませ」

それで、ぼくたちは全員で颯爽^{さつそう}と出て行きました。この不吉な屋敷の敷居をまたぐのも、これが最後かと思うと、全員が楽に呼吸できるようになっていたことは言うまでもありません。

さて、小説というのは、主人公をその珍しい経験を通してだけでなく、その世界とかなり距離を置いた所からも見るものですが、そうした小説の領域における昔からの慣例に従って、ぼくはまだ多くのことを書き足すことができます。厳格な意味でのロマンスに登場する血と肉と骨を持った生身の主人公と普通の小説の作者との関係は、この煉瓦と木とモルタルでできた古い屋敷とその実話を記録する小生との関係と同じです。そのことに皆さんは気がつかれたに違いありません。従いまして、ぼくは義務の命ずるままに、この古い屋敷に最後に降りかかった災難を語ることにしましょう。それは簡単に言えば、こういうことです。ぼくの話が終わったあと、二年間ほど自称ドゥールシュトールフ男爵という偽医者が屋敷を借りていたようで、彼はゾツとするような得体のしれないものをブランデー漬けにして、その瓶^{びん}を客間の窓にたくさん並べ、よくあるような虚偽の誇大広告を新聞にたくさん出していたそうです。この紳士は禁酒を美德の一つと考えていなかったようで、ある晩のこと葡萄酒に酔いつぶれ、こともあろう

にベッドのカーテンに火をつけてしまったのです。自分の体は一部を火傷^{やけど}ただけで済みましたが、屋敷の方はすべて焼けてしまいました。のちに屋敷は再建され、しばらくは葬儀屋が店を構えていたそうです。

これで、ぼくは自分とトムの体験談について、幾つかの重要な付随事項と一緒に、話し終えたこととなります。お約束を果たしましたので、皆さんには「お休みなさい、よい夢を」と申し上げることにいたしましょう。

【訳注】

(一) ローマの詩人ウェルギリウス (Vergil, 70-19B.C.) の『アエネーイス』 (*The Aeneid*, c.29-19.B.C.) の第四巻第二九三行 (*mollissima fandi tempora*) からの引用。

(二) 二人が勉強していたのはダブリン大学トリニティ・カレッジ医学部。大学の創立は一五九二年で、医学部の開設は一七一一一年。

(三) ヘンリー八世はローマ教皇との長い争いの末、支配下から独立して、自ら英国国教会 (Anglican Church) の首長となり、教会を国家に従属させた。教義や聖職者の階級などにカトリックの要素を残している反面、プロテスタントの宗教改革の多くの面も含んでいる。

(四) ダブリンの中央を東西に流れるリフィー川 (Liffey) の南側に隣接するダブリン城の南東角から南に走る通り。この通りの北東にトリニティ・カレッジがある。『アイリッシュ・メロディーズ』で有名な詩人トマス・ムア (Thomas Moore, 1779-1852) は十二番地で生まれた。

(五) 現在のカレッジ・クリーン (トリニティ・カレッジの西側) にある大邸宅で、ヘンリー八世によって解体された女子修道院の跡地に建てられ、十七世紀にはアイルランド議会が置かれていた。

(六) ジェイムズ二世 (一六三三～一七〇一) は一六八五年の兄王の死後に王位に就いたが、絶対王制の強化とカトリック優遇政策によって議会と対立し、一六八八年に王位を追われてフランスに亡命した。

(七) 一六八七～八八年にダブリン市長を務めたハケット (Sir Thomas Hackett) は、プロテスタントに対する残虐で野蛮な行為で知られ、彼らの多くが地所を捨ててイングランドに逃れた。

(八) 建物の軒などを支えるため、壁の上方を壁面に沿って突出させた部分 (cornices)。

(九) 変死の疑いのある死体を調査し、検死法廷において陪審員とともに死因を審理するもので、定員は十二名。

(十) ポルトガル原産の甘口ワインで、多くは深紅色。

(十一) 本来は冬至前後の天候の穏やかな二週間を意味し、昔はハルシオン (ギリシャ神話上の鳥) が巣ごもりをすると考えられた。一般には平穏な時代、古きよき時代、黄金時代を意味する。

(十二) 西洋建築で彫像などを置くために壁面に作られた窪み。または壁が引っ込んで陰になった空間。

(十三) 『マクベス』第五幕第五場で、連続する恐怖に襲われ、その味を忘れてしまったマクベスが、夫人の死に際して発する言葉。

(十四) 劇の途中・終わりで演技者がそれぞれの位置で一瞬動作を止めること。

(十五) 英国の桂冠詩人 (一八一三～四三)、ロバート・サウジー (Robert Southey, 1774-1843) が一七九

九年に出版した『詩集』に収められた「パークレーの老婆」(The Old Woman of Berkeley)からの引用。

(十六) 一八四二年にウィーン大学のロキタンスキー (Karl Freiherr von Rokitansky, 1804-78) が『病理学的解剖学』を発表して、唯物論が医学を席卷するようになった。

(十七) 神の啓示を認め、これに基づく宗教 (revealed religion)。反対は自然宗教で、奇跡や啓示を認めず、人間の理性と経験を基にする。

(十八) ドイツの医学者メスメル (Franz Anton Mesmer, 1734-1815) は動物磁気 (animal magnetism) による催眠術を初めて医療に用いた。

(十九) 動植物の電気現象を研究する生物学の一部門。

(二〇) 十六世紀の有名な船乗り、貿易業者、女海賊、政治家 (本名 Grace O'Malley)。父親が貿易船を持つアイルランドの西海岸で育ち、一族の長となって活躍し、身内の者がイングランドに捕らわれた時には、エリザベス一世に釈放を嘆願した女丈夫。

(二一) ウィスキーにジュース、ソーダ、水、ミルクなどを混ぜ、砂糖・香料などで味をつけた飲料。

(二二) 英国の詩人・劇作家ダヴェナント (William Davenant, 1606-68) による『マクベス』の一六六四年の翻案 (第五幕) にある魔女の親玉ヘカティ (Hecate) の歌への言及。

(二三) ナポレオン戦争 (一八〇五～一五年) の時にイギリスで流行した歌 (Brandy-O) の一節。

(二四) 英国の政治・文芸を中心とした評論週刊誌。前身はスティール (Richard Steele, 1672-1729) とアディソン (Joseph Addison, 1672-1719) が主宰した『スペクテーター』(The Spectator, 1711-12, 1714) で、二人の共同執筆で当時のジャーナリズムの地位を確立した。

(二五) 五十人分に匹敵する声量を持っていたというトロイ戦争で活躍した伝令使。

(二六) 英国の冒険小説家、特に少年小説の分野で知られるバランタイン (Robert Michael Ballantyne, 1825-94) の『変わりやすい風』(Shifting Winds, 1866) 第十四章からの引用。

(二七) ペリシテ人の巨人戦士。ダヴィデによって殺された。「サムエル記上」第十七章第四八～五一節を参照。

(二八) 『ヴェニス商人』に登場するユダヤ人高利貸し、シャイロックの第四幕第一場の台詞。

(二九) もとオックスフォード大学の学生俗語で、通例は男同士の同室の友 (chum < chamber mate)。

(三〇) オンジエ通りの東側に平行して走る短い通り。五番地に彫刻家ホーガン (John Hogan, 1800-58) が住んでいた。

(三一) ヘーベはギリシャ神話のゼウスとヘラとの娘で、ヘーラクレスの妻。初めはオリンポス山で神々の酒宴の給仕であった。

(三二) 十五世紀末頃からオランダで焼かれ始めた軟質の^{すずゆう}錫釉陶器に似せた英国産の陶器。

(三三) 死刑宣告のとき裁判官は黒い帽子 (小さな四角の布) を頭に載せた。

(三四) ディケンズ「殺人裁判」の訳注 (三) を参照。

(三五) 強硬症は、外部から与えられた姿勢のまま感覚がなくなり、筋肉が硬直した状態が続くのが特徴。

(三六) 「黒い瞳のスーザン」(Black-Eye'd Susan) など、海の歌で有名な英国の歌謡作家、ディブディン (Charles Dibdin, 1745-1814) の歌とされ、一八二八年の歌謡集に収録されている。

(三七) シャムロック (shamrock) はアイルランドの国章に用いられる各種のマメ科植物で、聖パトリックの祭日 (三月十七日) に飾る。シャムロックはウィスキーとスタウト (ビール) で割った飲み物の意味もある。

(三八) 昔ドアの強化や装飾に打ちつけた大きな釘 (door-nail) で、「死んだ」 (dead) と頭韻を踏む比喩として、使用は中世の詩人ラングランド (William Langland, c.1332- 87) の『農夫ピアズの夢』 (*The Vision of Piers Plowman*) までさかのぼる。

(三九) 一ヤードは三フィート (約九一センチ四四ミリ)。

(四〇) 十二世紀頃の英国の伝説的英雄・義賊。緑色の服を着て仲間と一緒にシャーウッド (Sherwood) の森に住んだ。

(四一) 死の影の谷は大苦難の時のたとえ。「詩篇」第二章第四節を参照。

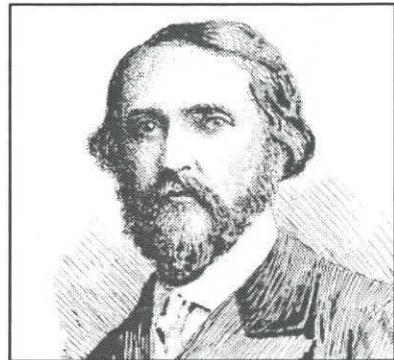
(四二) 脳脊髄液が異常に貯留することにより、脳室が拡大した状態で、脳水腫 (hydrocephalus) ともいう。

(四三) バラ科の常緑小高木。十月頃に葉をつけ、果実は翌春黒く熟す。

【作品と作者の解説】

本邦初訳。原題は「オンジェ通りの不思議な騒動についての話」 (*An Account of Some Strange Disturbances in Aungier Street*)。初出は『ダブリン・ユニヴァーシティ・マガジン』の一八五三年十二月号。一九二三年にベル社からM・R・ジェイムズの編集によって『マダム・クラウルの幽霊』 (*Madam Crowl's Ghost*) の中に再録された。

レ・ファニュ (Joseph Sheridan Le Fanu) は一八一四年にダブリンの高貴な家に生まれた。祖母と大伯父は劇作家であり、姪のローダ・ブローントン (Rhoda Broughton, 1840-1920) は小説家。ダブリンのトリニティ・カレッジで法律を学び、一八三九年に弁護士の試験に合格したが、法律の職業には就かず、その年にジャーナリストになって、『ダブリン・イヴニング・メール』という新聞の刊行を始めた。一八六一年に『ダブリン・ユニヴァーシティ・マガジン』の経営者となり、この雑誌の編集を一八六九年まで続け、そこで自分の作品の多くを連載した。一八四三年にスザンナ・ベネット (Susanna Bennett) と結婚したが、妻は十五年後に死去。彼の方は一八七三年に生まれ故郷のダブリンで死んだ。享年五十八歳。



レ・ファニュは生涯に長篇小説を十五篇、短篇小説を八十篇ほど書いた。彼の作品は言葉数が多く、くどくて難解だと言う批評家もいるが、推理小説の形式を採ったプロットは巧妙で躍動的である。彼の幽霊物語は現代の恐怖小説の先駆けで、その特徴はいつも美德が勝利を収め、いつも超自然的な出来事の説明がなされるとはかぎらない点にある。彼はしばしば「アイルランド幽霊物語の父」と呼ばれ、ヴィクトリア朝のアイルランド小説家ではリーヴァ (Charles James Lever, 1806-72) の次に有名であった。吸血鬼を描いた中篇小説『カーミラ』 (*Carmilla*, 1872) はブラム・ストーカーの『ドラキュラ』 (*Dracula*, 1897) に影

響を与えられている。

ヴィクトリア朝文学における都市生活者の狂気：
その社会的および心理的文脈の解明

2008年3月発行

編集発行 名古屋大学大学院国際言語文化研究科

発行者 松岡 光治

TEL: 052-789-4864

E-mail: mitsu@lang.nagoya-u.ac.jp

URL: <http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/>

印刷製本 名古屋大学消費生活協同組合

印刷・情報サービス部